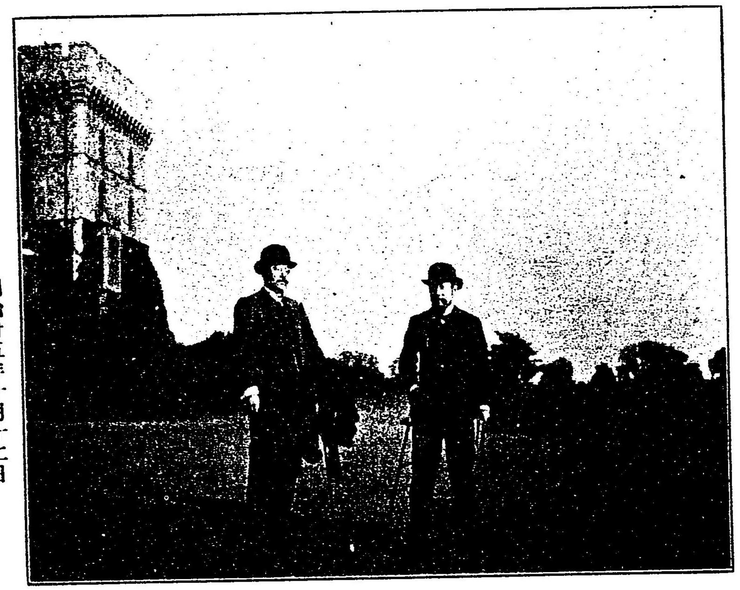
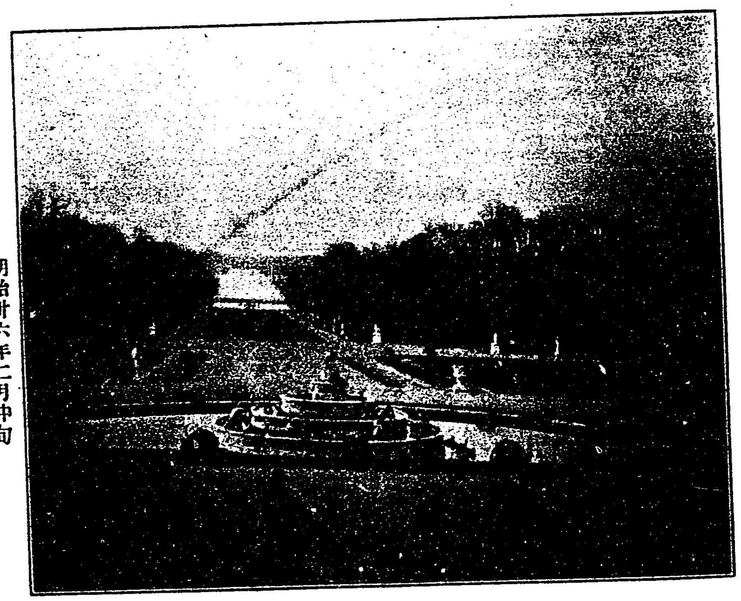
大塊一塵

政教社

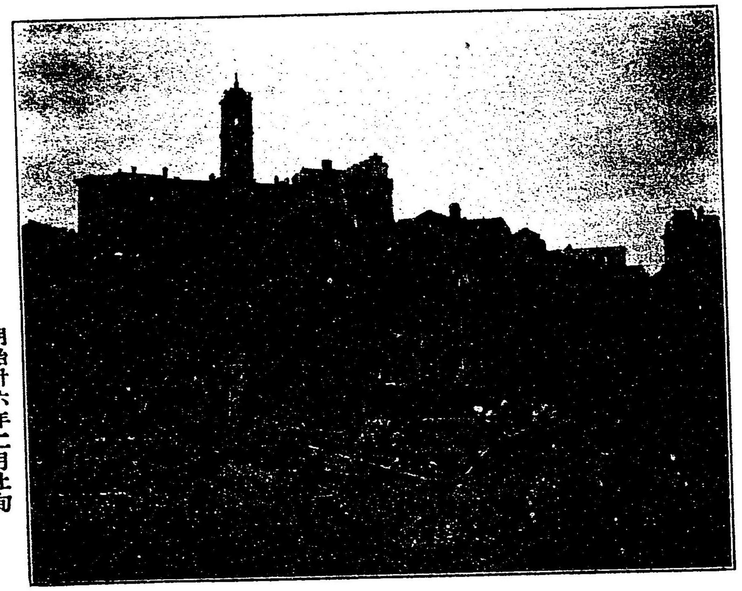
明治卅五年八月十六日
英國スピツトヘツド艦艦式の際
日本軍艦高砂甲板上にて



明治卅五年十月十二日
英國ウヰンズル離宮にて

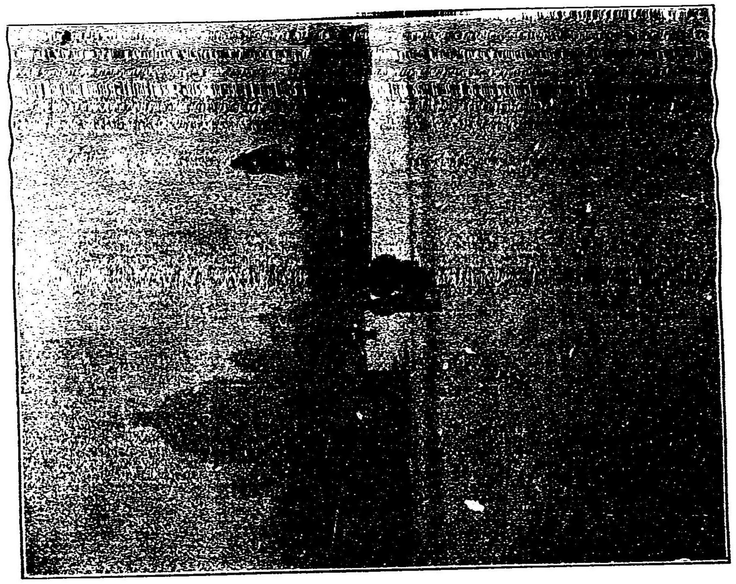


明治卅六年二月中旬
佛國ヴエルサイユ後苑にて

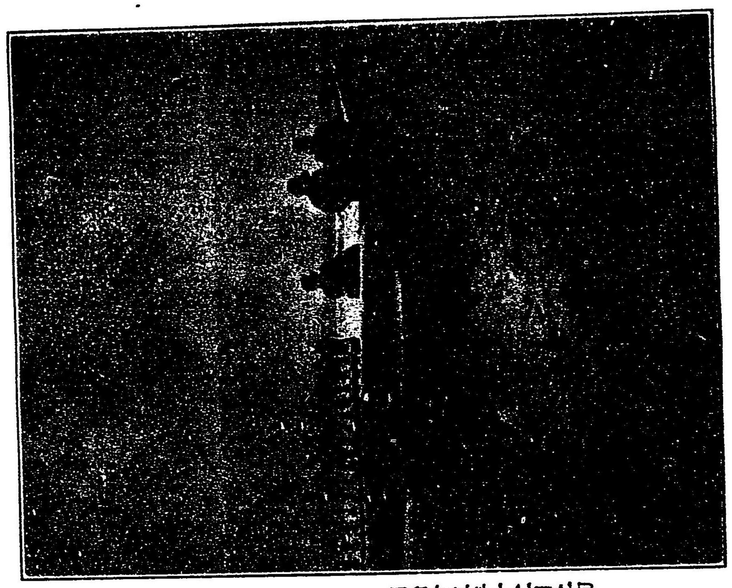


明治卅六年二月上旬
伊國羅馬の舊址にて

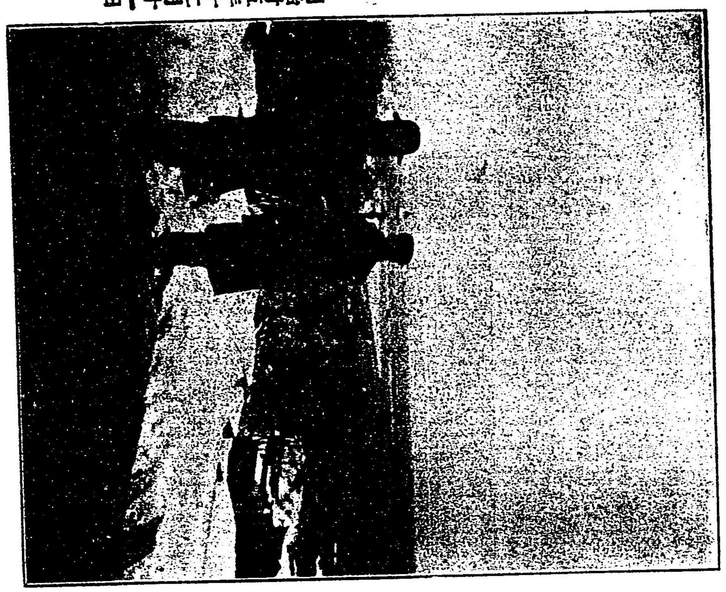
明治卅六年二月上旬
伊國ナポリ旅舘プリストル門前にて



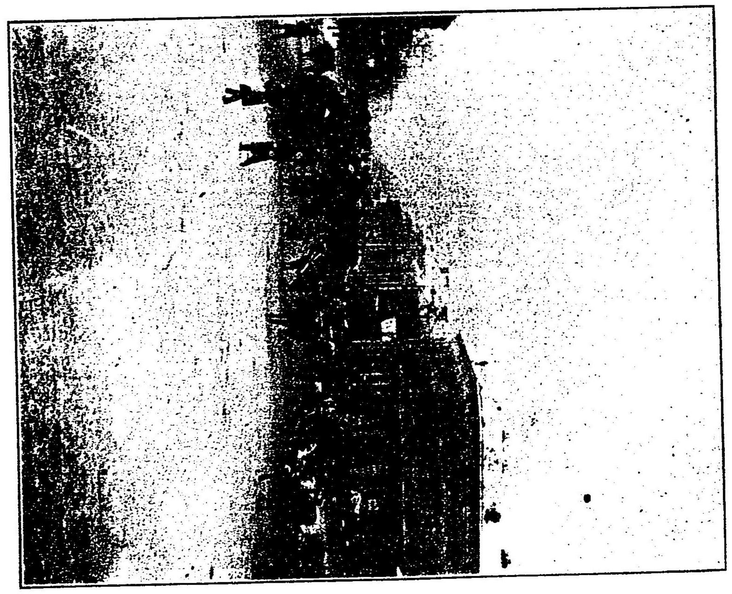
明治卅五年十二月上旬
タケ手の近傍にて



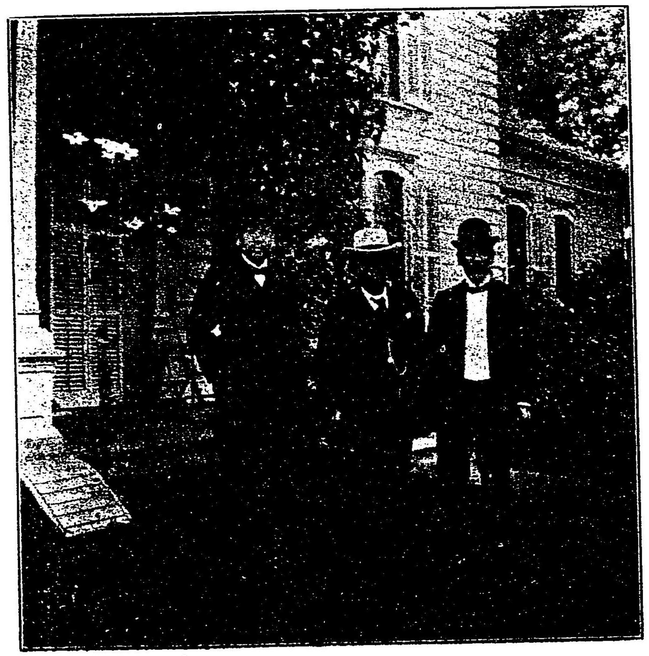
明治卅五年十二月上旬
ゲア河畔にて



明治卅五年十二月十一日
露國オデッサ港にて



明治卅五年十二月十八日
プルガリア國ソフヰヤにて



明治卅六年五月中旬
米國加州サンタローザ長澤氏邸宅にて

布哇に於ける日本勞働者

例言

一、本書は主に雜誌『日本人』に載錄せしを集めしものにて、わが言はんと欲する所の一部分に過ぎず。

一、本書は必ずしも旅中の觀察より成りしにあらず、而も旅中の觀察を最も多しと謂はざるを得じ。

一、本書は己れ一身に關する紀行體の者を收めず、同行知友の撮影せし所數葉を揭げて是れに代ふ。

目次

旅行……一
洋行……九
日本人の性質……一五
島國の悲觀……二〇
小國の悲觀……二六
海外に於ける日本人……三二
朝鮮……四五
支那人との交際……四九
印度の酷暑……五四
印度の名區……五九
英佛獨及び露米阿……六三
日本の社會と英國の社會……七二
日英同盟……七九
日本の社會と佛國の社會……八四

京都人と巴里人……九一
日本の社會と獨國の社會
日本の社會と伊國の社會……九四
日本の社會と澳匈の社會
露西亞分割……一〇二
露　兵
露　藝……一一〇
亞米利加魂
北米合衆國……一一六
ローヅの理想
亞弗利加の發展……一三二
兩洋思想の接觸
來るべき水力時代……一三五
奢侈品と必要品……一三七
大塊一塵……一四五
旅　行……一五一
人の旅行する、脚袢草鞋なるあり、腕車肩輿なるあり、或は陸に汽車海に汽船なるあり、近きは千里廿里、稍〻遠きは雲山三百里、北北海に到り、南九州に臨み、更に海を渡り、朝鮮より支那、又は西比利亞、次で歐羅巴に、亞米利加に、各〻其の目的地點を指して發足す。
既に近海を離れて大洋を駛する、上下一碧、浩蕩涯無し、時には則ち頽瀾萬重、時には則ち皎月千里、會〻一點の青、螺の如きを認むるあれば、須臾にして暗雲密布、四邊寥寞として眼界凄し、かゝるもの若干日、港灣に泊し、船を棄て陸に上る、乃ち汽車に乘り、馬車に駕す、忽にして山、忽にして水、忽にして寒村、忽にして富市、森野斷續し、岡陵起伏し、雜穀地に垂るゝ、豐田を過ぎ、羊豚群を成せる牧場を經、林樹蓊鬱たる邊、近く尖塔の天に聳ゆるを眺め、雲烟糢糊たる間、遠く烟突の駢列するを望み、行く〻々其の地の風を察し、時に一斑を觀て全豹を推測し去る。
其の特に險を冒す者は、中央亞細亞の曠野より、波斯亞剌比亞の廢墟を經て畜獸繁く人跡罕なる阿弗利加の內陸を橫斷し、海を絕ぎりオドラブラタに臨み、地味膏腴に豐草人を沒する南米の大陸を縱截し、狹くして長き地峽を過ぎ

ロッキーの高嶺に傍ひて遠く加拿太の北端に到達し、甚きは雪原氷海を蹈みて北極の探險に從はんとす、其の數〻する者に至りては一生の間行程百萬里に亘り、足跡五洲に遍し。

而も是れ猶ほ旅行の到り極らざるもの、吾人人類は生を地球の上に享け地球は旋轉自動して太陽を週廻し、而して其の週廻する間、百花亂開し、果實黃熟し、樹葉凋零し、枯悴瓊裝し、昔て停滯せず、暮夜空を仰げば、幾萬の群星散點し、眼睫の及ぶ所明滅して終極なし、孰れも目のあたり認知する所なれども、邇きもの尙ほ數千萬里を隔て、遠きは則ち幾億萬里なるや測り知り難し、我が地球は太陽を週廻し、太陽は又た他の大なる太陽を週廻し、漸く廻ぐりて涯際なき宇宙の間を旅行す、而して其の大なる太陽を週廻する際に生ずる種々の變化や到底人生一代の間に見るべからず、幾十代幾百代を經て僅に之を知るを得べきのみ、幾十代幾百代を經て僅に知るを得る所といへど、謂ふ所の變化は實に星宿間に於ける現象の變にして、其の單座の一星は地球より大なること幾億萬倍なるや量り知るを得ず、是等皆な太陽の轉徙するに從ひて或は近邇し或は遠隔するもの、かく此間に於てする旅行は、焉ぞ遠くして且つ大なるものと謂はざるべけんや。

旅行の範圍よりして觀る、其の遠近大小の異なる寔に此の如きものあり、而も又た別に其の種類より觀ざるべからず、如何なる目的を以て旅行し、如何なる準備を以て發程すべきかは、須らく考究すべき所に屬す。世界の廣き、日々人の旅程に上ぼる、其の幾許なるを知らず、車や船や、皆な常に旅客を搭載し、都府幾千の旅館より小市陬村の木賃に至るまで、悉く室を掃ひて客の來たるを待つ、以て略ぼ數の非常なるを想像し得ん。然るも旅行の効能は目的によりて等差あり、漠然旅程に就くは宛も夢中に逍遙するに均し、茫乎として得る所ある無きなり。大約目的とする所のもの三個に分かる、第一知見を博むるが爲め、第二人格を鍛錬するが爲め、第三身體を健康にするが爲め、是なり。

知見を博むるが爲めとは、百聞一見に若かずといふの義、其の謂ゆる一見なるもの、學術の爲めにするあり、風俗を察し時勢を料るが爲めにするあり、又た風景に接し詩想を錬るが爲めにするあり、各〻百聞に勝るもの有るべきも、一見をして斯る益あらしむるには豫め準備を爲すの要あり、若し準備を整へて程に上れば必ず得る所あるべきが、之に反し準備無きものに在りては一見が十見なりとて得る所幾許も有るべからず。

例せば人皆な無數の星辰を天空茫漠の際に望む、而も多くは單に爛然たる小光體の點在せるを看るに止まり、特に何等の想考する所あらず、獨り天文學者は仔細に此の小光體を注視し、深思精考するに因りて年々多少の新發見あり。之と同じく洋の東西に於て世界巡遊の途に就ける者既に甚だ多く、今現に就きつゝあるも亦た鮮からざれど、其の多くは如何の狀にて通過するか。香港に我が水天の小聚あり、中に此船より彼船に雇はれ十年二十年の長日月を航海に消過

せる者あり、彼等は殆んど世界の港灣として足跡の印せざる莫く、其の親見目睹するところ博しといふべし、而も彼等は濠洲の東にして阿弗利加の西なるさへも知らず、或る者は珍花亂れ咲き佳禽翔舞する熱帶地方の森林を逍遙し、或る者は盛衰興亡備さに歷史を飾れる幾千年前の廢趾故蹟に彷徨す、而も遂に何の感ずる所あらず、歌一首もある無し。若し準備ある者をして斯境に臨ましめんか、地理學上に貢獻する多大なるべく、秀吟佳調、歌ふべく誦すべきもの吻を衝て層出せしならんに、唯だ準備無し、故に得せるかの如く裝ふを得、其の三たび外務大臣と爲りしもの强ち盲蛇的の大膽とのみ限らじ。幾回巡遊し幾度其の地を蹈むも漫然として過ぎ去る。

凡そ事物の眞相は目に視うる處よりは寧ろ內部の隱秘なる處に存す、遊星の旋廻するの其の引力に因ることは一般に信せらるゝも、云ふ所の引力は全く目に睹る可らざる者たり、國家の情勢も目に睹ること難く、終日市街を步して竟に見るを得ざらん、之を知るには必ず準備なかるべからず、準備ある者は身未だ其の地を踏まずとも、單に目睹せる者よりは更に善く通曉するあり、是を以てカントは足鄉里を出でずして地理學を敎授せり、大隈氏は海外に往進せざりしが爲め損する所なきに非ざれど、世界の大勢に關して久しく海外に觀光せる者よりも多く曉得せるかの如く裝ふを得、其の三たび外務大臣と爲りしもの强ち盲蛇的の大膽とのみ限らじ。

詩人の風景を謠ふや、多く想像に因りて潤飾し、而して想像に因り潤飾せる所の却て實境を目睹する者に優ることあり、謂ゆる歌人は坐がらにして名所を知るとは多少事實に庶かし、既に詩歌的の感想を備ふる者は實境に接して大に發悟することあるべきも、感想の尙ほ備らざる者は一生を旅行に費すも、或は毫末の得る所無くして止まん、昏鈍なる者に在りては一聞百見に若かざるべし。

人格を鍛鍊するが爲めとは可愛ひ子に旅びさせよといふの義、其の種々の境遇に接するよりして觀、種々の人物と對話するよりして觀、又た己れ自身の處置を爲さゞるべからざるよりして觀るも、旅行は實に人心に益すること大、而も此れ豫め覺悟を要すべきもの、よし種々の境遇に接するにせよ、眞實此に關繫するの決心なくば何の益をも得ざるべく、或は種々の人物と對話するにせよ、唯だ寒暄を叙するに止まれば格別の効を見ずして已むべく、又た己れ自身の處置を爲さゞるべからざるにせよ、苟も此邊に勞苦すべき機會に遭遇せざれば亦た格別の効を見ずして已むべし。內國巡遊の途に就くもの晏起して汽車に投じて溽暑旅館に宿泊せば、家に在ると同樣にして、心胸を鍛鍊するなど思ひも寄らず、海外遊歷の行に上るも、汽船に乘り汽車に移り、一定の馬車を備ひ一定の旅館に着し、而して一定の場所を巡視して故國に歸來するが如き、心胸を鍛鍊するに何の効益か之れ有らん、金を散しさへせば以て多樣の便利を得べく、多樣の快樂を享受し得べきなり。

夫の素封家の海外に旅行するを見るに、支度の裕かなるが故に意に任かして各處に到り得ざるは莫く、到る處に好遇されざる莫く、嬉遊歡

娯求めて得ざるは莫く、用務萬端欲して辨せざるは莫し、其の從者を隨伴せる者に在りて特に然りとす、羇旅の艱苦は一も經嘗する所なく、寧ろ樂みて返るを忘るゝの狀あり。是れ故に維新の後ち舊諸大名の彼地に向ひて發程する者一時接踵せしが、巡遊幾千月にして歸るや、依然たる吳下の阿蒙なりき、甚しきは普通の禮式をだも辨せず、居留の外人と席を同くし、慶弔を顚倒して嗤笑を招きしあり。かゝる人々は幾回旅行に出づるも終に得る所無かるべし、これ旅行を以て道樂の種類とし、恰も劇場に假裝の舞戲を觀、別墅に山水の好景を賞すると同一の心を以て此間に處するに因る、具さに艱苦を嘗めて、心胸を鍛錬せんとの若き、其の夢想だもせざる所たり。

若し旅行によりて心胸を鍛錬せんと欲せば、初より其心して羈程に上り、種々の艱苦を嘗め種々の經驗を積むに勉め、雜多の社會に出入し雜多の人物と對話するに勉め、如何なる難境に陷落すとも窘窮して悶々せざるの覺悟をきめざるべからず、而して是れ皆な勉強の効を積みて得べき所、準備無くして漠然海外に發程する者の能く望み得べき所にあらず。既に此の準備あり此の覺悟あれば、心胸を鍛錬するに於て必ずしも遠く海外の地を蹈むを要せず、近く內國の遊歷を以て得る所尙は饒多なるべし、華族の累年外遊せし者の歸來外人と應對するに當り却て國內に留止せし者に若かざる多きは是れ行爲を錬磨するの足らざるが故にして、又た一の例證とすべし。豐資にして旅行に出づるは遊樂の爲めとしては則ち可なるも、心胸を鍛錬せんが爲めとしては頗る謬れり、其の初め外遊の途に就くに際し、舟中手を握りて互に別を惜む、前途の艱苦洵に憂ふるに堪へたる如し、然れども汽笛一聲袂を別つの後に及びては前きの憂へしもの須臾にして散し、爾來幾千月の旅行は一種の嬉遊と化し、到る處に心身の快樂を縱にするを得、況んや國內の旅行を爲す者に於ては、宛如たる遊覽に了るもの滔々として皆な是なり、かくの如くば謂ゆる可愛子に旅びさせよとは却て其の子を戕ふの媒介と爲らん。

身体の健康を進むる手段としての旅行は著しき効あるもの、單に土地の變更よりして考へ、氣候の良好なる處に徙るよりして考へ、又た身体に運動を與ふるよりして考ふるも、以て其の効を察知すべし。然るも猶は一概に言ふべからざる者あり、土地を變更するは精神作用にて身体に影響を及ぼさんとてなり、平常悒鬱として娯まざる者の住宅を離れて耳目全く新なる處に徙居し身心次第に快活に赴くが若き、同一の境遇に倦みはて病なきに病ある如く思惟する者の他鄉に移りて精神の爽快を來たし身も亦た健全に復するが若き、往々之れ有るを見れども、人に從りては其の境を變ふるの故を以て却て悒鬱を倍す者なしとせず、家を離るゝに因りて哀心の安んじ能はざる者あり、國を出でゝより懷鄉の念暫くも息まず、愁思病を作して爲めに精神の重荷を增す者あるは亦た數〻見る所、均しく地を變へ、而して一は鬱悶を掃去し一は之を增倍するの異なるあるは、多く其の人に在り、必

ずしも旅行の關かる所にあらず。婦人小兒の如き單に土地を變ふるを以て効の明かなるを見ることあるも、是れ毎に近邇の地に於て然りとすべく、千里の遠きに於て却て効を失はん。

氣候の良好なる地を擇びて徃るは、氣管を患ふる者に缺くべからざる所、而も之を擇ぶに先ち其の氣候の眞に適するや否、其の地の果して患者を收容するに便なるや否を確めざる可らず世評嘖々たる地にして、却て氣候の良からざるあり、又た肺病患者といふの故に、四圍の人の蛇蝎視するあり、氣候の良からざるは適〻病勢を助長するの階と爲り、傍人の嫌忌するは往々患者の神經を刺撃すること少からず。若し社會をして病者を憐愍するの情に切、仍て氣候良好にして轉地に適する處を彼等に讓り己は則ち絶險に景勝を索めしめば、太だ慶すべきも、現今殆ど病者の獨占に委ぬる觀あるは唯だ一の須磨あるのみ、之を除きて大抵健康者の占むる所にして、動もすれば病者を驅逐するの傾向あり、殊に海岸の空氣は氣管を患ふる者に特効ありと稱せらるゝに、海岸の稍〻景致好き地には俗客毎に麕集せり、爲めに人を轉地せしむるに豫め其の地の情況を査察するの必要なる者あり。

身體を運動するが爲めに旅行するといふも、船車の便ある今日の如くにては別に身體に効ある無し、身體に効あらしめんと欲せば、近きは斷じて徒歩又は自轉車の類を以て旅行すべく、遠きは成るべく亞細亞の内部を跋渉するを可とす、且つ身體の運動としては一時の旅行は効少きのみならず、猛劇の運動を爲し然る後全く靜處するは時として害を招くものなれば、身體の運動の爲めに計る者は成るべく規則立ちて旅行するを要す。夫の常時家居する者の偶爾旅に出づるは幾分か精神に利すべけんも、強健の度を增進するに多くの効あらざるべし。

洋行

吉田松陰の海に浮ばんとせし以來、外國を巡ぐるの漸く必要視せられ、維新改革後、洋行といふこと世上一般の流行と爲り、華族に留學及び周遊を奬勵するの勅諭さへあり、岩倉大使が多數の隨行員を率ゐて出發したるも、一分斯意に於て爲し〻なり、之を外にし公使館に赴任する者、學校に入る者、將た單に漫遊を事とする者、名の相異なるに拘らず、皆な殆ど同一に看做され、一たび洋行せざれば普通の世間話しもむづかしきかに考へられたり。爾後十年を經、二十年を經、三十年を經て今日に至る、其の間種々の變遷ありて現はれ、或る點に於て停滯して進まざるに反し、或る點に於て著しき進歩を示し、前年の事を追懐する宛がら夢の如く想はるゝあるに、洋行といふ一種の流行は今猶ほ依然として往日の如く、而も其の意義の茫漠にして指稱の曖昧なること特に減ずるなきは寧ろ怪むに堪へたり。

小學校の教科書にも地理歴史の大要の說き示され、此類の智識の大に進歩せるに、洋行とい

へば目的方法の何たるをも問はざる形あるは何ぞ、洋行せざれば通常の談話にも差支へ、而して洋行歸りなる肩書の附せらるゝ、乃ち之れ有るが故に謂ゆる大勢に精通せりと視らるゝの場合なしとせず。然るも今の時は多少其の間に差別する所なかるべからず、固より或る種の人々は夙に差別し來れるに相違なきも、一般の社會にありては彼此を混同して一と爲し、爲めに善事の誣ねられて隨事視され、隨事の誤まりて善事視さるゝ頗る多し。斯くして普通に洋行と名くる所のものに差別なしとせらるゝも、今日の洋行は最早以前の如く雜駁なるを許すべからず洋行といふ肩書の下に一樣の判斷を下すは謬れるも甚だし。

均しく洋行といふ、而も人々の境遇各〻相ひ同じからず、意見亦た區々に分れ、洋行といふ事して其の意見の聽くべきもの有れど、亦た全く聽くに足らざる無しとせず。當今人の海外に赴く、官の用務を帶ぶるか、會社の用務を帶ぶるか、留學の爲めか、又は漫遊の爲めか、就れか其の一に出でず、其の目的の限らるゝ、得る所も亦た自ら限られざるを得ず。其の帶ぶる所の用務の衛生たり、鑛山たり、工業たり、牧畜たる、各〻其の用務に應じて調査を限られ、其の限られたる範圍内によりて孜々勵精す。かの留學の爲めに行く者亦た然り、專門の中、更に專門あり、己れ關係の公館に出入し、己れ關係の教場に出入し、見聞する所亦た自ら限らる、己れの關係せる事に就きて新たなる智識を得るとも、關係せざる事に就きて何の智識をも得ざる稀れならず、一概に洋行なる名の下に其の言ふ所を聞きて信ぜんには、時に大なる誤謬に陷らん。

次に人々各〻行く處を異にし、隨ひて併する所を異にす、官命を帶びて行く者は多く獨逸を主とし、特に留學を命ぜらるゝ者の若き、殆んど皆な之を中心と爲すに反し、商業の關係よりする者は多く英國に留り、而して或る職業を求めんとする者、特に己れの力に依頼して成功せんとする者は米國に留まる最も多し。一地に在留すること久しき者は、各〻己れの見聞する所を以て正なりと信じ、談偶〻西洋の事に及ぶ、則ち互に己れの見聞せる所を以て一切を律し、己れの習へる所を指して直ちに之を西洋風なりと稱す、而も其の謂ゆる西洋風なるものは單に己れの在留せる或る國の風たるに止まり、之を他の諸國に於けるものと較ぶる、則ち全く趣を異にするもの少しとせず。

例せば相ひ會して酒宴を催すに方り、個々別々に酒食の費を支拂ふこと是れ獨逸に於て見る所の風なり、故に留學生の獨逸より歸る者は動もすれば斯風を應用し、其の即ち西洋風なるを聲言す。然れども斯の若きは、英國に在留せる者の眼よりせば聊か野鄙に視え、紳士としては宜しく更に鷹揚にして且つ悠然たる態度なかるべからずとせらる。英國にては諸事念を入れて手堅くし、一の工場を造り、若くは一の器械を据え附くる、成るべく永久に持續せしむるを好ひ、英國に在る者は、視て美事なりとして感服するに、米國にては此と意を異にし、百事其時

の用に應ずるを旨とし、苟も當時に在りて最も進歩し且つ最も新たなるものを以て他に一歩を進むるあれば則ち可、若し更に進歩し又た更に最も新たなるもの、他に出づるある、直ちに其の建造する所を毀ちて之を新たにするあるのみ要するに他の進歩に應じて幾回にても改むるに吝ならざる、是れ米國に於ける一般の風にして、夫の念を入れて手堅くするが若き、質に彼等の多く意を用ゐざる所、而も其國に入る者は各〻其の見る所のものを以て是とし、己れの是とする所を第一として他は皆な及ばずと爲す。かく彼此相ひ異なるの風を觀て互に是なりとし、己れを揚げて他を排せんとす、其の間に於て謂ゆる西洋風なるものを採らんとする、それ能く得んや。

次に外に留まる歳月の長短によりて異同を生ず、若し急速に世界を巡遊せんとする、則ち三ケ月にして能くすべく、若くは半歳にして能くすべく、一年にして能くすべし、而して其の長きに至りては五年十年を經、或は一生を終ふるも足れりとせず、如何に歳月の短きにせよ、猶ほ洋行たるを失はず。如何に其の長きにせよ、亦た同じく洋行たるを變へざれど、而も其の旦らく留まりて少しく觀察すると、長く留まりて多く觀察すると、異なるある頗る大ならざるを得ず。

次に準備の豫め整ふと整はざるとによりて異なり、出發に先だちて豫め大に取調ぶる所あるとあらざると、其間著るしき差異の現ずるあり、出發に先だちて取調ぶる所あれば則ち容易に判知し得べき事も、唯だ然らざりしの故を以て久しく留まりて而も竟に判明し難きことあり。

今や飜譯書の多き、内地に居て之れのみを閲讀するも以て多量の智識を收拾し得べし、飜譯書といへば人概ね之を輕んじて讀まざるも、熱心に之を閲讀する多き者は、智識の量に於て寧ろ十數年間彼地に衣食せる者に比して更に優るなからず。足既に日本の地を離るゝや、何れの國に行くも必ず幾くかの日本人を見ざる莫く、而して彼等の中には單に食事の方を知り入浴の方を暗んずるに止まり、是等日常必需の事を除きて則ち何の知る所無く、又た何事の暗んずる所あらざるあり、かゝる輩は接踵して歸り來るとも、何の益すべきなく、又た何の用をも爲さゞらん。故に出立に先だつ準備は成るべく多く且つ備はらんことを要す、其の洋行の目的たる調査の事項に就きて豫め充分の取調らべを爲すの必要なるは言ふまでも無く、關係諸國の言語も亦た成るべく習得し行くを可とす、凡そ事必ず言語に依るに非ずんば判知し得べからずといふの理なく、物により無言なる方却て理會に便なる無きに非ざれど、單に言語の通せざるが爲めの故に徒らに時間を空費するは通常逃れざる所地位あり名望ある者にして唯だ言語の通せざるが爲めに全く其地の事物を解知する能はず、僅に從者の談話に聽て察する所あり、而も大に誤まらるゝを免かれざるもの往々にして之れ有り。

然りと雖も尚ほ之よりも必要にして總てを蓋ふに足る者あり、即ち人々の才能是れなり。如

何に其の土地に留まること久しく、如何に其の國語に通ずるの熟するとも、苟も判斷の能にして遲鈍なる、其の得る所極めて少からざるを得ず、而して判斷の能の最も敏なる者は、片言隻語の通ぜず、宛がら啞者に等しきも、能く直覺して看破し以て言語にて通ぜざる所を解知すること無しとせず、若し一概に其人の居るの短かきと言語の通ぜざるとを以て之を貶するあるは、或は大に誤謬に陷ゐらん。人々相ひ集まる、動もすれば則ち言ふ、彼の如き不充分なる觀察にては何の得る所もあらずと、以て暗に我が居るの永きを誇らんとす、然るも其の謂ゆる居るの永かりしもの、果して充分なりしや否や亦た知り難たし。たとへば我が內地に居るの人幾千萬を以て計ふべく、皆な此處に生まれ、此處に長じ、而して又た此處に死す、其地に居るの長き、洵に之に尙ふるなし、而も此の幾千萬人中に於て、善く日本を知る者果して幾何かある。單に一東京市のみに就て觀るも亦た然り、此處に住する市民、無慮百數十萬を以て算へらる、而も善く東京市を知る者果して幾何かある。更に市の一部なる日本橋區に就て觀る、此處に生死する幾萬の區民中、善く日本橋區を知るもの幾人かある、僅に數ふべき程なるのみ、而して能く其の風俗を辨じ其の眞相を解するは、却て田舍より出で來れる者の中にありて存す。其の觀るの精はしきと粗なると、將た當るべからざると、畢竟するに其の人にありと謂ふべし。

總ずるに單に洋行せりといふのみにては以て何事をも言ふべからず、必ず其の人の從事する所を觀ざるべからず、其の居る處を觀ざるべからず、歲月の長短を考へざるべからず、素養の有無を察せざるべからず、而して特に其の才能の如何を測らざるべからず。蓋し才能の劣れる者に至りては一地に留まりて其の一生を終ふるとも、依りて得る所や知るべきのみ、此に於てか洋行の事も亦た考へざる能はず。

日本人の性質

日本人は如何の性質なるか、言を作す者多く曰ふ、淡泊なれども思慮を缺き、快活なれども忍耐を缺き、怜悧にして一時を善くすと雖も、意志に弱くして遠大の經營に堪へずと、初より一定せるかの如く認めらるゝも、其の眞に然るかは、全く措いて問はず。由來江戸ッ子は快達を之れ好み、固執を之れ惡み、宵越しの錢を遺はざるを誇ると稱せるゝも、而も謂ゆる近江泥坊

伊勢乞食は、全く此れと反對にして、多少資產を有する者も幼より外に出でゝ丁稚奉公し、還りて專心商業を營み、既に財を積みて尙は節儉を旨とし、矻々勗勉して懈ること無し、たとへ支那人と雜處して厘毛の爭ひに從事するも、決して之れに輸せざるべし。一概に日本人を評するの當たらざる、亦た以て想察すべし。

社會の變動に際し、人々業務を轉じ、競ひて

舊を捨て新に就くは、蓋し已むを得ざる所。王政維新は著大なる變動といふべく、其の前後多樣の事變あり、士の工と爲り農の商と爲りたる、特に怪むべしとせず、然れども轉變を好むは必ずしも其の性質なりと限るべからず、幕府時代百年二百年業を世々にするが常なりし。更に歷史に溯りて通觀し、英雄豪傑を擇びて其の時代を代表せし者とし視る、則ち同時代に駢び出でし者にして頗る性質を異にせしあり、其の孰れを採りて當代に於ける日本人の性質とすべきか。

平清盛と源賴朝とは略ぼ時代を同くせし者、而も傾向の此の若く相ひ違へるは少し、清盛は感情に馳せ、慾念を縱にし、時に大に喜び、時に大に怒り、少しく順境なれば意氣揚々、乘じて止まる所を知らず、少しく逆境なれば懊惱煩悶、復た從容事を圖るに堪へず、近臣をして成親を笞たしめ、壁を隔てゝ其の泣聲を聽き而して可と言へる、以て其の子供らしきを見るべく、上皇の擧措を怨み、已れが功の大にして而も罪せらんとするの非理なるを訴へたる、以て其の直情を見るべし。而して清盛に看る所は平氏を通じて看る所、當時の平族は皆な幾許か此風を帶びざる無く、獨り重盛は除外例たるも、其の除外例たるだけ其れだけ同族の間に容れられず爲めに憂悶して早く斃れぬ。總して一時を快にするに急に、徐ろに前途を慮るが如き事なく、謂ゆる驕る者久しからずとは最も適切なりとして知られたり。

賴朝は則ち然らず、喜怒色に形はさず、凡そ事を成さんとする、必ず先づ其の前路を考慮し、或る困難の橫はるを知る、機會の乘ずべき有りと雖も輕々しく乘せず、富士川に平氏と對陣し、水禽の亂れ飛びて敵軍を潰走せしめし時、彼れ喜びて直ちに追はんともせず、靜かに軍を纏めて鎌倉に還れり。義仲を討ち平氏を覆へさんとせる、二弟をして軍を帥ゐしめ、己れ容易に出でず、景季の池月を乞ふや、乃ち磨墨を與へ諭して曰ふ、他は吾が乘に充てんとする所と、而して高綱の來り見ゆるに及びて之れを給せり、總べてを指揮して已れ最後に勝を占めんとする所、一擧一動に於て歷々見るべし。平氏既に滅びて共に功を爭ふ者亦た斃れ、以て心慮を勞すべき者跡を絕つに及び、乃ち大に士卒を集め列を正して京都に出で參內しぬ。其の二弟を殺して自ら枝葉を芟るが如き、一見淺慮の所行なるも、實は將來を慮かる深きに過ぎ、過ぎたるの猶は及ばざるが如きのみ。而して源氏の一門は其の性格に於て多く類似する所あり、獨り義經は群を脫せしが、其の群を脫せしだけ其れだけ異彩を放ちて早く斃れたり。源氏の後を受けし北條氏も亦た同樣の傾向あり、其の刻苦忍耐、喜ぶべきを喜ばず、怒るべきを怒らず、偏に抑損して以て成功を待つ所、特色明かに知らる。平氏の彼の如くして、源氏及び北條氏の此く如くなる、果して孰れを採りて當代に於ける日本人の性質とすべきか。

人或は楠正成の湊河に戰死したるを難して淺慮なりとし、日本人の動もすれば一時を壯にせんとして爲めに大功を遺るゝの弊あるを說く。

一般の日本人に就ては姑らく言はず、正成の死は果して一時を壯にせんが爲めなりしか、其の初めて鄕を出でし以來、事を成す皆な順序あり、赤坂に城き、千窟に轉じてより、北條氏仆れて足利氏起り、更に討伐の師を率ゐて之に抗せしまで、常に能く成し得べきを覩て而して後ち事を擧げ、嘗て一たびも僥倖を希ひしとあらず。謀るや周密、進むや必勝、而して必敗を期して湊川に赴きたる、萬已む可らざる事情の存せしが故ならずや、即ち己れの門地を以てしては到底是より外に出づる能はずと覺知せしもの、忍ぶべきを忍び、堪ふべきを堪へ、他に取るべきの途なきに至り斷々乎身を以て殉したる、斯かるを若し淺慮とする、淺慮の意味は全く判明を缺かん。固より正成をして直義の如く奸黠ならしむる、則ち此際に處して命を捐てざりしなるべし、蓋し正成の如きは、善く耐ふると善く斷ずるとの中を得たる者とや謂ふべき。

豐臣秀吉と德川家康と亦た時代を同くして而も性格の相ひ違ひし者、秀吉は善謀善畫、必勝を期して然る後に起つ、明智を討ち、柴田を討ち、北條を討ち、島津を討ちたる、皆な豫め全勝を期したるに非ざるは莫し、其の獨り朝鮮を討ちて功なかりしもの、全く外國の事情に明かならざりしに坐す、寧ろ報告者の過失といふべきのみ。かく勝を制するに必ず勝つべき所以のものを計りしと雖も、偏に成功に急にして、唯だ勝を得ば則ち可なりとし、復た深く他を問はず、躬自ら越後に赴きて景勝と誓へる、氏鄕に百二十萬石の大封を給せる、家康に關八州を與へたる、以て其の泰平を致すに急なりしを覩るべく、時に不平を懷くの徒なかりしは勿論なるも、此の如くにして永く平和を保持し得べきかは少しく怪むべし。彼は陣に臨む毎に必勝の算ありしも、累次勝を制するの後を如何にすべきやは其の深く念ひ到らざりし所、朝鮮を伐ちて能く功を收めざりしも、たとへ戰勝ちたるにせよ、其の後を處するは頗る困難なりしならん。然るも彼は又た自ら計ることの疎大なるを知る、故に其の病みて起つこと能はざるを知るや、諸侯の中に思慮最も周密なりとせし家康に大事を托せんとし、而して權力の遂に誰が手裡に歸すべきやは深く意とせざりき、其の意氣の落々として拘はらざる寧ろ快とすべきなり。

家康は然らず、彼は案外險を冒すに勇、數〻虎

穴に入るの所行を敢てし、信雄の來り援を乞へる、直ちに起ちて秀吉と戰を啓き、兵數を計れば彼の衆にして我の寡なるは瞭然たりしも、斯かる事は殊に問はざる所。又た景勝を討たんとして宇都宮に向ひ、而して三成旗を揚ぐと聞て直ちに還り、倉卒美濃に出で寡兵を以て即時戰を開始せる、秀秋の內應あるは固より期せし所なるも、其の進退の跡に察する、頗る冒險的行動として評せざるを得ず。則ち時に臨みて爾く冒險的行動を演せしにせよ、全體を通じて見れば寔に熟慮深謀、謂ゆる石橋を叩いて渡る類の人と謂ふべく、常に忍びて少しづゝ進み、絕えて功を成すに急なるの形なかりし。人あり嘗て氏鄕に向ひ、太閤近て後ち何人か天下を得べきと問ふ、氏鄕答へて曰ふ、利家に非ずんば則ち我れ

と、然らば家康は如何と問ふ、答へて曰ふ、客商彼が如きもの如何ぞ之を能くせんと。當時諸侯の家康を目する實に此の如くなりしが、其の此の如く目せられしこそ即ち能く太閤の下に安全を保ち得たる所なれ。常に功を急がず、少しづゝ功を擧げて終に全功を收め、老齡に及びて頻りに佛に祈り、南無佛の字を書して後生を冀へる如き、正に秀吉の爲す所と異るを見る。而して二人者共に一長一短あり、以て遽に是非すべからざらんも、果して其の孰れを以て當代に於ける日本人の性質とすべきか。

日本人は孰れか其の一に似る所あるが如きも之を謂ふは甚だ難きに非ざるか。要するに一言にして日本人を評するは思はざるの甚だしきもの、若し評して當らんことを求むる、更に仔細に考察するを要す。島國的根性を云々し小國的人物を云々するは人を侮り自ら侮る者なり。

島國の悲觀

日本人は國内に蟄居して外に出づるに怯、白人の世界を家とし横行濶歩して到る處に事業を營むと狀を異にす、是れ鎖港的思想の蟠まれるが故にして、究竟島國的根性の然らしむるなり。と。是の言一應道理ありと聞ゑんも、其の深く考へての事なるやは甚だ覺束無し、恐らくは唯だ漠然として言へるに過ぎざるべく、斯る言を作すものこそ實に壯言自ら快とし、却て何の事業をも成し得ざるを常とす。

我が國情に稽ふるに、鎖港的思想は多少之れ有るを免れざらん、而も國を開きて四五十年を出でず、外國に對する習慣尚は備はらず、其の自由に外人と交際し、自在に之れと應接するの難き、當然のみ、卒然として謂ふ所の鎖港的思想なるものを遺棄し、萬邦一視の旨を體し双手を擡げて外人の來り遊ぶを歡迎するとも、果して幾許の變化を生ずべしとする、風土の穩和なるを悦び、山水の明媚なるを慕ひ、勝區を歷遊するを目的として來航するもの、數を增すは之れ有らんも、影響の彰著なるは則ち此に止まり、其の他特に見るべきもの無くして終らん。

島國的根性とは抑〻何事を意味する、日本は實に島國なり、島國たるに相違なし、島國に居る者の島國的根性を持するは事の自然、奚ぞ怪むを須ゐん。加ふるに島國に居る者は支那の如き大陸民の徒らに疎大なる思想を持すると異なり、英人は自ら島國に居るを以て幸と爲すもの、彼は大陸と風を殊にし、此と思想を殊にす、島國たるが故に、南北東西、意に任かして航行するを得、かの地球を一塊視し、國と國との天然的阻碍あるを知らざるは實に島國の賜たり、然るに已れ現に島國に居て而して島國を非とす、念はざるの甚しきものならずや。憶ふに彼等島國を非とする者の以て憂へとするは島國的根性と鎖港的思想とを同一の意味に解し、其の自國の小乾坤内に蟄伏し小事に齷齪して朽死するを憂ふるならんが、而も是を憂へて如何の利を擧ぐるの心算あるか、如何にして白人の橫行する

が如く國人をして世界に横行せしめんとするか畢竟するに彼等は白人の世界に横行する所以を攻へずして、唯だ自國人の爲す無きを咎むるのみ。

今や白人は世界を家とし、業を營むの處殆んど五洲に遍ねし、而して我れは唯だ絶東の一隅に閉居し企畫之が外に出でず、彼れ白人を以て較ぶ、洵に及ばざるの遠きを覺る。然るも現時我が國人の大に世界の上に事業を遂行し得ざるは、強ち國人の冒險的氣象に乏しきに因るにあらず、將た器局狹小之を經營するに適せざるに因るにあらず、若し此をして一二百年前ならしむる、我が國人は必ず外地を探檢し經營の基礎を造りしならんに、白人の既に先ちて指を各地に染め、意に任かして經營設畫するあり、宛も

往昔匈奴若くは突厥が喚呼して亞歐を席捲せしが如く、東、印度洋を渡り、西、太西洋を絕ぎり、爭ひて庸弱の國無人の地を割有し、苟も船舶の到り能ふ處捜索して餘力を遺さゞりし。若し今日の勢をして太閤の時代に現じ、而して渺茫たる海洋裡取りて領すべき地の多きを知らしめたりとする、彼や必ず進みて取り、取りて更に進み、究索して竭さんとせしなるべく、高山右近の非律賓に行き山田長政の遥羅に赴けるに觀る、印度の征服の必ずしも英のクライヴを待たざりしや必せり、濠や米や何か有らん。

土地を略し領屬を擴ぐるは特に人種の超秀し氣力の卓越せるに由るに非ず、白人は幸にして無人の境を行き若くは稚兒を劫かし其の有を奪ふ蛮如かりしのみ、但だ彼等既に已に其の地を

領し、一定の繩張りせし後、新たに進みて彼れの領域内に入ること頗る難し。一鄉の内にても人の一般に未だ屬目せざるに方り、何人も小資を投じ廣濶なる土地を有するを得るも、一旦既に屬目せる後は掌大の地も尚ほ高價を拂はざるを得ず。今日は白人の始めて土地を諸方に拓きし時と勢を異にし、新たに進みて彼れの領域に入り事業を經營するの甚だ難事に屬せりと雖ども、我が國人の之を難しとするは、白人が黄人の國土を犯かすを觀、其の偶然ならざるを察すべし。

試みに念へ白人の支那朝鮮に對する、我國に較べて大に優れるありとするか、彼等は皆な本國の勢力を籍りて此に臨み、本國の大小强弱に據りて種々の關係を生じつゝありといへど、個人として其の内地に入り自力に頼りて業を營めるは甚だ鮮し、我が國人の支那に遊べる決して多しとせざるも、猶ほ白人に比して著しく下らず、況んや朝鮮に至りては個人として其の地に留れる既に數萬人、列國能く我れの右に出づる無し、不幸にして當途の施設往々にして宜しきを缺きしが故に政府に頼りての勢力は大に露の上に出づる能はざるも、個人としては到る處其の業を得、將來に於て頗る進歩の望むべきあり、朝鮮より延て支那に遥羅に及び、必ず通じて伸ぶるを得るなるべく、たゞ白人の勢力範圍を犯して競爭せざるべからざるに至り、始めて難きを見ん、即ち濠洲に、米洲に、事業の容易ならざるのみならず、動もすれば排斥運動に逢着するの憂あり、而して其の難しとするは朝鮮に入

ると同一の手段に籍りて入るの難きのみ、決して絶對的難事たるに非ざるなり。我れの朝鮮に入るは英人の印度に入れると相ひ似、水の低きに就くが如き狀あるも、白人の邦土に入り白人と伍して與に共に事業を營まんとする、先づ之に應ずるに堪ふるの素養を作らざるを得ず。

我が國人の足跡遍く各地に印せざるは其の本來海外に往き能はざるが故ならず、未だ素養の以て彼地に投ずるに足らざるを以てのみ。現に濠洲に、米洲に、歐洲に、往きて業を營める少しとせず、意外の僻地に業を執れるあれば、又た世界の市場に商店を開けるあるが、更に汎く各地に散居し盛大なる業務に從ふこと能はざるは、即ち素養の未だ充分ならざるが爲めにして、苟も勞働者の如くして渡航せんとする、何處に行くとして堪へ能はざる無きも、紳士の資格を持し其の體面を傷ふ無くして彼地に業を執るの困難たるなり。蓋し白人と雜居し相ひ伍して業を執らんとする、必ず或る種の技藝を備へざるべからず、一藝の備はるある、乃ち何地に行くも不可なる無し、夫の輕業師の若き、文身師の若き、一の末技たるを以て維新前より既に彼地に赴き、各處を巡ぐり本國に歸らざる者ある即ち是れ。但だ更に高尚なる技藝に至りては外地に出稼するほど餘りある無し、斯る教育は尚ほ進歩の著しきといふに至らず、醫として門戸を張れるもの太だ衆きも、普通の免狀を有せるは比較的僅少、多數は則ち舊習の醫にして殆んど賣藥商と擇ぶこと無し、之を外にして多くの技藝亦た概ね然らざるあらず。

一二技藝に超秀せる者を求む、優に白人と拮抗して遜色なきを得、醫の或る科に專門なる人々の若き、獨逸の中央に在るも其の地の大家と並び馳するに堪ふ、機械を事とせる者亦た同じく、其の尤なる者は彼地の大製造場に聘庸せらるれば直に場内の要地を占むることを得べし。斯く專門の名家は之をして歐洲學藝の淵叢に赴かしむるも特に劣る所あるを見ざれど、其の人や極めて少く、稍〻下だれる者も尚ほ少く、而して其の人の寡少なる、これ白人の領域内に投じて活動し能はざる所以とす。固より行きて彼地に業を營む、爾く高尚なる技藝に非ざるも可、多少新種の技藝に熟せる者以て到る處に生計を營むに堪へん、談話に自由なる者の幻燈を以て諸處を巡歷せるに察するも、彼地に住居するの難きにあらず、唯だ其の人の多からざるを遺憾とすべきなり。他日一般に技藝の進歩するに至らば、我が國人の外に出でて業を營む者頗る多きを加へん、啻に朝鮮にのみならず、又た啻に支那暹羅にのみならず、能く白人の都市に住み白人と相ひ伍して業を營むを得べし、たゞ今日は未だ技藝の進境に達せざるを奈何ともする能はず、而して是れ要するに斯る教育の猶ほ進歩せざるに歸す。

我が從來の教育は高尚なる學問の準備として設けられしが如く、偏に準備の爲めに長年月を費やすの風あり、是を改めて一層簡易に特殊の技藝に通じ得らるゝ如くすると、目下の急務なるべし、大に學術を研究し此れと始終せんとする者は則ち之に適する如くせしめ、早く技藝に

通じて職業を執らんとする者には亦た之に適する如くせしめ、既に一應技藝に通ぜりとする、以て內地に在りて生活し得ると均しく更に外國に行きて業を營むを得せしむ、總するに斯る技藝の敎育を施すこと最も肝要の事なり。幸に之れをして廣く行はしむるを得ば、國內に在りて外人と共同して事業を營むも大に進歩すべく、國外に出でゝも亦た大に活躍を試むるに堪ふべく、所謂鎖港的思想、若くは所謂島國的根性、其の滅せざらんことを欲するも得ざるべし。此を是れ念はず唯だ國人が白人の如く外地に事業を營み能はざるを云々するは、漫りに望むべからざるを望みて煩悶する者、其の癡騃ろ憐むべし。凡そ特殊の技藝を有する無くして徒らに志のみ大、外國に赴き業務を求めんとするとも、概ね効を收めずして終らざる莫く、若し窓ふき皿洗ひの群に入る、漸くして破落戶と化せざる鮮し、人の海外に業を執らんことは、深く望むべしと雖も、漫然之に奮發せんことを勸むるよりは、更に技藝の敎育を一般に汎行せしむるに眼むるに若かず。

小國の悲觀

小國たるを悲觀し、小國なるが故に百事意の如くならずとして慨する者あるが、言ふ所の謬妄たる、かの島國的根性を非とすると同じ。其の土地狹小以て國を富まし兵を強くするに難し、宜しく更に之を大ならしむべしといふゝの、必ずしも理なしと也ざるも、而も彼等斯の言を作す者、豈に遽かに我れの大國たるを期し得べきを想はんや、啻に之を想はざるのみならず、かゝる希望をさへ有するなく、唯だ徒らに自國の小なるを歎息し、而して他に大國の強いて我意を貫徹せんとするあるを見、一切の事皆な彼れに及ばずとして自ら諦らめ、苟も事の非なるある、行の隨なるある、則ち小國たるの罪に歸して曰ふ、是れ畢竟小國風のみ、大國風は決して然らずと、永久小國として立ち斷えず不幸の境遇にあるを免かれざる如くに感ず。若し彼等の言にして大國と爲らんとの動機より出でしとする、唯だ言ふがまゝに放置して可、必ずしも多く論ずるの要なけれど、獨り小國は劣等のものにして又た幷せて不幸のものたるを想ふが如きは大なる謬妄と謂ふべし。

夫の瑞西の若き、和蘭の若き、果して運命に於て露米兩國民に比して劣るありとするか、露國は大且つ強と稱せらる、其の領域たる西方の大海より東方の大洋に至る數千里間に鐵道を貫通し、出沒自在、其の如何なる地點に手を擧げ足を投せんとするやは、列國の常に注視して畏るゝ所、洵に大國中の更に大なるものといふべし。然るも其の地に生まるゝの民は如何なる幸福をか享受する、國民の大多數は無智蒙昧、窮して死するを免かれず、實に醉生夢死の甚だしきものとすべし、或は他國民の此處に事業を試みんとして來る者あるも、そは大に利殖して後に還へらんとする者、單に大國の民たらんとし

て來る如き、決して之れ無し。米も亦た大國中の更に大なるもの、鐵道は縱橫に內地を貫徹して國の東端より西端に亘たり、露國に較ぶれば商工業更に榮え、富の程度更に高く、就くべきの事業多く、貨殖の方亦た夥だし。然るも他國人の此處に移住する、其の新開地にして遺利多く、又た一攫萬金を試むるの便少からざるに因る、特に大國の民と爲るの幸福たるを想ひてにあらず、若し生活に利多きの地他に之れあるを觀ば、如何に藐爾の小邦たりとも、直ちに彼を去りて此に移るに躊躇せじ。

且つ大國とは果して如何なるとを意味するか露國は一皇帝の下に全國を統轄せられ、其の命令の行はるゝ、磬の聲に應ずるが如く、皇帝の權力强大なる、萬邦能く其の上に出づる莫し、此の如きもの、以て大國と稱すべきか。然らば米國は如何、四十餘州より成り、各州皆な自ら一國を爲す、故に中央政府は政務の全國に亘るを處理すれど、各州個々に關する行務は各自の處理するに任かす。嘗て奴隸廢止の議出で、南部の諸州は經濟の上より之に反對し、北部の諸州は人道の上より之に贊成し、議竟に協はず、事を干戈に決したり、想ふに此類の事は將來必ずしも絕無たりと爲し難からん、若し之を一國と見做さんか、則ち歐洲列國を如何にか視る。歐大陸は露國を除けば、面積米國よりも小、而して往來交通皆な自由なり、三國同盟といひ二國同盟といひ、既に久しきか、更に之を推擴して列國同盟と爲さば、優に一大聯邦を成すに足るべし、既に一大聯邦を成すとする、則ち內に

含まるゝ幾多の邦國は各〻大國の一部分を形成するもの、以て大國の民たりとして幸福なるを得べしとするか、以て大國民たるを希ふもの、滿足し得る所たりとするか。

大國と小國と、之を政黨に譬へんか、玆に一の大政黨と一の小政黨と對立するありとする、大政黨は言ふ所必ず行はれ、行ふ所必ず遂ぐるを得、乃ち其の黨員たる者は他の小政黨の黨員たるより一層幸なりといふべきも、更に大小幾個の政黨の群峙するありとせば則ち如何、若し大政黨の敢て其の力を恃みて跋扈するある、小政黨聯合の力は以て之に當たるに足るべく、聯合の力以て之に當たるに足らば、大小孰れの政黨に入るとも其の幸たるに於て軒輊なきに非ずや、大政黨と稱するとも、必ずしも其の意の欲する所を行ふべしと限らず、身を斯かる大政黨の裡に寄せて常に牛後の待遇を被むらんよりは、寧ろ或る小政黨に投じて領袖の位置を占め、更に幾多の小政黨を聯合して以て大政黨を制するの一層愉快なるに非ずや。列國の政黨は英米の政黨の如く二大別せる少し、大小幾多の政黨分立し、中には稍〻大なるものありと雖も、而も小なるもの、聯合は優に之を壓倒するに足る、獨國若くは佛國の政黨の如き實に然り。

之を商工業に譬へんか、大資本を有する者は總べての運轉意の如くならざるなし、以て規模を大にすべく、裝置を大にすべく、而して其の大規模大裝置なる丈け低廉に商品を製造し得、又た小資本の商工業者を壓倒し得べきも、而も多くの小資本家相ひ聯合し共同して以て事に從

ふとせば大なる者を凌駕する必ずしも難しとせず。一大資本家の隨意に事業を營むに方り、幾多の小資本家共同して事業を營む能はず、相ひ分立して互に爭ふが如くんば、大なる者利を專らにして小なる者毎に屈從するを免かれずとはいへ、大資本家の勢を逞くし利を專らにすると伴ひ、小資本家の競爭次第に減じて合同に傾き來るは必然の勢なり、平素相ひ反目する者も自ら舊怨を一掃して合同に迷はざらん。

今の大國は決して他を壓倒すること能はず、小國個々の力以て之に當たるに足らざるも、必要に應じて聯合せば能く之を制するに堪へん。歐洲に於て夙に權力平衡の維持せられたる、是れ或る大國の勢力を恃みて跳梁せるを、幾小邦の聯合して壓倒せんことを計りたるもの、今後或る必要の生ずるある、今日の仇敵化して明日の同盟と爲るを見ん。獨や、佛や、露國より小なりとて必ずしも歎ずるの要なし、丁抹や、白耳義や、獨佛より小なりとて亦た必ずしも歎ずるの要なし、眇として小なるモナコすら猶ほ獨立心を有し敢て他に屈せざらんとす、幾多の小國互に聯合し相ひ共同して事に當らば、大國と競爭する洵に易々のみ。究竟大國の民たる者、如何なる幸福か小國の民に優りて享受する所ある、露國の農たり商たり工たる者何の幸福をも享受する無きに非すや、支那四億の民、實に是れ大國の民たり、而も彼が如き大國の中に居る者、果して如何の幸福ありとする、印度三億の民、亦た實に大國の民たり、而も彼が如き大國の中に居る者、果して如何の幸福ありとする、彼等大國の民、固より幸福なしと言はず、而も他の小國に居る者と比例して如何の優る所ある か、曾に優る所なきのみならず、却て小國に居る者のより多く幸福なるを見る少からざるに非ずや、知るべし小國を厭ひて大國の民を羨むの謬妄の見たるを。

然らば小國の民は單に小國の民たるを以て滿足すべきか、曰く否な、斷じて否な、小國の民たるを以て滿足するは非なり、小國の民とて恥辱にもあらず不幸にもあらざれど、苟も一國の民たる者は唯だ須く發達の見るべきあるを要す土地に於て大と爲るか、人口に於て大と爲るか、將た事業に於て大と爲るか、孰れなりとも益〻大と爲るを思むべく、而して進歩の道程にある限り皆な稱揚すべしとす。如何なる小國といへども、其の益〻進み益〻盛んとなるは賀すべし、之に反し如何なる大國といへども、次第に衰頽に就くの徴あるは憂ふべし。小國の民たりとて、進歩の希望盈ち滿てる所には國民皆な活氣に富み、愉快らしく見え、市外の空地に家屋を新築し、道路は絶えず修繕せられ、一見して進取の氣運外に現はるゝを察すべし。而して大國の民と稱する者も、衰微の氣運漸く熟するに及びては、單に市街を通過するのみにて既に然るを察すべく、諸事皆な放漫に流れ、人に不快の顏色あり。蓋し前者必ずしも皆な己れの幸福なるを思ふにあらず、後者亦た必ずしも己れの不幸なるを思ふにあらず、時に傍觀者の愉快らしく感ずとするに、而も當人の爾か感せざるあり、又た不愉快らしく感ずとするに、而も實は愉快に

感ずるありと雖も、傍觀者の眼に自ら徹候の認めらるゝなしとせず、たゞ大に進まんとして務め、務めて而して能く進み得べき處は皆な幸福なりと謂ふべし。

瑞西は到底其の地を大ならしむる能はず、恐らくは人口を增すことも能はじ、然るも其の世界事業の上に一の中心と爲るは誰か之を能はずとせん、現に列國會議の此處に開かれたるの曾に一再ならざる、是れ明かに斯かる事に最も便利の地たるを示せるにあらずや、今後列國は尙ほ益〻互に相ひ爭はんも、會議にて紛爭を決するの勢よりして、眇たる此の小土は自然に中心と爲るに至らん、況んや美はしき風景の更に之を援くるに適するをや、其の民と爲るは以て自ら榮とするに足るべし、特に此よりも一層大なる邦國に在りては何の憂ふべきか之れ有る、大國小國を別ちて幸不幸を云々するは斷じて廢すべし。唯だ當に剛健にして進歩の道程にあるを幸福と爲し、綱紀廢壞して退歩しつゝあるを不幸とすべきのみ。

海外に於る日本人

日本人の海外に散在する大約二十萬人、最も多きは朝鮮布哇及びカリフォルニヤにして、就れも萬を以て數ふべく、之を外にし、或は千、或は百、或は十、或は一二、殆んど世界到る處同胞の影を認めざる無しと謂ひて可、而して概して言へば、西の方蘇士以東は醜業婦を主とし、東の方ミッシシッピー河以西は農を主とする有樣なり。

醜業婦の醜や、もと美なる地にありてこそ醜とも見ゆれ、醜なる地にありては特に醜と認められず。其の散布せる範圍頗る廣濶、群を成して西伯利亞に北行する者、南より西して香港、新嘉坡、孟買、ザンジバールに赴く者、常に相ひ接踵す、香港は近來漸く制壓せられて勢力前年の熾んなるに似ざれど、問屋は尙ほ依然此處に在りとすべく、新嘉坡は多少奬勵の傾向にて、勢ひ猖獗、進んで爪哇附近に及ぶ。孟買は綿商先づ行き、正金銀行、三井物産等の支店次いで置かれ、然る後ち醜業婦行く、故に醜業婦は重もなる者に非ざれど、ザンジバールに至りては、所得甚だ多く、中には孟買の正金支店に托し一萬圓を鄉里に送りし者あり、其の或る者は更に南を指して進みつゝあり。普通の例として醜業婦先づ行き、勞働者之に次ぐことなるが、人既に多く、復た醜業婦の手を籍るの必要なきに至る、則ち醜業婦排斥運動玆に始まる、最初は一の新聞を興すにも之を促がして出金せしめ、宛がら醜業婦の機關たる觀あるも、基礎漸く成れば、獨立經營を事とし、却て之れを放逐するに黽む。

蘇士以西は歐洲醜業婦の勢力範圍に屬し、絕東の醜業婦は隻影をも見ず、隨て勞働者の如きも亦た之れ有るを見ず。日本人の其の以西に在るは英國を最も多しとす、其の數二百人に垂んたり、大抵官吏若くは會社員なるが、雜貨は概ね猶太人の手を經ざるを得ず、店の飾りは日本

なりとも、利益は猶太人に歸する多し。佛國に在留せるは約五十人、巴里には重もに公使館に關係ある者、留學生もあれど畫工の外は久しく留まらんとせず、里昂には絹糸を業とするものもあり。獨逸に在るは約一百人、大抵留學生にして伯林を始め大學所在の地に散在し、此處彼處に遍歷して聽講す。墺地利にあるは少許の留學生にして、獨逸留學の心を以て在學す。伊太利には公使館あるの外、長く留まる者なし、名勝舊蹟を遊覽するは少からず。露都彼得堡には數名の留學生あり、商業地に非ざるが故に商店を見ず、商業の要地は莫斯科にして、原の出張店あり、五六の日本人ありて商業を營み、前途好望なりと稱す、オデッサに領事館あり、曾て石油運漕の目的を以て日本船を寄港せしむるの計畫ありき。土耳其の首府君士但丁堡には稍〻大なる日本雜貨店あり、內廷に御用品を納むるもの、普通の商賈と趣を異にす。是れ以外若干あれど、西方に散在するは概略此の如し。

更に轉じて東方に觀んに、布哇は人口十五萬、日本人其の少半を占む、多くは砂糖畠を耕し、普通の家居、下駄を穿ち浴衣を著け、一見鄉土と異ならず。處々水田あるも、之を耕やすは支那人にして、日本人の勞役するは屯として砂糖畠なり。從來歸化を許さゞりしが、近頃牧野某の一家族初めて歸化せり。米國の法律は白人と阿弗利加黑人とに歸化を許し、二者の外に許否を明定せず、偏に當局者の解釋に任かし、而して布哇にては之を許さずと定む、今回歸化を許されたるは解釋の改まりしが故に非ず、其の人

の雜種たりといふに因る。此種の論は亦たカリフォルニヤに於ても耳にする所、其の地歸化を許さざるに決せしが、東方に歸化を許すの地あり、行いて歸化し然る後ち還れは妨げなし、かのモルモン宗のユータ地方の如き、自由に歸化を許すの地なり、他にも亦た斯る地あり、而も歸化の有無に拘らず、日本人の最も多く且つ最も利を得るはカリフォルニヤなりとす。總じて米國西海岸の日本人には遊食無賴の徒多きに居るといはれしも、二三年來斯風漸く改まり、復た前年の惡評を聽かず、無賴漢を以て目せらるゝ者も必ず多少の職業を有せざる無し。桑港に於ける靴屋の一半は日本人の手に屬し、洗濯を業とする者多く、寫眞店、雜貨店、其他種々の業を營む者あるが、最も多きは農業に從事する者にして、中には成功したるも少からず。

其の首たるは長澤氏なるべし、葡萄の栽培を以て成功せし人にて、其の酒類を醸造して日本へ輸出する一年一萬二千ガロン、紐育へ十萬ガロン、英國へ二萬ガロンに上る、現に幾許の財產を有するやは詳ならざれど、廣大なる葡萄園を管理し、一のミリヨネルを以て目せらるゝは事實なり。之に次ぐは芋王の綽名ある牛島氏にして幾多の失敗に耐へ、苦心經營竟に今日あるを致せり、今や隻手能く桑港に於ける芋の相場を支配すといふ。芋の耕作は頗る難きもの、收穫少ければ損失、收穫多きに過ぐれば價格低落して亦た損失、收穫多くして而も價格を低落せざらしむる、是れ其の難事たる所以にして、恰も相場を爲すと相ひ類す、斯くして時に損失を

招きたれど、非律賓戰爭の起るに際して能く巨利を博するを得たり。芋は同一の地を忌み、屢〻地を變ふるを可とす、故に氏は土地を所有せず、此方彼方に二三千エーカーの地を借りて以て收穫を務む。次ぎは花園の主人堂本氏とす、桑港全市の花は實に氏の支配下にありといふべく、相場の高低を定むる亦た氏の花園に於てすといふべし。現時有する所の花園は五六エーカーに過ぎざるも、新たに三十エーカーの地を購ひ規摸を擴大しつゝあり。氏も多くの困難と辛苦とを歷たる人、兄弟五人善く一致して業を屬みしこと是れ成功の本たりといふべし、而して苦難の最も重なるは全市の花商人連合して花を買はざるに存し、謂ゆるボイコッヂングなり。連合の爲めに花の販路を梗塞せらるゝに於ては

小なるものは立ろに倒產するを免かれず、氏も屢次此厄に罹りしも能く之に堪へ、今日にては却て逆に對手を窘むるに至る、現に本年の春も氏に對しボイコッチングするの企ありしに、恰も好しイースター祭日に會し、各戶必ず百合花を飾らざるべからず、而して百合花は最も多く氏の花園にあり、乃ちボイコッチングせる者に向ひ曰く、善し、我が花を買ふを欲せずば買はざれ、我亦た汝に賣らじ、我は直ちに寺の門前に市せんと、此に於て花商人等窘困し、相率ゐて謝して曰ふ何ぞ敢てボイコッチングせん、請ふ舊に依り花を賣れと、かくして爭は全く氏の勝利を以て局を結べり。

事の此に似て小なるは擧げて數へ難さが、其の能く成功せるは最若くは最に關係ある事業に

して、元と內地にありて農に經驗なかりし者も彼地に入りて農に從事せば概ね成功せざる無きの狀態なり。商業は之と違ひて稱すべき少く、此の方面に成功するは支那人に多しとす、雜貨店にして稍〻見るべきなきに非ざれど、更に發達せんこと頗る難しとせらる。農に從事する者は能く辛苦に堪へて業を中途に廢せざる、則ち少からざる所得あり、故郷に歸りて優に金滿家の列に加はるゝを得べし。而も漸く東するに隨ひて農業の便利少く、農を事とする者亦た少し、シカゴには少許の商買あり、紐育には商業を營む者少からず、森林なぞ特に大、三井大倉の類亦た支店を設く。河を隔てゝブルックリンに千餘の勞働者あり、多くは造船所に服務しつゝあり。要するに日本人の東方に散在するは概略此の如し。

然らば斯く東西に散布せる日本人は如何に待遇されつゝあるか、謂ゆる異人種排斥は何人も直に感ずる所なるが、實は異人種排斥の語たる、甚しく拘泥するの要なし。皮膚容貌を異にする者と相ひ遇ひて奇異の感を萌すは普通有りがちの事、同一人種の間にありてさへ、初對面のものは或は呆者の如くに見え、或は惡人の如くに見え、而して相ひ見るの數〻なる、乃ち其の呆者ならず又た惡人ならざるを知ること稀れならず、況んや皮膚容貌全く異なる者の卒然相ひ遇ふに於てをや、他をして奇異の感を萌さしむるは當然のみ。歐米人が日本人の來るを觀て異感を懷くは日本人が歐米人の來るを觀て異感を懷くと同じ、初めは多少氣味惡るく感ずることあ

るも、相ひ見る既に數〻にして知ること漸く熟する、異人種なる念消えて復た斯かる感を起こさず。究竟異人種といふは初めて相ひ遇ふの際に起る一時の感想に過ぎず、眞に冷遇と優遇との別かるゝは其の人物職業の如何に因る、若し其の人にして凡庸下劣なる、自ら冷遇を被むるを免かれざるべく、之に反し有能にして品格ある、自然に優遇せらるべし、人種の異同の如きは必ずしも問ふ所にあらず。

歐洲諸國には日本の勞働者を見ず、總じて官吏、會社員、留學生なるが故に、彼等白人をして特に惡感を懷かしむること少く、唯だ街路を步する際時に冷語を發つを耳にするに止まる、而して之を爲すは勞働者の徒、換言せば日本人と支那人とを混同する無識の輩にして、能く二者を辨識し得る程の者は多少敬意を表すと謂ひて可、但だ土地により凡べての外人を冷遇するなしとせず、爲めに日本人をして他の國人と均しく不快の感を懷かしむ、獨逸の北部の如き或は然り、ライプチヒに一教授あり、講義の際に言を作して曰ふ、東洋人は愚者たり、現に此處に一人ありと、之を耳にせる留學生は痛く憤慨し、爾來忘るゝこと能はず。而も斯る事は獨り日本人にのみ限るに非ず、他に亦た之に類するあり、米國人が獨逸に在りて快々として樂まず、露西亞に入りて頓に好遇を感じ、識らず知らず露西亞最屓と爲ることあり。獨逸とて留まること久しければ、彼れ亦た我を遇する親切なるべく、當初冷遇の言動を演ずるの偶〻人をして憤慨せしむる所以なりとはいへ、獨境を越へて露に入り、

坐ろに愉快を覺ゆるは事實なり。獨の停車場と露の停車場と相ひ距る少許、而も此を去りて彼に着する、萬事皆な趣を變へ、嚴緊なりし役人は快活と爲り、澁面なりしは世辭好きと化し、外人を見て直ちに握手し、助言し、不知案内の者をして不便を感せしむるなく、特に放談哄笑するの自由にして周圍の人々に遠慮を要せざる皆な旅客をして愉快を感せしむるに非ざるは莫し。日本人も他邦にありて多少肩身狹く感じたるに、一旦露に入りてより揚々として濶步し、橇若くは馬車に駕して疾驅すれば路傍の人皆な目を側つ、而して是れ元と故なしとせず。尨然たる露帝國に幾樣の異人種あり、現皇帝は卽ち百數十の小君を統轄する皇帝にして、中に成吉斯汗の子孫を始めとし、蒙古人の右門名族多く、大禮の執行さるゝに方り、此等皆な盛裝華服して帝都に入り、露人の眼を驚かす、乃ち東洋顏せる蒙古人は恰も右門名族なるかの如くに目せられ、到る處に歡待せられ、東洋人なるが故に却て幅の利くが如き樣なり。

なほ米洲に於けるを觀るに、東方に在るは優遇せられて西方に赴くほど冷遇せられ、ジャップなる名稱の下に支那人と同じく虐使せらるるとは常に人の言へりし所、而も數年來漸く事情の更まりたる者あり。西方に在るは勞働者多く、勞働者として遇せられ、固より好遇と云ふべからずと雖も、亦た甚だしく侮蔑せられ、靴にて蹴らるゝが如き事無し、元と待遇の厚薄は其の人に存する事にて、若し風儀良くして信用を得る、其の顏色は同じからずとも以て白人と伍し

て業務に從ふに足り、事業の上に成功すること難からず。彼の高峰氏の如き、初めて發明せるに方りては甚しき迫害を被りしも、迫害に抗して又た更に發明し、發明に次ぐに發明を以てし、遂に巨利を博し、今日にては白人にして成功せると異なる無きに至れり。凡そ成功に伴ふ迫害は白人と雖も免かれざる所、唯だ刻苦勵勉して挫折せざるの勇ある、則ち事業の上に功を收むべきや必然にして、其の人の西よりせると東よりせるとは問ふ所に非ず。特に留學生に至りては、彼我の際に何等の差違を見ず、中にも繪書研究の目的を以てせる者は、其の能力直ちに繪畫の上に表はるゝに因り、復た皮膚鼻目を以て差別せらるゝなく、白色人種の間に交雜して愉快に研修することを得。

然らば日本人の能力は如何、白人と事を俱にして能く遜色なきを得るか、未だ充分に調査を經ざる所なりと雖も、彼には身材極めて長大なる者あると共に、又極めて矮小なる者あり、智愚善惡の差亦た然るべく、智と善とを見れば殆んど際限なく、愚と惡とを見るも亦た際限なからん。彼國に於て衣服を購はんとする、胴は概して適合せざる無きも、袖は少しく長くして足は甚しく長し、即ち日本人と白人とは胴相ひ同くして手足の長短異なるを察すべし。而も帽子を購ふは極めて易し、店頭に列するもの孰れも著しく大なるは無く、直ちに或る一を冠りて以て歩するを得、即ち彼我頭顱の大小特に異ならざるを知るべし。精細なる調査は固より之を爲すに難しとはいへ、頭と胴とに少差なくして獨り手足に大差あるに徵する、畢竟白人は必要ならざる點に於て大に發達せりとすべし。機械の發達せる今の世にありて、足特に長ければとて何の用をか爲すべき、若くは手較〻長しとて將た幾何の利かある、眞に要する所は指頭の巧拙にあり、而して指頭の働らきは白人の長せざる所。然るも兩者の優劣如何に就ては所說一ならず、使館及び會社に在りて坐業に服する者は大抵日本人の劣るを言ひ、躰力も我れ劣り、腦力も我れ劣る、到底共に競爭するに堪へずと、先づ我れの若かざるに一致する如きも、彼處に在りて困難辛苦の餘に成業せる人々は毫も斯かる念を懷くなく、却て我れ能く彼れに優ると爲し、思へらく我れ彼に劣るの弱點なし、寧ろ白人に於て多くの愚劣なる者を見ると、農業を以て成功せる多くは斯く信じて疑はず、皆な白人の與みし易きを言はざるなし。

カリフォルニアにては葡萄の栽培甚だ盛んにして、成熟の期に際する、往々一二日を爭ひ、若し一二日を遲くるゝ、爲めに腐爛して用を爲さゝるに至る、此に於て白人の勞働者は左手に籠を把り倉忙として撮取に從ひ、力の限りを極めて猶ほ及ばざること數〻なるも、日本人をして賃銀を定めて請負はしむる、則ち雙手以て撮取し、必ず期を遲くるゝ無くして事を了る、故に今日にては日本人を以て葡萄の撮取に必要缺くべからざる者と爲すに至れり。獨り葡萄に限らず、砂糖大根も亦た然り、菊苗を作るも亦た然り、菊苗は今や堂本氏の一手にて作る所、白人は之を作らんと欲するも能はず、强いて作ら

んとして勞するも枯株腐根をして萠芽よりも多からしむるを常とす。其の他小事にして白人の短なる所に日本人の長ずるあり、大工を雇ひ室内の損所を修繕せんとするに、白人の大工に命ずれば往々日を要する多きも、日本人の大工を雇へば日ならずして了る如き、實に其の一例たり。これ職業の稍〻下等なるものなるが、更に上りて機械の運轉に從事する者も亦た然り、日本人を雇使する工場にて其の業務に勘能なるを稱せざるなく、布哇の砂糖製造場にては、日本人は同一の給金を受くる白人よりも首要の事務に執掌し、機械の複雜なる方面に當り、白人の一般に難んずる所日本人之を擔當して不能を示しゝことなし、給料は白人の多く受るに若かざれど、彼等の多く受領して而も少き者よりも劣れる事務に服する、是れ我れの之に優るを證するものに非ずして何ぞ、若し然らざる、決して斯る奇態を現ずる無からん。我が留學生の彼國に在る者、亦た能く白人の學生と匹敵するに堪へ、中には彼れに優るさへあり、但だ歸朝の後ち停滯して少しの進歩をも見ざるの常なれど、そは周圍の境遇の然らしむる所、一概に其の人をのみ咎むべからず、彼には四面より刺激するの多きに加ふるに、研究の材料多く、種々の設備整ひ、自修の便利極めて多きに、我には則ち之れ有る少く、偶〻研究に熱心なる者あるも、唯だ念ひて已まざるべからず、我れ豈に遽に彼れに讓るものあらんや。

人種の優劣は輕々に斷ずべからざる所、之に關する議論の紛々たる東西皆な然り。黑人の合衆國内に在る幾んど人口の十分一に居る、彼等は今猶ほ卑視せられ虐使せられ、愚劣と誹られ獸類と罵らるゝも、下等の仕事を爲すに當り白人と比して如何の差違かある、白人には學藝に長じ才能の秀づるもの素より之れ有り、然れども普通の勞働に從事するに於て如何に黑奴に優るとするか、特に等差の見るべき無きは到る處に檢知せらるゝに非ずや、已れ優者に非ずして而も漫りに他に誇る、如何に誇るとも竟に他に勝ち能はざるや必せり。かくて黑奴は合衆國人口の一要部を占め、非常の酷遇虐使を受けて發達を妨げらるゝと雖も、白人に對して敢て下らざるの勢を示し、氣候酷熱なる地方にては益〻其の力を伸ばさんとす、故に南部の地方に於て此の種族を見ること殊に多きが、新たに開發せられつゝある南阿弗利加に於て最も甚しとす。南阿は種々の新事業勃興し、人力を要すること多く、成るべく白人を雇使するの計畫なるも、白人は仕事の上より打算して黑人に優るあらず白人を以て黑人に比する、効力に於て一に對する一・三の割にして、賃金は則ち一に對する三乃至四の割なり、夫れ三四倍の賃金を收めて僅に一・三の仕事を爲す、是れ利益を目的とする資本主の悦ぶ所にあらず、黑人の雇使を止めんとして而も止め能はざる、故なしとせんや。彼れ黑人すら必要視せらるゝ此の如し、況んや日本人に於てをや、日本人の此に比して更に優るあるは昭々として明なり、如何に排斥せんとするも能はざるべきや疑なし。

從來日本人排斥の聲を聞くこと一再に止まら

ざりしも、此の如きは特に憂慮するの要なきもの、之を事の實際に徴するに、排斥の聲は單り日本人に對してのみ高きに非ず、他國人に對しても亦た之れ有り、而して此聲の高く叫ばるゝ多くは選擧の際に於てし、唯だ一時の便利を得んとするに止まる、是を以て忍耐すること數月なる、その聲自ら消え去る。然れども日本人の近時益〻必要視せられ且つ稍〻好遇せらるゝ、一には渡航者の風儀漸く改善し、遊食無賴の徒の少きに因る。支那人は惡事と不潔との巢窟を以て目せられ、中には賃金を得て人を殺すを業とする者あり、警察は之を知るも咎めず、寧ろ其の殺さるゝの多きを可とする風あるが、此の如きは斷じて日本人中に見ざる所、特に不潔ならざると鴉片を口にせざるとを以て稱せらる。風儀惡しき日本人をして多く彼地に航せしむるは望ましからざる所なれど、風儀惡るき者とて何處迄も抑止するの要あるほど彼地に於て注目せらるゝに非ず、一層取締りを寛にするも差支なかるべく、渡航者の數尙は更に增加するとも、就て職業を求めしむるに易々たり。

現時日本人の米洲西海岸に在る者三萬を下らず、布哇に在住する七萬を加へて殆ど十萬に餘まる、一見頗る多きが如きも、試みに他國人の此に移住する數を以て比較する、我は遙かの下位にあり、獨逸、愛蘭、露西亞、墺地利、伊太利諸國人の移住し來たる一年に六十萬乃至八十萬に上る、總數三萬と稱する日本人の極めて少數なると言はずして明かなり。たとへ日本人排斥の聲の高きを致すありとも、其の移住すべき地は猶ほ茫として廣し、更に幾倍の增殖を見るも決して狹きを覺えざらん、行いて彼地に職業を求めんとする者は容易く之を求め得べく、普通に勉強して浪費せざる、則ち能く儲けて貯蓄するを得べし。總するに方今日本人の海外に在る者、其の大に成功せるは之れ無きも、可なりに成功せるは之れ有り、金滿家の列に入れるは之れ有り。而して爾來益〻伸ぶべきの望は到る處に之れ有り。日本人と白人と究極幾何の等差ありやは判明し易からず、唯だ其の白人と伍して高く頭首を擡げ居らざるは事實なるも、さりとて頭首の甚だしく低下せるにもあらず、中にも業務に於て頗る有望なるあるは斷々として疑ふべからず、敢て自ら卑屈にして他を尊び他を畏れ他の背後に屈從するの要なきなり。

朝鮮

保元平治の頃よりして承久に至るの史跡に顧みば、奇怪なる彼の情勢も髣髴として解すべし、而して纏綿せる我が當時の史上の疑惑も亦た爲に照較して大に得る所のものあり。朝鮮の現勢は洵に藤原氏の末年に等し、文化の程度略ぼ相ひ若き、聊か文字を了解し姓氏の記錄に通ずるあるも、民人一般の智識の甚だ卑きは相ひ似たり、工藝技術の如き、時に宏大なる建築を興し、都門宮殿の類、輪奐の美觀るべき者ありとも、多くは茅舍陋屋にして、一幅源平時代の雖も、

繪巻物を繙き來れば、宛如として朝鮮現時の光景を觀る、其の中央政府の權威洽からずして、權力を爭ふ豪族が畫策する行動施設に至りては幾んど同一の型に出づ、彼を知れば以て此を見るべく、此を知れば以て彼を測るべし、賴山陽保元の亂を論じて曰く、昔者弘仁之變、無藤原仲成則平城無賴擧事也、承和之恒貞、安和之爲平、拔之者與擠之者皆出於下、勢每然也、故保元之禍雖由白河鳥羽以私愛廢立天子、然發之者忠通賴長也、二人之相軋本由其父忠實、忠實之憎忠通以其代已執權、父子且然、況兄弟乎、況叔姪乎、當時君相皆然也、君己殉私相亦嘗私、私之極敗倫理亡廉耻而不顧、壞其紀綱非一世也、故曰其發晚矣、而發於此爾、夫欲濟其私不得不用兵、而天下之兵皆在武臣之手、不得不借其力、奪一朱器臺盤亦借源爲義兵、況爭國乎、故彼此並借人兵以決勝負、如借人錢以爲博奕、勝非我勝也、佗人勝也、天下之遂歸於武人奚足怪哉。

是れ豈に從來朝鮮の君臣互に其の私を濟さんとして、或る者は日本に依り、或る者は清に依りしに異なりとせんや、日清の勢力は素より一二武門の以て比すべき所にあらずと雖も、其の朝鮮政府に指目せらるゝ猶は源平の君相に賴まれしが如き者ありて存せり。十七年の變に至りては全く平治の亂と其の揆を同くす、史に稱す、藤原經宗、惟方、政權を握らんと欲して志を得ず、信賴を嗾して、之をして義朝を引て黨となさしめ、京師守なきを闚ひて兵を擧げ、遂に上皇を幽して帝を遷し、事殆んど成らんとして經宗惟方共にして志を變じ、源家の強兵を以てして敢なくも平氏に敗られ、平氏の威力昔日に倍蓰し事皆な平氏に決するに及びぬと、是れ何ぞ竹添公使兵を提げて王城を守り、捨てゝ走るに及びて清の勢力俄に增大したるに異ならんや。

戰ふに皆な數百騎に滿たざるの兵を以てし、惡源太十六騎を率ゐて重盛と驅逐せる如き、狀況頗る相ひ似たるあり、今日よりして之を觀れば實に一小闘に過ぎず。已にして平氏の威力益〻熾盛、天下平氏にあらざる者は人にあらざるの勢を成すに及び、賴政高倉宮を奉じて兵を擧ぐ、宇治の一戰軍敗れて身斃れたるも、賴朝令旨を奉じて、關東に起り、義仲北國に起りて、平氏漸く縮蹙す、賴朝乃ち上書して曰く、臣敢て亂を爲すに非ず、乃ち亂を靖するのみ、陛下尙は平氏を棄てざれば則ち請ふ兩ながら講和し二姓並に仕ること往昔の如くせんと、宗盛聽かずして遂に屋島檀浦の鏖戰あり。此處亦た頗る廿七年の事に類せり、東學黨の擾亂は賴政の事を擧げしなり、清廷兵を送りて東徒を鎭せしは賴政の事を熄みしなり、賴朝の上書は相ひ共に朝鮮內政の改革に從事せんとの帝國の申込みに肖似し而して清廷聽かずして我が軍威北京に震ひ、清使來りて和を講へる者は、驕る平氏の末路とも見るべからんか。

賴朝已に海內を掃蕩して坐して六十餘州を制す、賴朝逝き賴家實朝薨ずるに及びて、源氏の正統絶ゆ、後鳥羽上皇乃ち王權の回復庶幾すべしと爲し、遂に兵を擧げて北條氏を討す、義時乘を會して事を諮る、諸將或は箱根足柄の險を扼して官軍を要せんとす、廣元不可として曰く、

險を守り日を曠うせば、人心内に變ず、是れ自ら敗の道なりと、議乃ち決し、十餘萬人電の如く闕を指し、關東の覇權重きこと山の如し。是れ亦た頗る朝鮮の近事に類せり、源家正統絶えたるは、三國異議の一顧挫とも見るべく、関氏興復の陰謀よりして動もすれば露國に近づき日本を疎外せんとするは猶ほ承久の擧の如くならずや、夫れ誰れか果して強硬廣元の如くにして、敏腕快手泰時の如き者ぞ。北條氏已に意を逞して新に府を六波羅に開き、西の方京師を鎮壓して東鎌倉に盤踞し、東西相ひ應じて以て天下の權衡を持し、以て海内の安寧を謀る。惟ふに北條氏倍臣を以て天子を放流し、肆に廷臣を捉へて之を殺戮す、暴逆の罪固より天地の容れざる所と雖も、而も其の勢を制するの術に於ては頗る觀るに足る者あり、上王室を安置して將軍を翼戴し名を辟して實を取り、位四位に過ぎずして、諸道豪傑奔赴命に應じ、能く政柄を執りて九代の久しきに傳へたり。帝國素より當時の北條氏と異なり、而して朝鮮素より當時の王室と異なり、而して列國素より當時諸道豪傑の比にあらず、唯だ其の控制の術に於ける焉ぞ少しく範とすべからざらんや、朝鮮の獨立を扶持せんが爲には、宜しく北條氏が南北六波羅を以て終始京師を儆督するの覺悟を欠くべからざるなり。始め承久の亂の興らんとせる、上皇以爲く北條は一倍臣のみ、他の名門右族を禁縛するの力あらずと、而して北條氏たる者、亦た自ら大に疑懼せしが、遂に能く機會に投じて、勢を制したるは、天晴の技倆にあらずや。勝海舟嘗て

義時を評して曰く、彼が朝廷に負けるは已むを得ざるに出づ、彼にして桂梧王師を迎ふるが如きあらば、海内の擾亂は遂に底止することなけん、指斥の地に立ちて惡逆の名を避けざる、偶〻以て彼の力の大にして國家に盡悴したるの跡を見ると、之れ亦た一箇の史見なり。堂々の帝國一信隷の屬にあらざれば素より姦猾陰險義時の如くなるを要せず、然るも東洋の平和を保持せんが爲めには、心術の正邪は須く論せずして時勢頗る相ひ類する者あるを牢記せざるべからず。

支那人との交際

我國と支那と密接の關係を有し、我れ彼に商工業の疏通口を求め、彼れ我に新智識の供給を仰ぐ、況んや千數百年來の事情よりして、彼我の交際を保持するに多樣の便利あるに於ては、唯だ益〻親密を計らざる可らざるは言はずして明かなり、我が國人の支那に旅行し又た彼地に留止する者逐次多きを加ふるは數の當に然るべき所とす。凡そ外地に行きて土着の人と交はるには交際の便法として彼れの國情風俗に通じ能く之に應ずべきは衆の一般に認むる所、支那に於て特に其の然るを見る、其の言語を演にし、其の頭髮を辮にし、衣服擧動皆な之を支那にするは場合に依りて必要ならずとせず。たゞ我が國人は支那の風を欽せざる者、未だ彼地に赴か

ざる間、能く其の陋にして弊多きを知り、時に其の形を裝ふは此と交際せんが爲めに過ぎざるを知る、是れ蓋し知るの謬らざるもの。

彼國に旅行し、留止すること久しければ自然其の風に浸染し、曾に形を支那にするのみならず、心をも支那にすること稀れならず、軍人にして才名の高かりし者も彼地に在ること數年にして歸り來るに、何處となく支那の風を帶び、往日の駿才は鶩鈍に化し、茫漠として要領を得ず而して自ら知らざるに至る。有志家として彼地に旅行する者も久くして歸れば、同じく支那の風に化し時に大言放語して豪快の態を裝ふも思想固定して殆んど人の言を解するを得ず。支那に遊びて支那人と交際し而して支那の良風に善化して支那人と類似するは猶は可、支那人の長處を享けずして短處を受け、彼の良風に摸せずして其の惡習に染むは、事の不可なる之より大なるは莫し。事に當りて能く忍耐し効果を收むるに勇なるは宜しく交りて習ふべきに、國人は此に就きて纖毫の受くる所あらず、徒らに大言して豪放自ら衒ひ、而も因循苟且、規律を守らず理解力の鈍きに於てのみ頗る彼に類す、其の受くべきを受けずして受くべからざるを受くるは、洵に慨すべしとす。此の如きは或は以て普通の交際を圓滑にするに便ならんも、偶〻權利若しくは利益の關係に及べは大抵得る所鮮く交渉對談するに方りて互に因循を以て因循に對し、不規律を以て不規律に應じ、茫漠要領を得ざる言を交換するの後率ね彼の制する所と爲りて止む、是等の點は宜しく深く注意すべき所にして、其の身親しく彼地に赴く者の省慮すべきのみならず、內地に止まる者の均しく戒愼を要する所たり、

我が國人の支那人に對するは歐米人の彼に對するに比し便利を占むる多大なるに拘らず、權利問題又は利益問題の起る毎に却て歐人の如くなる能はざるは、獨り國力よりするに非ず、彼等更に支那人に對するの法を熟知すればなり、

支那人に對するに支那人の風を以てするの便利多きは言ふを須たざれど、支那人は由來太だ辭令に巧みに、支那風を以て此に對し、辭令によりて彼に勝たんことは極めて難たし、彼れや詐術詭謀を以て勝さり、公然相ひ對して談合する所陰然裡面に於て之を毀ぶるに長じ、對手をして辭令の上に要領を得ずして屈托せしむることの頗る妙なり、歐米人の此に對するや敢て辭令に拘はる無く、斷々として自己の權利として利益とする所を主張し、直入直進してそを獲取するに勉め、自ら談判し若しくは領事公使に依頼して急速に決定するの方略を解せり、而して公使領事及び此に從屬せる者亦た皆な之を解し、他をして辭令を巧にし瞞着し去るの餘裕なからしむ、我が國人たる者須らく此の呼吸を會得し、一旦主張する所ある、斷然我が是とする所を求めて前行し肯て彼の瞞過し左右する所と爲らざるに勉むべし、約言せば正面より此を獲取するの途を採り、而して平生の交際に因り彼を柔らくるを肝要とするなり。然るに我國の今日採る所は平生の交際に因りて彼を柔らくるを主とし、偶〻正面より要求するあるも其の辭令の巧

詐なるに瞞過せられて獲る無きに了ること多し彼れに駐在せる公使領事は近時頗る玆に留意し來れるが、其の實を擧ぐるには尚は多少の困難を感せんか。

支那人との交際をして倍〻隆盛ならしめざる可らざるは固より論なし、唯だ漠然交際を盛んならしむるに力を致して他に考へ及ばざるは、固ち不可なり。普通の交際と事件の談判とは其間自ら緩急のあるあり、談判に際して仁義といひ、唇齒輔車といへば、事毎に彼の制する所となるべく、寧ろ權利の要求すべきあれば、我が内地に在りて要求するが如くするに若かず、道理も主張も總べて我が日本に在りて當然とするものを採り、飽くまで強硬の態度を持して之に對すべし、一たび情實に纏綿せらるれば立ろに

其の瞞過する所と爲りて喪敗に終るべきや必せり。然れども尋常の交際を支那流にするは頗る便、成るべく支那流にし殆んど支那人と差別なきに至るも亦た可、但だ此間の差別を念頭に置き緩急之に應せんことを料るべきのみ。

久しく支那に留止して其の國情に精通する者必ずしも稱すべきに非ず、支那風に依りて支那人と交際するも、彼に化せられて彼に制せらる、何の貴ぶべきか有る、支那に旅行し留止する者は深く此邊に考慮する所無かるべからず。固より永久支那に留まり或は土人同樣の事業に從んとする者は全く支那風と爲るも可なり、單に通譯官たらんとする者も亦た支那風にして妨げなし、今日通譯官に對して種々の非難あるも、往年戰役に於ける功勞は、實に沒すべからず、かゝる場合に適するが爲めにたゝ支那風を學び支那化するも好し、其の支那に在りて通信報告の務に從ふ亦た皆な支那化するの利便饒きを察すべしと雖も、彼の官廳に對して交涉する任に立ち若しくは彼の人民と共同して事を起さんとするには支那風に化し支那の事情に慣るゝといふを賴むべからず、斯の如きは適〻以て彼の欺騙に罹るに過ぎず、軍人にして地理視察の用を帶びて彼地に赴く者の若き、特に支那化するを戒むべし。乃ち人の支那に行かんとする、豫め用意する所あるを要す、先づ其の思想を練り其の目的を定めて然る後徐ろに征途に就くべし、漫然支那觀察の念を持して發程せば往々支那化せらるゝ恐れあり、自ら支那化せるを曉らざるも、歸來國人に接すれば則ち被化の跡歷として掩ふ

べからず、奮然國利を計らんとして支那に發程し、留止幾年、遠れば則ち支那の風に浸染し動もすれば全く支那化せらるゝは所謂木乃伊取りの木乃伊に化すると異なる莫し、豈に其人の爲めに惜むべく、又た國家の爲めに惜むべきにあらずや。

之を總ぶるに普通一般の商工業に從事するの目的を持して支那に赴く者は從前に比して一層其の人の衆からんとを冀望せざる可らざると共に、稍〻抱負の大なる者に至りては往日の征途に上れる者よりは更に素養の厚く決意の堅からんを望まざるを得ず、尋常の漢學者の如くんば、彼地に居住する彌〻久しければ彌〻其の化する所と爲り、竟には言ふ所散漫にして孟浪、行ふ所因循にして不規律、要領の得られざる凡常の

支那書生に類似するに至るべし、戒めざるべけんや。

印度の酷暑

印度といへば熱い國、熱い國といへば印度にて、其の熱い國の夏の絶頂は如何なるべきかは即ち疑問なり。或は印度は常に熱く、夏冬の差なしとするも、日本に較べてこそ爾か言ひ得べけれ、常に熱き中に四月五月の最も熱く、六月より雨期、十月再び熱く、十二、一、二の冬たるは殆んど順序として確定し、其の冬とてフランネルの單衣にて聊か冷を覺ゆる位の事にて、特に熱しとする季節の甚だ熱さは略ぼ想像するに足る。隨ひて予の五月を以て印度に入らんにせる、知る者は概ね其の時に非ざるを說きて戒め、予も亦た強て炎熱に苦むの必要なく、兎も角孟買に往て樣子を見んと欲せり。

予は曾て南洋に航し熱帶地方に經驗あれど、既に幾年をも隔てゝ加減の分からざる所あり、香港及び廣東の全然夏景なるを見て先きの熱さを想ひしが、新嘉坡に着するに及びて却て冷風の快く、何等凌ぎにくきを感せず、人乃ち曰ふ此地雨多く、毎に此の如し、古倫母は否らずと、古倫母に着するに亦た甚しきもの無かりしが、人乃ち曰ふ孟買は否らずと。孟買に着するに、亦た甚しきもの無し、海風の徐ろに凉を吹き來るや、身恰も品川又は大磯に在るが如し、人乃ち曰ふ海岸の地は水の爲めに熱を和げらる、加ふるに孟買は印度の極樂といふ稱あり、以て總てを推すは誤れり、所謂中天竺なる者は正に炎暑蕭瑟、汽車にて通行するだに尙は頗る困難なりと。

固より孟買を甚しからずとするは、思ひし程にあらずと云ふのみにて、熱からずと云ふにあらず、熱さは則ち熱きに相違なく、大体日本の七八月に似て、朝夕爾かく冷ならずと見て宜ろし。晝夜十餘度の差あるも、其の變ずるや極めて遲々、十時ごろに寢ぬるには、窓といふ窓を盡く明け放し、木綿單衣一枚にならざるべからず、土人は多く戸外に寢ぬるの習慣なるが、夜露の落ちざる事とて風引くの憂なし、三四時より少しく冷を催すと雖も、その頃は人の熟睡しつゝある時にて、要するに夏は唯だ熱しといふの外なし、然れども日本にて覺えざるほどの熱さかといふに、否と答ふべきは勿論なり。

かりそめにも極樂といはるゝ海岸にて猶ほ然りとせば、遠き内地の如何にあるべきかは乃ち疑はるゝが、予がアグラ、デリーに遊びし所を以てせば、一應非常の熱さと云はざるを得ざれど、是れも亦た思ひし程にあらずと云はざるべからず。蓋し予が就て質問せし所の人々は、孰れも時候の宜しきを擇びし由なるに、或は頭痛せしとか、或は唇があれしとか、一も不愉快の言ならざる無く、之れを聽き慣れし予が心には たとへ話を直切りて考へしにせよ、惡るき時節に惡るき土地に旅するの容易ならざるを豫想したるべく、此を豫想するの甚しくありし故にや、實際左程に感せず、且つ頭痛もせず、寧ろ平氣

にて、必要次第何時にても旅行を辭せざらんの心得なり。さりながら尋常の熱さと謂ふにあらず、其の孟買の比に非ずして、單に遊覽の爲めとしては殆に好事に過ぎたりとせんも、而も此と同時に印度の酷暑といふの決して我が日本人の堪へ難き程の者ならざるを斷言するに躊躇せず。

印度の汽車は熱を防ぐの用意に於て到れり盡せりと評判せらるゝ者、事實多くの効能なく、四窓の一を水に濕すが如き、子供瞞しとして妨げなけれど、他の普通一般なるに比して何等かの利益あることならんが、其の特種の汽車にて旅行するに、風も光も入らざるやうに總ての窓を閉ぢ、暗くして中に横はるのみ、半日にても一日にても一晝夜二晝夜にても然る有樣にて、

寢轉ぶが日を暮らすの唯一の方法とは至極だらしなき體たらくなるも、以て熱さに窘められるゝ度あひを推すべし。然れども此の內地の熱が海岸と幾何の差違かと問ふに、氣象の報告に徵するに殊に著るしきを看ず、時と場所とにて百十餘度に上ること珍らしからざれど、平均數に於て誠に僅かの差とすべく、故さら差別するを要せざる程なるが、身體に感觸するの到底同日の談にあらずと云ふは、內地に熱風と塵との二惡素を有するを以てなり。風さへ涼しくば百三四十度と雖も左程にあらざるは汽船の機關室にて驗知すべき所、而も其の風の比較的熱さ限り、九十度も猶ほ苦悶を覺ゆべく、海より遠ざかるほど益々熱さに苦むは主として是れ故とす。素より印度に限れるにあらず、支那にも濠洲にも

凡そ太陸的なる處に皆な之れ有り、かの靈陽に炙られ滿身に汗するに方り、風簌々として聲ありながら、少しの冷をもたらさずして塵埃と與に炎熱を運び來たる、其の不愉快さ加減は夙に人の知る所。

印度の內地は恐らくは其の甚しき者にして、此を巡行する火事場を歩するの心地すと雖も、豫め之を想察し來れる者には其の甚しきを感せず、能く堪ふること幾んど土人に異ならず。予に在りては二つの意外なる幸事ありし、即ち汗ボの出でざる事、蚊の居らざる事、是れなり。初め予最も汗ボと蚊とを畏る、熱さは眠りて忘るゝを得るも、汗ボの盛んに發して刺擊するに曾ひては爲に惱まざらんと欲するも得ず、前孟買領事に香港に曾ひ、其の肥滿して汗ボに難儀

したらしきを見、治療の術を問ひしに、どうも仕樣がないとの事にて失望せり。且つ蚊の攻め寄するは休息を妨ぐること言ふ迄もなく、マラリヤを傳染すとありては、かゝる瑣細の事より病に罹るの馬鹿らしく、厄介なる害蟲と思へど、さりとて豫防の良法なきに窮せしが、漸くして酷暑の際雨つながら此禍の免れ得べきを聞き、次で海岸を離れて熱き土地に進むだけ其れだけ益々其の事實なるを確めたり。孟買にては熱さの甚しからざると共に汗のじみ〳〵して汗ボたらんとする憂あれど、一層酷烈にして乾燥極まれる處にては汗の蒸發すること早く、水なりラムチなりを飲むの多くして之を飲む毎に身體浸たすが如くなるも、直ちに乾きて濕潤する所僅々、少しく用心するに於ては毫も汗ボたるの徵

候なく、常に皮膚の滑なるを得る。且つ孟買にても炎暑に蚊少けれど、夜中に必ず蚊帳をつらざるべからざるが、内地にては全くの必要なく、何れの旅舘にも用ゐず、時として一二の出づるあるも、別段妨げと爲らずして棄て置くも差支なし、斯くして既に治安を害せられずんば、疲勞して眼眩せんとするも、一たび水浴し喫氷し大字形に横はり夢に華胥に入る、則ち苦熱の何處にあるを知らず、又た何ぞ頭痛の起るあらんや、況んや餘病をや。

孟買に郵船會社、正金銀行、三井物産等、それぞれ支店あり、店員は極暑と雖も皆な事務を執る、勤勉なること在留の西人に比して一層なりといふ。西人は留まること五六年にして身心の衰弱を來たすとの事、邦人も亦た或は免れざるべきも、溫熱に堪ふるの度に於て後者の前者に優るとも劣らざる丈けは確實ならん。印度人の怠慢、懶惰、運動嫌ひ、寢好き、進爲の氣性に乏しきは、氣候に化せられしこと其の多きに居るべく、此の如き熱國は吾人の久しく安んじて居るべきに非ずと雖も、一二年若くは三四年づゝ留まりて事業を營むは何の難きを見ざるべし、苟も志ある者は皆な蹶然として起つべし、印度の熱さは想ひし程にあらざるなり。予が内地に入りしは所謂モンスン前にて夏の最も熱かりし時なるが、孟買に歸れば雲氣四に起り大雨屢〻注ぎ、さしもの積暑も洗ひ去られたる狀あり。

印度の名區

印度は名にしおふ釋迦の生れし土地にて、定めて名所舊跡の多かるべしと思はれんが、なるほど名所舊跡の多きには相違なし、遺跡の既に消滅して僅かに口碑に傳ふる、殿堂の半ば壞れて半ば存する、樓閣より庭園まで依然として形を全うする、擧て計ふべからず、幾千年幾多人物の生死せし地、處として何等かの事蹟を印せざる莫し。若し佛徒にして敎祖の靈跡を訪はんことを欲せば、若し古物を珍重し頽垣廢礫を尋ねんことを欲せば、若しマハバラタ、ラマヤナを愛讀し親しく山川に就て理會するあらんことを欲せば、譬へば大師の八十八ヶ所に詣で、名家の墓碑を吊ひ、源氏物語に云々せる地理を明かにせんことを欲せば、或は路傍の水石にも趣味を感するを得んと雖も、若し此と違ひ工藝の發達を誇るの今日尙は目して以て偉觀なり美觀なりと爲すべき者を求めんとする、即ち大坂城日光廟の類を見んとする、則ち別に考ふる所なくば有るべからず。

我國印度を知る者少からず、視察員の出張せしもあれど、多數は未だ歐米を知るほどに之を知らず、大抵皆な釋迦に最も重きを置き、之を中心として一般を考察し、其の敎法の衰頽せし以來總じて混沌亂雜何等注意するに足る無しとし時として麗に佛陀伽耶の如きを想起するのみ、然れども是れ何ぞ日本を以て聖德太子の日本とし、太子に關せざる限り一も問ふを要せずとするに異ならんや。太子は日本史中重要の人物、

之れが關係の寺院は亦た頗る觀覽を値するも、而も以て日本の事爰に盡きたりと爲すは謬りの甚しきもの、爾後權力の相家に移り、一轉して武門に歸し、鎌倉、室町、大坂、江戸等、順次全盛を致たし、間、見るべき者一にして足らず、今日人の好みて遊覽する所のものは後人に關係するの太だ多きにあらずや、印度に於ても亦た同樣にして、數千年の遺址の存續すと雖も、現に美を世界に競ふべきは却て蒙古朝の造作に屬す。

英國領としての印度半島は、カルカッタを首府とし、孟買、マドラス之に次ぎ、三ケ所にて支配せられ、人口と繁榮とを以てして他に能く及ぶある無しと雖も、此等は恰も日本の橫濱神戸及び長崎の如く、孰れも皆な互市場として外

國人の力にて發達したる者にして、我が京都若くは江戸の如きを見んとする、必ず他に於てせざる可らざるが、權力の分かれて割據の形づくられたるの屢次なりしため、常に帝都の實を保ち全半島を代表するの難たかりしかば、デリー、アグラは幾許か其の地位を占むる者と認めざるを得ず。二者相ひ近きこと殆んど奈良京都又は京阪の如く、寧ろ合同して視るの便利にして、古來帝王多く此に都し、天下の治まるに方りて、最も盛榮を極むると共に、其の亂るゝに方りて最も兵禍を被むり、土人今に及び尙ほ之を以て國運の決する所と爲す。故に千八百五十七年四方蜂起して獨立を計れる、則ちデリーを以て中央とし、七十七年一月一日英國女王の印度女帝と稱せる、則ち盛式を此のデリーに行ひ、今の英國王の印度皇帝と稱せる、則ち亦た本年一月一日盛式を茲に行へり、デリー及びアグラの印度史に最も多くの關係を有する、昭々として明かなり。

古戰場はデリーより二十里許りのバニバットに若くは莫し、バーバルが阿富罕の大軍を破りたる、アクバルが同じく阿富罕の大軍を破りたる、阿富罕のアーマド・シャが大に印度兵を破りたる、實に三大決戰の演ぜられし處、而も今は一の原野たる外何の特徵とすべき者なし、興壞盛衰の跡は、追撫して感念愈〻深きも、此類を除去して現在の物にて現在に稱すべきを求むるに、是れ亦た殊に此邊に多く、而して其の主要なるは軍事と宗敎とに關するが、我が大阪城及び日光廟を以て之に比するに、デリー、アグラ幾個の城壁は偉は則ち偉なるも、素より太閤の企畫に及ぶべくもあらず、然れどもアグラのタジ・マハルに至りては唯だ獨り美名を擅にして他の能く雁行するをだに許さずと謂ふべし。物質的文明を曲解するに於ては、一のタジを見て蒙古朝の野蠻より出でたるに非ず、美感の進歩せる、意匠の高尙なる、設計の周密にして技能の之れに伴へる、優に文明の極致を味ひたるを斷ずべく、城中の高臺よりジャムナ河に沿ひ遙かに白堵の玉の如きを望む、乃ち皆な期せずして思はん、當年の君主の酋長的にあらずして大帝國の皇帝と崇むるの決して滑稽にあらざることを。

日光を見ざれば結構を語り難しとの言ひ傳へなれど、其の山水を別とし、其の粉飾を別とし、

單に建築として凡の又凡なるは既に定論あり、タジ・マハルは此と反對にして所謂天造鬼工なる者にあらず、所謂粉聖丹碧なる者にあらず、方一町高さ三間の臺の上に方半町の殿堂を築き、中央に寶珠形の大塔をして空を指さしむる數十間、盡く白色の大理石を以て造り上げたる、一見何の奇なしと雖も、見る〳〵色と形と相ひ俟ちて皎潔を極むるを知り、既にして中に入れば隈なく白石に青赤の寶石を鏤め、最も精麗にして少しの厭味なく、加ふるに光線を加減して幽艶を助け、反響を巧みにして餘韻を限りなからしむる、誠に其の妙を感せざらんと欲するも得ず、況んや樓門及び園庭の美の能く之に稱ふに於てをや、月夜の景の絶勝たるは早くより傳ふる所、予は幸にして十六夜に之を觀るを得たるも、炎暑のために塵埃濛然、豫期の如く玉殿の靈光に輝かざりしを遺憾とす、然れども尚ほ彷彿の間に之を認めたるが、若しモンスンにて大雨積塵を洗ひ月色雪の如く一輪氷の如くんば、それ必ずや心曠く神怡び恍として世と相ひ隔つるの思あらん。是れ元と蒙古朝のジェハン皇帝が絶世の美と謠はれし愛妻アルジマンド・バヌの死を哭して造りしもの、己れも亦た後に此に葬られしと雖も、要するに一女子の紀念にして、爲めに費やしゝ所、或は云ふ千八百萬圓、或は云ふ三千二百萬圓、伊太利人工事に與かり、十七年餘にて漸く成りしといふ。世に遺れるは概ね禮拜堂若くは王侯の陵墓なるに、美人の却て印度藝術の極點を造れるは聊か以て奇とすべし。

名所舊蹟は多く評判ほどの者ならざるも、タジ・マハルは實に其れ以上にして、世界の珍とするの溢美なるにあらじ、タジを視ては何を視ても左程に思はれざれど、他に尚ほ見るべき者少からず、金殿玉樓とは是れなりや、東洋の奢りとは是なりやと思はるゝあり、然れども煩を厭ひて多く言はざるべし。山水に至りては、山の高且つ大、河の長且つ濶、壯觀に於て他に讓るべくも非ずと雖も、美とすべき者は到底日本に若かず、太守の避暑地と定まりたるシムラは海を拔くこと六千尺、丘山環抱し、樹木翁蔚し、遙かに雪山の蒼茫に奔るを望む、洵に以て一の勝地とすべきも、而も明媚といひ秀麗といはんは未だし、但だ嚴冬を除きて常に春の如くなる、昔ならば或は仙人の住むべき處なるやも知るべからず。さはいへ印度の廣き、總てを包含せずと雖も、他に無き者を有する一二ならず、例せば巖壑盤旋し沙石燒けたるが如き處、暴雨に遇ひて幾十百の瀑布を掛く、或は汽車中にて虎狩の談を聽く、曰く一頭を獲たりと、曰く虎と思ひしに野猫なりしと、さすが印度だけに天竺らしく想はるゝ所あり。

英佛獨及び露米阿

今の世にありて所謂文明なる者を觀るに、首として英と佛とに於てし、之に次ぐを獨國とす。男子の衣服は倫敦を以て流行の中心と爲し、各國の王侯紳士苟も調製に意を用ゐる、皆な此處

ひことを多し。若し衆庶を旌表して之を褒美するに至るべきに、則ち之を滅亡に陥らしめんとするの類あり。而も其の亡滅せずして却つて金を隆興するの類あり。特に其の贅澤と呼ばるゝ者、皆な寧ろ必要ならざるもの、貧に能く節儉にして能く勤勉なればなり。

倫敦と巴里と各〻一長一短あり、一概に相合して以て今の文明社會を代表すと謂ふべし、之と較ぶれば獨國の首府たる伯林は、遙かに其の下に落つ。是れも普魯西の首府、其の英佛二國の首都を、獨逸統一の後、南部の諸都漸やく衰ふると共に繁榮次第に衰へ、而して頓らに歸し、歳を逐ひて金と大を加へ、而して頓らに愈〻金と大ならんことに汲めつゝあり、夫の區區たる市府なく、第一の都會と稱せらるゝ、里昂の如きの小なるもの、是より以下、知るべき、貧に甚だ小なるもの、即ち市府なるも、其の亡滅せずして金と人とを集むるの魁たり。而も其の貧に能く節儉にして能く勤勉なればなり。

特に其の贅澤と呼ばるゝ者、皆な寧ろ必要ならざるべきに至るべきの魁あり。

苑より其上に出づるが如くして貧は他をして貧に甘んぜざるべからざるに至らしめ、居ながらにして貧を強ひ、金を散ずるや、彼肇此と交際して喜ばれ、即ち他國人の來り遊びて可なりと呼ばるゝ者、皆な寧ろ必要ならざるもの、貧に能く節儉にして能く勤勉なればなり。

に於ける構成の結果たり。但だ巴里の外に大なる市府なく、第一の都會と稱せらるゝ、里昂の如き、貧に甚だ小なるもの、是より以下、知るべきのみ。

の習慣の然らしむる所に外ならず。

英國の首府は人口五百萬と號すれども、數のみにて服を着して何ぞ風姿の見るべきあり、盛し多年既に全世界に冠たり、街路は彎曲して而も狹隘、毎に掃除に意を用ゐるも、一掃の後ち忽ち復た汚穢、二六時中馬糞の堆積を見ざる莫し、馬匹の往來繁き、貧に他に類を看ず。加ふるに林立せる無數の煙突は絶えず煙煤を吐き、濃霧に遮蔽せられて終々晝々晦々に燈を點ずる稀れなり。

に注ぐ。文し、材料と裁縫と共に他のものゝ及ばざる所なり。而して婦人の衣服は巴里を以て流行の中心と爲す。而して婦人の衣服は巴里を以て流行の中心と爲す。選擇を念とせざるべからず。則ち皆な此處に於て然らざるべからず。坂の如きもの、獨り其の衣服のみにあらず、英國の男子は、風采自ら備はり、如何にも丈夫らしく、佛國の女子は嬝娜の中に自然に秩序の整へるに非ずんば、寧ろ能く此の如きを得ん、此に類するもの所在之れ有り。

佛國の首府は人口三百萬、街路は比較的井然、而して又た廣濶、屋宇と相似映して壯且つ淨、遊樂の道具は悉く備はり、以て贅澤の限りを盡し、市民は決して遽りに財貨を消費せず、慥ね儉やすこし少くして而も築かに見ゆれど、如何にも嫣樂を極むる風俗にて、晝は此邊に存せずして、晝に學術の方面にあり、夜に至りては今尚ほ頗る野鄙なるを免かれず。中にも風俗に至りては特に稱すべきものあり、唯だ今日の處にては、必ずや將來民物の著しく豐阜なるを

例にして、見んも、かちて穩かに通過し、實も紛亂の態なし、慥よ。

群會する者、右する者、左する者、自から防ぐ分も無く、然るも一旦祭日に臨みて大衆の集る處にしては、向ふが僅に右を命ぜず、左を命ぜず、衝突を避けしむるも、行人に向つて左右を戒めて衝突を避けしむるの處にあり、巡者は、馬車の往來、群集熱鬧の處にあり、一刻相合せられて終々晝々晦々に燈を點ずる稀れなり。

詩文にあり、音樂にあるなり。獨逸は久しく他國に壓迫せられて力を外に伸ぶる能はず、國民皆な內を省みて自得するに傾むき、總じて主觀的の事のみ發達するに至りしもの、己むを得ざるに出でしと雖も、又た斯くして世に傑出することを得たり、然るに近年漸々他國の壓迫を脫して却て他を壓迫せんとするに及び、次第に特長を減殺するの恐れなからず、今後尙ほ永く此の優れる方面に於て優り得るやは疑問に屬す。

さもあれ今日まで英佛の二國首位を占め、獨之と雁行し、かくて三國各〻文明培養の地として存立し、他の諸國をして其の一に就て或るものを習はしめ來れるが、此は是れ過去より現在に及べる實狀たりとす、將來とて固より多少の發達は之れ有らんも、更に大なる變化の生ずべしとは思はれず、何となれば三國に於ては諸般の事物皆な殆んど固定せるに幾かく、之を譬ふれば生まれて既に成長し、全く大人の域に入りたると同じ、爾後歲月の經過に伴ひて體格の一層整ふを見んも、究竟何樣の發達を遂ぐべきかは豫め推知するに難からず。將來の發達を推知するに難きものを搜むる、露西亞の如き即ち其の一たり、首府彼得堡は人口猶は百萬を超ゆる僅々、他の大なる首府に比し數に於て遠く劣るとはいへ、宮城、イザク寺、及び他の顯著なる殿堂、皆な結構の大、輪奐の美、多く類を見ず、其の沼地に市邑を造築し、漠々たる空地の遠く天に連る、規模雄大なりといはゞ則ち雄大ならん。米國の如き、亦た同じく將來の測るべからざるもの、首府華盛東や特に言ふに足らざれど、

紐育の如き、シカゴの如き、皆な非常の勢を以て擴大し、なほ愈〻擴大して究極なからんとす、其の製造工業及び他の事業に向て新たなる機械を使用する所、實に獨歩とすべく、蒸汽力若くは電氣力の應用に至りては、殆んど到れり盡せりと謂ふべし。阿弗利加も亦た測るべかざるもの、金剛石の採拾せられ、金鑛の續々發見せらるゝ、皆な之をして大ならしむる所以なるが如く、將來果して如何の發達を遂ぐべきや輒く推知すべからず。

今日にありて將來を知るに難きもの、露米阿の三大陸實に是れ。凡そ事物は其の是なる點より觀れば則ち是なれど、飜りて非なる點より觀れば則ち又た非なる者あり、而して其の非事の大に增積せずと限らざるなり。現に露國は野蠻を以て目せらる、其の野蠻たるは實際に於て明々白々、規摸の堂々たるは之れ有るも、此を滿たせるは甚だしく品質の粗惡なるものとす。現今の政治は現今の社會を維持するに堪へんも、社會を進步せしむるに於て何樣の效能あるか、往昔秦皇醫藥卜筮の書を許して他を禁じたりし如く、醫學や美術やは力を極めて之を奬勵するに反し、其の他に於て偏に民を愚にするに勉む、思へらく、民を愚にするに非ずんば以て治安を維持する能はずと。然れども民を愚にして後ち當に如何にして荒漠たる曠野を開拓すべきか、外國人の力を籍りて之を開拓すべしといふか、外國人の力を籍れば以て之を開拓し得んも、利益の大部分は他の掌裡に落ち去らずや、而も之を慮かりて外國人の力を籍らざる、則ち開拓の

希望を奈何せん。將た開拓に成功せずとも、今日に於てこそ晏然之を保有し得れ、森林及び鑛山より獲得すべき富の饒多なること一たび判明するに至らば、國外の人は豈に唯だ袖手傍觀して已むべけんや。

今や強國の名あるもの皆な孰れも自國の面積に比例して人口の多きを憂ふ、人口の多きを憂へずとも、人口に比例すべき職業を見出し能はざるを憂へ、國外に富を求めんとして注視を怠らず、かゝる際に於て偶〻烏拉爾山の東西に亘れる曠漠たる地に無限の富ありて充滿し、其の一部を拾得するも猶ほ大なる利益あることの明白なるに會する、强國は同盟してなりとも之を分割せんとすべく、而して同盟にして一たび成る、以て優に之を分割するに堪ふべし。現時陸軍國の隨一獨佛二國は黑子の如きアルサス・ローレンの小領土を爭ひて玆に全力を盡しつゝあるが、一旦他に大なる利益の存在するの知らるゝ、則ち相ひ疾むの二國は忽ち變じて相ひ親むの國と爲らん、夫れ二國養ふ所の軍隊は戰時合して六百萬と稱す、日々斷えざる練習は恐らく精銳無比の强兵たらしめしならん、乃ち二國同盟して他に對する、當に向ふ所摧破せざるなきを見るべく、況んや塊何の同盟に入ると共に、更に二百五十萬の大兵來り加はるあり、既に三國の同盟にして成る、英も亦た默して止まざらん。是に於てか同盟の陸軍合して八百五十萬、加ふるに英に於て海軍を以て外より援護し、更に又た得らるゝ限りの陸兵を派して援くる、露は應に如何にして彼等と對抗し以て其の領土を

守護すべきか、戰時に集め得べしとする四百五十萬の陸軍は敢て少しとせざるも、其の茫漠たる大領土と較視する則ち甚だしく不足を感せざるを得ず、特に對手たる四國の同盟は優に倍數に近かき大兵を派して侵寇を試むるに堪ふるをや、勝敗の數既に顯然、必ずや四分五裂に終るの外なからん。然るも之を慮かり豫め進歩策を講ぜんとして民智を進むる、內に不平の分子增殖して爲めに革命を惹起するの憂なからず、民を愚にすれば外患あり、民を智にすれば內憂あり、將來の運命測り知られず。

米國は露國に比して數段の進歩あり、單に物質的文明といふに於て他に超越するのみならず民智亦た概ね啓發し、國民の中健全の分子を含むもの少からず。而して廣大なる土地を有しながら、世の非難を冒かして比律賓群島を强奪せるは抑〻何に因るとする、依りて東洋に根據地を作り以て大に商工業を延べんとしたるか、然らば何故に之を內に擴げんとはせず却て直ちに外に擴げんと計りたるや。斯國の製造家は相ひ互に競爭せる結果、低價にて多くの物品を製造し、而も之を販賣するの場所なきに窮し、乃ち剩餘の物品を國外に賣り附くるの必要よりして新たに地を求むるに至りたるが、實は內地に於て之が需用者なきに非ず、如何なる衣食住も必ず之を需めんとする者の多きに徵する、却て內に需用者の多きを謂ふも妄ならず。之を棄てゝ顧みず、必ず數千里の外に賣り附くるに非ずんば製造品の販路を得ざる社會は頗る奇異なるものと謂はざるべからず、かゝる狀態にて果して

長く持續し得るか、將た得ざるか、是れ其の將來の運命に關する甚だ大なり。

且つ米國に於て人口の遽然增加したる、外國より移住せる者の多かりしが故にして、當初移住者の多數は歐羅巴の北部よりし、比較的善良なる分子なりしに、近來は北部より移住する者漸々減少して南部よりする者益〻多きを加ふ、例せば今より十年前即ち千八百九十三年には獨逸より來住せる者七萬八千七百五十六人なりしに、昨年は二萬八千三百〇四人に減じ、愛蘭人は十年前に四萬三千五百十八人なりしに、昨年は二萬九千百卅八人に減せるに反し、伊太利人は十年前に七萬二千百四十五人なりしに、昨年は十七萬八千三百七十五人、本年は大約二十二萬五千の多きを見る豫定なり。而して此の逐年增加する歐羅巴南部よりの移住者こそ、實に盜賊、贋金者、その他各種の犯罪人の由りて生じ來る淵藪なれとは一般に認めらるゝ所、かく諸國より來住する者の多きに因り、人種の雜駁なるは當然といふべく、たゞ黑奴のみにても九百萬に上り、實に全數の十分一を占む。人種の雜駁なること彼が如き國土にありては、或は著しき進歩の見るべきあるも知り難し、由來良好なる人種も同一の國土に定住すれば自然に停滯して進歩の見るべき無く、之と反して如何に劣惡なる人種も多數相ひ交雜すれば漸次に化して良好と爲るべしといふ說より推考する、彼が如く人種の雜駁なるは以て著大なる進歩を期すべき所なるに似たれど、而も亦た或は惡結果の生ずる無きを保すべからず。夫の墨西哥の如き、南米諸國の如き、皆な西班牙人と土人との交雜して既に久しきを經來れるもの、而も特に進歩の見るべきもの無きに考ふる、人種の雜駁なるは必ずしも好結果に終るにあらず。且つ今日の勢を以てする、モンロー主義の愈〻事實と爲りて南北亞米利加統一の方に向ふも知るべからず、若し果して然りとする、永く平和を保持し得べきか、將た非常の變動の起るを見るべきか、眞に測る可らざるに非ずや。

阿弗利加は今僅に端を啓けるのみ、洲內に有らゆる富を藏し、將來必ず大に發達すべきを說く者あると共に、更に反對の言を作す者あり、曰く藏する所は唯だ鑛山のみ、此を離れて特に希望を屬すべき者なしと、兩者孰れの眞を得たるにせよ、現に列國の分割して領有せるもの各〻國として發達し、然る後ち更に聯合して一大合衆國を作るに至るか、將た斯る事の到底望むべからざるか、或は望むべしとするも猶は五十年百年に期し得べからざるか、是れ皆な疑問たり。總ずるに英佛獨の三國は世界に於て文明を以て目せらるゝの國なるが、其の將來の運命や豫め推知するに難からず、果して大に盛んなるべきか、或は盛んならんとして大に亂るゝか、將來の運命の測り易からざるもの、露米阿の三大陸是なり。然れども均しく將來の知り難きより言へば、支那四億の人口と印度三億の人口とはそれ當に如何なるべき、是れ亦た茫として知るべからず。畢竟人類は土の如く石の如く頑然變らざるものに非ず、其の一盛一衰變の朝に夕を計られざる多く、種々の喜劇を演じ種々の悲

劇を演じて隆替興亡するもの、殆んど定まれる運命たりと謂ふべし。

日本の社會と英國の社會

人種の特性に因りて社會の狀態の互に相ひ異なること有るべしと雖も、而も同樣の圍繞の爲めに同樣の運爲を呈すること亦た數の宜しく然るべき所とす。日本の社會を以て英國の社會と比較せんとする、我が現狀を以てするは固より能はず、日本は近く四五十年間に著大の變動を遂げしと謂ふべく、即ち古來未だ曾て有らざるの大刺激を受け、是時まで少しづゝ變遷し來れる事物の或は遽に消滅し或は遽に更革し、新たなる秩序の將に成らんとして未だ成らざるの時世、農にして商と爲り、商にして工と爲り、若くば農商の化して軍人と爲る、皆な意の欲するが儘、變易の速かなる寧ろ驚くに堪へたり。英國亦た同じく多樣の變化を經由せしもの、一世紀毎に前世紀と觀を異にするあるも、要するに數百年來順序を踏みて徐々に進遷し以て今日の秩序を成立し、而して其の秩序の整へる點や却て我が舊幕時代を想起せしむるものあり。

舊幕時代には階級の差、四民の別、儼乎として存し、曾に職業を變ふるの難きのみならず、相ひ互に交際するさへ難く、各自皆な其の家業を守り、父よりして子に傳へ以て遠孫に及び、百年二百年三百年一定の職を襲ぎて變はらざる稀れならず。乃ち守株膠柱の癖あると同時、一

切の事多く念に念を入れ、家屋より器具に至り大抵堅固を旨とし、腐蝕剝落する少なく、銅器の如き、漆器の如き、優美にして雅致あり而も久しきに耐ふ、而して其の然りし所以のもの、實に皆な其の業とする所を業とせざるを得ざりしに因る。今の英國も亦た此に似たり、四民の別の嚴なるは固より之れ無しと雖も、猶は他に階級の紊すべからざる者ありて存す。公爵の徒は土地を有し名望を負ひ、一の階級を作して儼として特立す、實にヂスレリー、グラッドストーン若くはチエムバレーンさへも共に交はるに苦むべき所。政治家は又た別種の階級を形くり一方に雄視して能く社會に重きを爲す、是れ以外學者も亦た一の階級を作り、商工業者も一の階級を作り、更に幾多の職業を異にする者各〻別に階級を作り、相ひ互に其の屬する階級中に在りて業に勤め職に勵む。但し階級の儼として存するとて必ずしも其の職とする所を變へ能はざるに非ず、商人にして僧侶と爲り、僧侶にして學者と爲るは之れ有り、而も多數を概すれば一般に父祖の業を繼ぎ之を守りて變らず、鍛冶の子は鍛冶と爲り、木匠の子は木匠と爲り、かくして父祖の業を守りて一生を終ふ、兵卒となる者、水兵となる者も單に或る年限を過ごさんとてにあらず、一生を此に委ぬるの決心を以て入り、年金を得ざれば退かず。

是れ必ず己れに適するの業に從事すといふに止まらず、更に轉じて他の業務に移るの困難なればなり。而して移るの困難なるだけ其れだけ各〻業とする所に精はしく、念に念を入れ、思

ひに思ひを込め、敢て事を苟もすること無し、夫の英國製品の堅固にして永く使用に堪ふるの稱ある、良に此に因る。あらゆる事物既に已に確定し、人皆な中途にして變せず、爲めに新たに事業を起し若くは新たに機械を据ゑんとする、謂ゆる石橋を叩いて渡るの觀あり、家屋も機械も、永久に存續せしめんことを欲し、永久に存續せしめ得るが故に能ふ限り之を使用して容易に改むることなく、會〻他に新發明ありて已れ用ゐる所の舊式に屬するに至るも依然之を守りて新に就かず。且つ翅に舊を守りて新に就かざるのみならず、故らに舊さを好むの風を存し、特に學校若くは公會堂は成るべく舊きを貴しとす、廊下の石の磨耗して傾くも之を新たにする無く、蘚蒸し苔生ふれば其の益〻多からんことを希ひ、總して古色蒼然たるを悦ひ、人に向ひて其の幾百年前の作なるを語り、以て誇るべきの第一と爲す。此點に於て正に我が舊幕時代の趣あり、秩序にして既に確立せば勢ひ斯の若くならざるを得ざらん。我が日本の現狀は變化の猛烈を極むるもの、他と相ひ比觀するの難きや必すべし。

英人は全く保守にして殆んど頑迷と呼ぶの當れるを見ると雖も、獨り其の自由を得るの度に於て我れ彼れに若かざること遠し。英國は此の如く秩序成立し、保守の極殆んど頑迷に陷るとはいへ、其の國人は皆な大に自由を得、絶えて業務を妨げられずとして可。階級の別嚴にして容易に素す可らざるも、一の階級よりして他を制壓すること無く、公爵若くは大僧正の類は、己れ高く標置して他を賤蔑し、且つ一般に輕侮の綽名として小商人（トレードメン）といふの字を存すとはいへ、何人も己れの言はんと欲する所を言ひ得べく、己れの爲さんと欲する所を爲し得べく、苟も己れ屬する所の階級を脱せざる、則ち何事にも他より妨害を被むるの憂なし。

同一階級内の競爭の激烈なる者あるも、そは純然たる自由競爭にして、勝を制するは能力の餘れるが爲め、敗を招くは能力の足らざるが爲めのみ。己れ所屬の階級に留まりて他の階級を犯さゞるも、必すしも他よりの制限ありて然るに非ず、若し他を犯さんとする、則ち之を犯すことを得ん、但だ爾かするの却て己れに不利なるが爲め、所屬の階級に留まり、父祖の事業を繼承し、以て利益を增進せんとするなり。而して己れ利益を增進せんとする、唯だ己れの能力に賴るの外なく、能力ある者は其の多少に應じて何れの方面に向ひても伸ぶるに足るべし。當初機械を据え付くる、永久の使用を期し、當初製造の方法を得る、永久此に則らんとし、輒く之を改むるを肯んせざるも、頻りに競爭者の繼て出で、到底我れの彼れに當り難きを察する、乃ち斷乎たる大改良を施し、以て百事皆な競爭者の上に出でんことを勉む、乃ち機械は最新且つ最良なるを据え、製造物は能ふ限り品質を善くし實用に適するを旨とし、豫め必勝の途を講じて以て改良に着手す。此時に方りて何等の制限を受けず、何等の侮蔑を被むらず、己れ業とする所に勵精して怠らずんば、則ち優に競爭者に贏つことを得、而して相當の分を盡くし、者と

して目せられ、眞に自由の精神を以て自由の天地に逍遙するの觀あり。保守を尚びて殆んど頑迷に幾かき風を存しながら猶は毫も他の進歩に後れざる、全く此の自由の賜物たりと謂ひて謬らず。

顧みて我國の現狀を察する、社會の秩序彼が如くに確定せず、人々各〻其の意の欲するまゝに職業を替へ得るも、而も實際に於て爾かく自由を取得しつゝありや、頗る思束なし。文面上にては宜しく然るべき筈なるに、種々の事情に因りて種々の制限を加へられ、たとへ往年の甚しきが如き無しとはいへ、朝に在ると野に在るとにて少からざる損得を免かれず、官吏は名譽あり信用あり利益あるに、他は則ち否らず、幸にして彼等の恩顧を受くる、或は以て手足を伸ぶるを得んも、苟も威權ある省吏の感情を損はゞ爲めに少からざる害を被むるを常とす。同じく商工業者の間に在りてさへ、稍〻成功せる者は甚だしく失敗者を輕蔑し、多數の者相ひ集まりて更に一層其の人を苦しめんとすること往々にして之れ有り。凡そ職業として何事の爲し能はざる無きが如く、而しく實際其の範圍極めて狹少、會〻成功者の爲めに苦められつゝ一二回なる、遂に全敗を以て終らざるを得ず、加ふるに計畫既に成りて愈〻着手せんとするに方り、猶ほ頗る行動の困難なる者あり。其の然る所以のもの元と種々の事情に因らんも、事實に於て言動の自由を得ざるは亦た明確なり、階級の區別特に嚴なる無く、各人皆な意の儘に行動するに堪へ、而も宜しく進むべくして進む能はざるの屢〻なるは、一に言動の自由を得ざるに之れ因る。然れども英國の彼が如き狀態にして我れの然らざる、又た多少歳月の結果に由るとすべし、彼が幾百の年歳を積みて漸く今日あるを致せると、我が社會の狀態の改まりて猶は僅少の歳月を經過せるに止まるとは、其間自ら大なる差違あるべし、我國とて豈に永久に亘りて今日の狀態を改めざる者ならんや、更に年歳の經過すると共に次第に秩序の確立するを見るべく、秩序の確立するに伴ひて人々業務に從事するの更に安全なるを得べきや必せり。英國の裁判官は概して地位高く所得多し、大審院長の如き、政府部内の最高地位を占め、得る所總理大臣よりも多し、之を我が大審院長の有れども猶は無きが如きに比する、固より同日の談にあらず、蓋し彼に在りては一切の物皆な能く法律の下に安全を得るに至りしこと、實に是をして然らしむる所以なり。我國や未だ混沌たる域を脱し得ざるものと爲すべく、今後歳月を經るに隨ひて全く此域を脱し、漸次英國に於けると同一の境遇に到達せん。

然れども我國は必ず順序を踏みて以て英國の如くならざるべからざるの理なし、英國の秩序確立して人々自由を得るは洵に其の民の幸福たり、而も彼は斯くして能く今日まで他と競爭し得たるも、其の秩序の餘りに嚴なる、さしも自由を得し彼の國民すら之に窮しみ、動もすれば米國に遁逃する者項背相ひ望むを見、而して其の本國は次第に舊風に陷りて他との競爭に堪へざるを以て目せらる、是れ豈に將來の大發達を

期する者の採りて以て模範とすべき所ならんや之れに比し米國は階級の別嚴なるなく、人々皆な自由を得て何事を爲すも意のまゝ、今日極貧なる者も明日富豪と爲るべく、赤手空拳の徒忽にして數十百萬の財を積み得べく、而して力能く堪ふる者は政治界に勢力を揮ふも亦た難からず、其の然る所以のもの秩序の未だ充分確立せざるが故にして、更に歳月を經ば其の一層確立するを見んが、未だ秩序の確立せざる際こそ即ち其の長足の進歩を爲し能ふ所以なれ。秩序未だ確立せざる際は文明といふも猶ほ眞の文明にあらず、究竟此に達するの行途に外ならずといへ、最も嚮望の滿つるは猶ほ眞の文明に達せざる際即ち是れ。青年の餘りに早く發達して大人らしくなる、爾後停滯して全く進まざるが世の常なり、大に發達せんとする、亦た必ず混沌定まらざる青年時代をして長からしめざるべからず。我が現狀の混沌たるは固より猶ほ幼稚なるの致す所、更に秩序を成立せしむるを要し、更に過去との聯絡を確固ならしむるを要す、否らざれば事々物々其の基礎を鞏固ならしむるに由なしと雖も、而も階級の制限は成るべく寛にするに務めざるを得ず、かの秩序に拘泥することの英國の如きは既に甚しきに過ぎたりすべし。然れども秩序の確立するに伴ひて充分に自由の精神を伸べ且つ之を現實にし得るに至りし彼が如きは、亦た大に稱揚を値せん、謂ゆる秩序的進歩、實に是に於て之を見る。

日英同盟

伊藤侯の政友會總裁として都築氏を從へ歐洲を歴遊せる、自から幾分か日露協商を結び新たに聲望を博せんの意あり、而して都築氏は外務を出し拔きて此を成就し以て功名を釣るに急、乃ち横濱を發するに先だち露公使と協議し、路すがら侯に説き侯に勸め侯の同意を得、林子より日英同盟の議を聞きし時も特に驚くと無く、伊藤侯及び井上伯の勢力を以てする、桂内閣何か有る、小村一輩何か有ると爲しゝが、當時の閣員は多く伊藤排斥に傾き、加ふるに小村男が新進の勇を鼓し迅速に評議を纏めんとし、山縣侯の助力を得て幸に爾かするを得し爲め、伊藤侯の命令的の電報も井上伯の煩瑣なる質問と共に水泡に歸し、都築氏折角の計畫全く打壞せり、同盟の事國民の歡聲を以て迎へられ、直接間接に此に關係したる者は皆なそれぞれ賞賜され、首功の小村男を戴ける外務省は爲に威重を加へしこと啻に一二等ならず。他の諸省も各〻是れを以て不言の實行の證據なりとし、爾後益〻斯かる事あらんかに裝ひ、一時天下の人盡く醉へるが如く、當時の外務省は實に飛ぶ鳥をも落すの勢ありき。

然るに最初の程こそ口を極めて之れを嘗贊したれ、之を賞贊したるだけ失望の容易なる跡なからず、首相辭表を呈し内閣の動搖せしとき、伊藤侯乃ち都築氏を從へて樞密院に入り、自ら議長と爲り他を書記官長と爲せり。侯は野に下りて龍の雲を離れし者と評せられしに反比例

し、朝に上りては頓に勢力の加はりり、さすがに元勳隨一と思はしむる場合もあり、復た歐洲の野に彷徨せし浪人の伊藤を以て見られず、前に誹られし事も大に賞められ、前に冷かされし事も謹みて聽かれ、都築氏も亦た便宜を得ること尠少ならず。栗野氏は最初より日露協商に勞せし者、日英同盟の爲め一時全く面目を潰ぶしゝかば、或は伊藤侯の力を假りて回復策を講せんともせん、固より車夫馬丁の交際の如く囂からざるべしと雖も、外務當局は新たに舅姑たる者、寧ろ姑小姑たる者を得たる心地せり。

英國內閣の動搖するに及び、或は延て我國との同盟に影響するなきかを懸念する者あり、大黒柱たる老チェムバレンが去りし事とて容易ならぬ次第に相違なきも、乃父の名を辱めざるオーステン氏の在るあり、加ふるに務めて舊態を維持し居れば、外政に關し何等變動の起るべしと思はれず、然れども保守黨內閣は既に漸く國人の倦厭を招き唯だ幸に反對黨の衰弱に乘じて今日に維持せる事なれば、一たび蹶きて二蹶し三蹶し或は遂に瓦解するに至らずと限らず。同盟は五年の期限にして其の間如何なる內閣も之れが履行に務むべき筈なるも、內閣の異狀は幾許か手加減の相違を生ずべく、且つ五年の期限といふも最早二年を經過し、遑り三年も匆々過ぐべしとせば、我國の前路を察する、轉た熟慮すべき者のありて存せん。

我が當局者は日英同盟を著大の成功と心得たれど、中には早くも結果を慮かり、五年間に如何にして如何の利益を得べきか、將た五年の後を如何にすべきかと、同盟の外に別に着手する所あらんとするもありたり。同盟は固より相互利害の一致より成るもの、或る事體の下に日本に利益あれば英國にも利益あり、日本に損失あれば英國にも損失あるの姿にて、我に於て他より恩惠を被らんとするに非ず、又た保護を仰がんとするに非ず、双方均しく利を受くるか、將た一方利して他の一方損するかを顧慮するのみ。同盟の永續せざるべきを憂ふるは、我れ獨り利して他に感謝すべきかに念ふに起る、我は之が爲めに幾分の利益を得ずとせざるべく、之れ無くんば露の朝鮮及び滿洲に野心を表出する一層甚だしかりしならんも、而も我が得る所の利益は究極幾何なりとする、唯だ奔命に疲れて謂ゆる草臥儲けに終はるが如きあらば、實に悔ゆべきの至りならずや。

英人の同盟に於ける、邦人の如く熱心に贊成を表せざりしも、一般に之を是認したるは疑ふべくもあらず、而も又た之を非とし若くは之れ以外に英露同盟を結ばんと思ひ立てる者なきにあらず、內閣交迭の曉或は同盟熱の冷却すべきやを想ふは是を以ての事なり。斯の若きは萬々之れ無しと考へらるれど、假りに之れ有りとするも、我は斷じて之が爲めに憂苦し苟も英に媚ふるが如き事あるべからず、或る論者の明言したる如く英にして日本と同盟するの不得策にして露と同盟するの得策ならんには、須らく猶豫なく爾かせしむべし、我は多少打擊を被らんも、亦た全く力なき者にあらず、是れより彼が爲めに利益範圍の保障たる義務を盡つ、彼が海軍は

支那海に覇を稱するを得るも、露が陸路南下するに對し如何にして之を防ぐべきか、遽に侵略を試みらるゝ事なかるべきも、長江流域は全く防備なしと謂ひて可、馬を下りて敵と和するの唯だ他に致さゞるゝ所以なること、常識ある者皆な之を知る。曩にトランスヴアルに全力を盡くしゝに方り、他の禍に乘するに汲々たる列強をして一指だに其の絶東の利益に染むる能はざらしめしは何ぞ別に故あらんや、我が陸軍及び海軍の名を假りたる少からざるべし。

英國人の中既に疑を挾める者あり、曰く日本と同盟して其の實を擧ぐるに勉めざるは何ぞ、何故に東京の公使館を大使館と改めざる、何故に林子に勳章を與へざる、何故に　天皇陛下に相當の好意を表せざる、波斯王に名譽ある勳章を贈りて未だ此の　陛下に及ばざるは豈に怪むべきに非ずやと。是れ皆な儀式的の事にして實を主とする者の深く意とせざる所なるも、斯る事すら英政府は敢てせんとせず、事の稍〻困難なるものに至りては寂然として動かざるの觀あり、固より皇帝に於て我が將校を賞せられたるは之れ有り、特別の拜謁を賜はりたるも之れ有れど、而も其他に於て何の異なるを見ず。彼れが首相及び外相の我が公使に對する、幾分か重きを加へたらんも、東洋の形勢を揣摩し之に應じて計畫し訓令すること前年に違へるかは聊か疑はしとすべし。而して其の同盟を輕視し一時の戲れとするかと問はゞ、亦た決して然らず、今尚は眞面目なるは疑ふべからざらん。

蓋し英國の外交に拙なるは其の常とする所にして、時ありて敏なるは除外例とし計ぶべきのみ。外交に拙なるに拘らず、能く雄を世界に稱するは、唯だ國民の常識あり忍耐力あり勇氣あり愛國心あり當局者の失敗に落膽すること無く龜の兎に克つの意氣を以て一歩は一歩より確かにし遂に究極の勝利を得るが爲めなり。故に其の發展の歴史は政府の歴史にあらず人民の歴史にして、米洲に印度に佛と競爭し勝を制したる、孰も皆な然り、外交其の物に於ては毎に他に一着を輸するの有樣なりし。近く南阿戰爭に於ても國民が永遠の大計と認ため二十億圓を拋ちたるの稱すべきも、外交として特に見るを値する無し、東洋經營に於ても斷えず露獨佛に先きを制せられ、拳匪鎭定の後ち派遣の吏員より催促され漸く日本と同盟するに至りし位にて、其の緩慢なること寧ろ驚くべし。其の緩慢なるは同盟の當時首相ソルスベリー卿が滿洲の何處たるを知らず、外相ランスダウン卿が旅順大連の差別を知らざりしを以ても推すべきに非ずや。

英國の恃むべきは政府に在らずして國民に在り、外交の拙なるは其の常とするもの、唯だ國民が個々人々不撓不屈なる所能く外人と競爭するに堪ふるなり。我が日本は此に類するや否やは未だ遽かに判すべからず、國民に自治自衛の力あるやに考へられ、少くも爾か望まるべしと雖も、未だ之を實地に證據立つるの時機を得ず、差し迫りの時局には當路者の樽俎折衝を巧みにせんことを希はざる能はず、其の一たび失敗したる後ち之を回復せんこと頗る難からんか。然るに當路者の嘗梅に從事する、英國と與に倶に

するの心あるべく、而して他が外交は則ち彼の如く緩慢なりとせば、我に於て尋常の手段を用ゐる限り、失ふべからざる機會を失はんは豫め必すべし、若し同盟をして無意義の者に終はらざらしめんと欲せば、彼れと交渉するの心得を以てせずして、彼れに東洋の事体を敎誨するの心得を以てするを要す。今の如くんば彼れ英國は直ちに露より壓迫せらるゝの憂なきも悔を後日に遺すこと昭々として明かなり、分別の遲き鈍根者を導くが如く孜々汲々之に忠言し之れに勸告するは、亦た我が好意に出でずと爲すべけんや。

日本の社會と佛國の社會

日本人と佛人と性質相ひ酷似すとは屢〻聞く所の言、而も日本人の性質の果して何樣なるを察する、地方によりて頗る異なるを免れず、而して佛人の性質は我國の如く區々ならずとも、亦た固より地方によりて異同を呈露す、乃ち我が國人の何部を採りて彼の國人の何部と比較すべきか、之を言ふと雖も難からずや。但し佛國にては中央集權の著しく行はれし爲め、首府巴里をして殆んど全國を代表せしめ、佛國即ち巴里、巴里即ち佛國といふの頗る事實に近きを見るに及べり、故を以て巴里を中心と爲し、他の市邑を小巴里として全國民の氣質を推察するに悉く當れりとすべからざる勿論なるも、甚しき誤謬に陷らざるに似たり。日本は藩政久しく行はれ、特に三百年間三百藩互に割據の勢を成し、維新の後ち漸く混和の傾向を生ぜるも、猶は明かに特質の認むべきものあり、東京を中心として他の總べてを推さんとする、幾何年かの後は姑らく措き、目今の處大に誤まれりと爲すべく、隨ひて一國を代表する都市は我に於て之れ有るを見ざるが、若し強て佛と我とを比較せんとする、先づ巴里人を以て東京人と京都人とを合一したる者と看做して可。

今の東京人は必すしも昔の江戸ッ子ならざるも、なほ舊時の痕跡を存續する鮮少ならず、快活にして意氣を尚び、逸やり氣にして勇み肌なる、事に臨みて水火も猶は避けず、火事若くは祭禮に他と衝突する、則ち口論に繼ぐに直ちに腕力を以てし、多數の負傷者を生ずることも間

る所あり。京都人が旅客を誘引し、之を愉快に遊はしめ、或は涼み臺を排列し、燈火を點して景氣を添ふる所、彼の珈琲店が街頭に多くの椅子を列らね萬客を迎ふるの形あり。是を以て言ふ、我が東京人の性質にして京都人の所行を兼ぬる、稍〻巴里人に幾かしとすべきか。

然れども東京人の性質にして京都人の所行を兼ぬるも、未だ巴里人に等しからざる者あり、江戸ッ子は概して江戸自慢にして他を侮蔑するも、これ唯だ天下の都たるを誇り田舍漢を笑ふに止まる、日本といふ觀念に至りては甚だ淺し、而して京都人も亦た内裏の所在地たるを誇るのみにて他を知らず、國内に如何なる變動の起るにせよ、將た如何なる外難の捲き來たるにせよ、特に此が爲めに奔勞せんとせず、斯かる場合に奔勞するは常に田舍漢として笑はるゝ所の者にして、中にも僻遠の地に於て之を見る。巴里人は一面に於て我が舊藩士の氣質を帶ぶと謂ふべく、即ち自ら巴里を以て世界第一と心得、永遠に斯の地位を喪はざらんことを期するのみならず極めて愛國心に富み、苟も他國の侮辱を被むるが如きある、必ず怫然として怒り、猛然として起ち大に呼號して天下の人心を喚起し且つ激發せしむるに勉む。假りに彼國に於て我が維新前の尊王攘夷に類する事件ありとせば、先づ蹶起して大義を倡ふるは地方よりせずして巴里よりせん。故に東京人の快活と京都人の細心とを幷はし更に幾分か田舍武士の氣慨を加へたるもの即ち巴里人の氣質とすべく、而して佛人を擧りて亦た多少此の氣風ありとすべし。

佛人は政治上の運動に於て各自意見を立て、相ひ一致することを難んずるも、或る機會に遭際しては大に合同し、擧國一致に出づること珍らしからず。彼に比すれば我が國人は黨派として頗る能く協合すと謂ふべし、從來政黨の變遷頻りなりしかど、自由黨改進黨といひし舊時代より立憲政友會憲政本黨といふの今日に至るまで、比較的多くの黨員を有し、時に驚くべき勢力を揮へり、是れ以外に小なる黨派なきに非ざるも、大抵二黨の孰れかに關係を有し、強いて固執を事とするは、獨り帝政黨あるのみ、時に變動の起りて爲めに小黨分立の態を現せんとするも、佛國に於ける如く多くの小黨を見るに至らず、議會の紛雜も、紛雜は則ち紛雜なれど、彼が如く甚しきにはあらず、黨内に鬩爭の絶えず

すとも、黨員の演壇に立つか若くは輸贏を議場に決すかの際、正々の旗、堂々の陣、能く歩調を整へ縱まゝに隊伍を紊すと莫し。此點に於て確かに佛人に優るありと雖も而も彼れが一の電撃の下に四方齊しく起るが如きは、又た我が難んずる所たり。佛人は小黨分立して互に相ひ爭ひ、大政黨の結成は其の能くせざる所ならんも、自由平等を標榜し、破壞改造を嫉視し、派を樹て黨を分ち紛爭十數年、忽ち投票を以てボナパルトを皇帝に選び、内外の事一切其の命に從ふ、ボナパルトの斥けらるゝに及び、王政と爲り、共和と爲り、幾變化の後、又た投票を以てボナパルトの甥を皇帝に選びしが、斯かる際の投票は實に最大多數にして、殆んど國民全體の一致といふも妨げず。我國にては征清の役に國民一

と爲りしも、元と各自帝國の名譽を念ひての事にして、時の當局者に服從せんとてにあらず、戰爭の一たび局を結ぶや、群起圍繞して之を攻擊し、復た假借せざりし。即ち我が國人は佛人の如く個々相ひ別れて分立せず、而も亦た彼が如き大合同を爲さずとすべきか。

佛人は軍人として世界に顯著なるもの、陸軍は優に獨逸と對峙するに足り、海軍は唯だ一の英に讓るのみ、然れども其の人を驗すれば、身材の短小なる、力量の劣弱なる、他に下ること數等。而も此の短小なる身材と劣弱なる力量を以てして往昔より數〻強敵を摧壞し、敵國に侵入し、城下の盟を爲さしめたることあり、特に勝に乘じて突進するに方りては、其の勢ひ猛烈能く迎へ抗する者ある無し。騎兵の長劍を閃めかし、敵騎を追擊し、疾風の勢を以て幾個の砲壘を乘り取ること、眞に人をして驚嘆措く能はざらしむ。然るに其の人を觀れば、則ち短小にして劣弱、與みし易きの徒たり、惟ふに其の然る所以のものは、力を以て勝つに非ずして、實に氣を以て勝つが爲ならずや。夫の氣や畢竟一の力なりと雖も、もと是れ尋常の力にわらず、非常の事ありて然る後に初めて出づるの力、他の力に類似せざるが故に姑らく稱して氣といふのみ。平素極めて劣弱なる者も偶〻精神に異狀を呈して數人を兼ぬるの力を出だすことあり、婦女子の弱きを以てして出火の際に重量の物品を輕々しく運び出だすは、人の多く目擊する所たり。世盖し普通の場合に筋肉の力の劣弱なるも非常の事に會して奮るしく神經の力を籍る性質の者之れ有り、佛人の如き即ち此類なり、我が國人も體力を以て謂へば或は支那人に若かず、彼れ北方の者は長大にして膂力あり、而も相ひ爭ふに當りて身材短小なる我れ能く逞ましき彼れを拳打し、若くは彼を投げ倒すことあり、特に兩々戰場に對抗するに至りては、强弱相ひ距るの遠き前年の戰役に驗せし所の如し。

佛人の軍隊に入るや、兵卒に至るまで猶ほ單獨に行動せんと欲するの傾向あり、獨國兵の唯だ上官の命之れ奉じ、其の命なくては何事をも成し得ざる遲鈍の性質と全く相ひ反す、故に兵を練るに際し、獨國にて個々單獨の行動を奬勵すると反對に、佛國にては成るべく合一の運動に慣れしむるに勗む。我が日本兵亦た一騎打を好むの癖あり、密に群を脫して進前しダイナマイトを爆發せしめて奇功を奏するの類は寧ろ其の能とする所、單獨の行動に於て決して鈍なりと謂ひ難きも、さりとて規律を重んぜざるに非ず、動もすれば之に抱泥するの跡を見る。先年聯合軍の北京を陷ゐれ、各國の軍隊整列して式を行ふや、最も規律正しかりしは我が日本兵なりしが、規律の正しかりし丈け又た除りに窮屈の態ありしと傳ふ、日本兵は訓練を加ふれば善く整齊し、獨自にて働くと共に一致の運動にも堪ふるとは、我が軍隊敎導の職に在りし人の齊しく語れる所、若し果して言ふが如くなる、必ずしも他の轢に倣ふべしと限らじ。獨兵は個々の運動に鈍なるが故に放任を奬められ、佛兵は任意の行動を悅ぶが故に緊束せらるゝ者にして、放任と緊束と均しく必要に出でたりと

謂ふべし。然るに我が將校にして言を作す者あり、曰く、國人の性質は獨よりも佛に似たり、大体に於て獨國の式を採るとも、訓練に臨みて宜しく佛國に倣ひ一層の緊束を加ふべしと、然れども日本人は自ら日本人なり、他と性質を異にする者あり、或る類似點を以て總べてを推さんは速斷に過ぎん。

佛人は國内に屏居して歡樂するを好み、遠く外に出づることを嫌ふ、古來四方に植民して而も効なきに終れる、元と此に由來す。而して我が國人も是れと同樣なりといはるゝが、彼我共に自國に戀々して外に出づるを欲せざる、多少自國の風土の佳良なるに由らん。佛國は英國より寒からず、獨國よりも温和、而して西班牙伊太利より暑からず、何れの地に向ふも比較的多くの愉快を得るに足らず、況んや未開遠隔の地に赴くに於てをや、忍びて新らしき風土に順應せんとするも、鄉土の慕しさは遂に得て忘るべからず、機械を運轉しつゝ覺えず淚下るは固より其の處なり。我國も時に天災をこそ被むれ、蒼翠の色、明媚の致、朝鮮に行き、支那に行き、又た邏羅に行くも、容易に同じきを求むべからず、幾年か樂しき月日を送りながら月の海に浮ぶを觀て遽に歸心矢の如くなるは獨り仲麻呂にあらじ。則ち風土の佳良なるは人の外に出でざる所以の一端ならんも、我が國人は果して外に出づることを嫌ふかは猶は疑問に屬す、國内に屏居して他と交通せざる久しく、他と交通し略ぼ其の事情を解せしより僅に數十年、乃ち其の歳月より算する、既に海外に出でし者の寧ろ多さにあらずや。多數の醜業婦の外に出でたる、種々の事情の之を促がしゝならんも、以て我が國人の本來外に出づるを嫌ふに非ざるを見るべからずや。白人ならざるが爲めに種々の不便を被むるに拘らず米洲西岸に移住して正業を營むもの三萬の多きに達せる、亦た以て從來の評を動かすに足らずや。佛國は人口の增加する少く、動もすれば減ずるの傾向あり、政府より之を增さしむるの奬勵ありたれど、尚ほ舊に依りて振はず、我國は此點に於て全く違ひ、人口增加の速かなる遙かに其の上にあり、餘りに速かなるを憂とする者ある程なり。此を外にし、我が國人と佛人と相ひ異なるが如くして同じきもの、相ひ同じきが如くして異なるもの、仔細に檢すれば他に種々あらんも、茲に其の首たるものを列擧せり。

京都人と巴里人

京都人と巴里人と或る程度まで頗る相ひ似たる所あり。第一、女性を以て特長とする所相ひ似たり。諺に京女に江戸男といへる、猶はモデルバリシアンの女流を意味しロンドン・ファスションの男流を意味するが如し。京女は維新遷都よりして漸く衰へ、今復た昔日の觀を爲すべからずと雖も、多數を平均すれば、尚ほ姿態の優雅にして裝飾に巧みなるものあり。巴里女は必ずしも顔容に秀でず、必ずしも服裝に優らず、實質に於て倫敦に劣るの嫌あるも、其の姿勢は

到底他の企て及ぶ所にあらず。一日女子を南京より放逐すれば、茲に南京ある莫けん、總べての事皆な女子の爲めに作られたるかに考へらる。

第二、美術に長ずる所相ひ似たり。事々物々東京に壓せられ大阪に壓せらるゝに拘らず、獨り美術に於て自ら擅にして敢て譲りに屈せざるの形あり。山川の美と古代の遺物とは姑らく云はず、織物、染物、刺繍、糸組物等皆な巳に擅を專にするに非ずや、繪畫の如き毎に流行に後るゝも、亦た以て雄を一方に稱するに足る。巴里の觸るゝ所美に、接する所雅に、見るとして巧みを弄せざる無く、彫刻と繪畫とに至りて誠に神に入ると云ふに比すべくも非ざらんと雖も稍〻歸向を同じくするは疑ふを要せじ。

第三、接待に巧みなる所相ひ似たり。京都に遊ぶ者の各〻趣味を異にしながら孰れも皆な氣樂に覺ゆるは、一には斯の接待の爲めにして、如何に巧みなるかは遽に言ひ難たけれど、兎に角人をして愉快に時日を過ごさしむる丈けの事は之れ有り、而して之が爲め年々旅客の財嚢を汲收すること尠少ならず。巴里の華美を盡くし、壯觀を極はめ、來り遊ぶ者をして魂飛びて歸るを忘れしめ、而して坐ながら巨萬の富を作るに比し、其の大は則ち及ばずと雖も、其の意は則ち近し。

第四、勤儉なる所相ひ似たり。京都人は勤よりも寧ろ儉なりと雖も、亦た全く勤ならざるに非ず、己れの職とすべきを職とし、己れの務むべきを務めて怠らず、唯だ其の儉の甚しきが如く甚しからざるのみ。其の儉に至りては殆んど客と擇ぶこと無く、容儀を整ふるに消費するも、その他に於ては謂ゆる爪の先きに火を點ずる者にして、必要品だも尚は節することあり、然れども其の儉なるは即ち其の幾多變革を經て能く無難なる所以にして、中には能く散ずるの道を知るもの無きにもあらず。巴里人は克く勤克く儉、遊び戯むるに似て、實は精勤して効果を擧げ、流連して奢を極むるが如くして、實は儉約を事とし濫りに消費するを肯んぜず、革命に戰爭に困難を經る毎に益〻榮へんとするもの、要するに斯の戒心の致たす所たらん。

然りと雖も其の相ひ似たるは此處までにして、是より以上頗る相ひ違ふ所あり、其の相ひ違ふ者を擧げんに、第一、京都人は巴里人の如く勇ならず。巴里人は利害得失に敏なるも、時として一身渾べて是れ膽、唯だ進むを知りて退くを知らず、精しく言へば勇と云はんよりも客氣と云ふの當れる如くなれど、朝に淵々として樂み夕に激昂する所ある、則ち獅子奮迅の勢を以て突出し、何物も能く禦ぐ無し、其の速に勝を制せざるや、乃ち屈撓して退くの恐あるも、一たび氣運に乘ずるに方りては眞に勇の最も勇なるものとして顯はれ、而して是れ總べての方面に於て事實にせらる、爲めに中途にして失敗せし事擧げて計へ難しと雖も、其の能く世界を睥睨し得るも亦た是を以てにあらずや。

第二、京都人は巴里人の如く國事に熱心ならず。巴里人は國を念ひ、國を憂へ、國の爲めに計ること厚し、固より巴里即佛國の觀をなし、國の爲めに計るの即ち都の爲めに計る者なるこ

と稀ならずと雖も、其の屢〻國の爲めに殉せしき者の能くする所にあらず。

京都人の巴里人と相ひ似るもの、相ひ違ふもに非ずんば、佛國は今日まで一等國の體面を維持し能はざりしならん。第三、京都人は巴里人の概括して此の如し。人口の多少、規模の大小、の如く新奇を競はず。巴里人は頻りに流行を逐同日に語るべからざるは勿論なりと雖も、甲をひて走り、流行に久しき者なきだけ、英雄豪傑以て乙を推し、乙を以て甲を推すべき者なきにより藝娼妓に至るまで久しきに續き得る少し、しもあらず、而して其の相ひ違ふものは、即ち萬般の事總じて此の有樣にして、浮薄輕躁笑ふ京都人の顧みて大に戒むべき所とす、若し夫れべきの事多しと雖も、幾許か他に先んじ他をし自ら小にするに至りては自ら禍する所以のもの て後に瞠若たらしむるもの、決して能力に乏しと知らざるべからず。

日本の社會と獨國の社會

ザクゼン・ヴァイマル、メクレンブルグ・ストレリッツ、オールデンブルグ、其の外公國五、卿獨逸は人をして封建時代を想起せしむ、國内に聯立するもの、王國として普魯西、バイエルン、ザクゼン、ウルテンベルヒ、大公國としてバーデン、ヘッセン、メクレンブルグ・シュヴェリン、國七、自由市三、帝國領一、總じて二十六邦にして、各〻皆な複雜の歴史を有す。今は普國弱權を握りて全國を統轄しつゝありと雖も、往時之と競爭せるは少からず、即ちザクゼンは嘗て雌雄を爭ひ、バイエルン亦た此の二國と好からず、特に普と惡しく、爾餘の諸邦、普と好きも好がらざるも、偏に自國を利せんとし、縱となり横となり唯だ勢力の伸張に之れ努めぬ。七十年の役に、普國全勝して大勢玆に定まり、普王乃ち獨逸皇帝の位に即く、爾かりしより後ち帝國の統一を計るに專らにして、總べての繁華を伯林に集中するの意あり、市區の設計頗る大なる、將た來住者に便利を與ふるの少からざる、依りて以て大に膨脹せしむるの傾向あるも、未だ豫想の少半をだに果たす能はず、宜しく帝國的と稱すべくして然るを得ず、舊のまゝ王國的と稱するが多し、帝國議會を普に置けば、帝國法院をザクゼンに置くの有樣にして、是れ皇帝の遺憾とする所とす。

普王は獨逸皇帝にして、獨逸皇帝は帝國唯一の主治者たるが故に、帝國の人民たるもの須らく無上の敬意を表すべき筈、然るに之を君主と仰ぐは依然として普國の民にして、他は此の若く厚からず。普の全土、何處として皇帝の寫眞を掲げざる莫く、寫眞店は少きも數十種、多きは數百種を備へ、以て來客の來り購ふを待つ、而もバイエルン若くはザクゼンに至りては、之れ有ること極めて少く、概ね自國王の肖像を掲げ、普國王は我が與かり關せざる所といふかに示し、萬事に於て明かに割據の形を成す。但だ普國の勢力既に雄強、地と人と以て覇を稱するが故に、他に能く起ちて之を抑えんとする無し、

加ふるに昔には明君相ひ繼ぎて統を承くるに反し、他の王國には暗君屢〻登臨して既墜の權勢を回收するに由なく、人をして割據の勢の次第に消失するを想はしむるとはいへ、仔細に稽ふれば猶は未だ然らざる者あり。獨逸聯邦議院の議員五十八人、而して普國は其の十七人を出だし、帝國議會の議員三百九十七人、而して普國は其の二百三十六人を出だす。數字の上より檢する、普の勝を制する瞭然たりと雖も、他の漫りに侮るべからざるも亦た明らけし、君主の間にありて野心を挾み相ひ爭ふの容易ならざるにせよ、議會の開くる毎に各〻自邦の爲めに計りて紛紜の絶ゆること無し。兄弟牆に鬩ぎて外其の侮を禦ぐといふ諺語に漏れず、獨逸民族統一觀念の漸く高まり、年一年結合を促がすべきも、

益に統一の功を收めんと到底得て能くすべからず。譬へば猶は我が舊幕時代の如し、德川氏八百萬石を控擁して天下を抑制したる、誰れとて抵抗を敢てせざるも、百萬石の前田氏、七十萬石の島津氏、其の他高祿なる多くの大名、各〻勢力を維持するに眴め、盡一の極めて困難なるものありし。現皇帝維廉二世は正さしく三代將軍家光と謂ふべき所、其の人と爲りまで相ひ似たるも面白し。

獨逸は曾に勢に於て封建の狀を存せるのみならず、社會の情態に於て亦た然り、即ち人は總じて軍人を貴び、百事軍隊を骨子とせざるなし、武士といふ階級なきも、男子は皆な軍籍に入るべき者と信じ、一たび軍籍に入りて軍隊的に養はるゝ、乃ち軍紀に慣れし結果として政府の命令より社交の禮式に至るまで一々明文に揭げて其の煩を覺えず、馬車の昇降さへも說明を俟つに及ぶ。政府に於て命令を執行するの嚴なるに止まらず、總べての點檢亦た極めて嚴、巡査は軍人と等しき威嚴を裝ひ、各人の戶籍、旅客の宿泊、皆な嚴密に調査し、何人も能く點檢を脫がるゝなく、何處に如何なる者ありて如何なる事を爲すかは悉く其の判知する所と爲る。私人相ひ對する際の儀式も亦た同じく嚴にして、主客座に就くの方式自から備はる。人の往いて他を訪ふ者ある、先づ接待人出でゝ案內し、客間に導きて座を薦む、其の方長椅子安樂椅子を上席とし、遞次序を逐ひて輕便の椅子に及ぶ、上座たるべき人の先んじて到る、乃ち長椅子に導きて座せしむるも、一層上座たるべき人の更らに後くれて到るある、直ちに前さに長椅子に導きたる人を退かしめ、後くれ到りし人を導きて座せしむ。若くは兩々路に逢て帽を脫する、亦た階級に應じて甲乙あり、己れより上位の人に對しては、帽を脫して之を膝下に下ぐるも、出入商人の恭しく帽を脫し禮を施すに對する、僅に帽の緣に手を觸るゝのみ。日常の事外國人の多く視て以て煩に堪へずとする所なれど、彼等は久しき習慣の事とて何等不快を感せず、却て美風として誇らんとするなり。我が舊幕時代、三卿に對して他の譜代の臣皆な雨中といへども下駄を脫して坐せざるを得ざりし如き、將た下士の上士に於ける、町人の下士に於ける、戰々兢々として禮の及ばざるを恐れ、其の之を失ふや時として切棄御免といふに遭逢するとあり。

獨逸は固より斯の若きの甚しからずと雖も、亦た以て幾許か類似の點を見るべからずや。

獨逸帝國は各邦皆な學事に勵み、相ひ競ひて之を隆盛にするに勤む、伯林はさすがに首府たる丈けに其の大學は帝國第一の地位を占め、職員四百七十四人、學生一萬一千に餘まる、眞に盛んなりと謂ふべし。然れども他に此と拮抗せざる迄も雁行すべきもの決して少しとせず、バイエルンのミュンヘン大學は職員二百十二人、學生四千七百を有し、ザクゼンのライプチヒ大學は、職員二百九人、學生四千一百を有し、其の外孰れも相應の大學を備へざる莫く、全國を通じて二十有餘の大學あり、設備を善くし教授を選びて、學生を迎ふ、而して學校は互に競爭して已まざるも、業を修むる者は孰れに行くも皆な自由、一の大學より他の大學に移り、更に又た他の大學に替ふるを得、一意良教授の所在を趁ひて轉徙す。伯林には固より良教授の在るあり、ワグチル、ジュモーラー、バウルゼン等、皆な博學宏識、名聲世に籍甚せる者、而もライプチヒのヴントの如き、優に此等と對峙するに堪へ、他の更に小なる大學中亦た一二專門の學科に傑出せる教授なきにあらず、學校に關しては邦の差別殆んど全く存するなく、學生をして自由自在に遍歷して修業するを得せしむ。我が舊幕時代、國境の警戒頗る嚴にして各處に關門を設け、他藩人の來り滯留するあれば、偵察の爲めに非ざるやを疑ふの常なりしに、獨り修學の目的を以てして往來甚だ自由なりき。聖堂は猶ほ今日の伯林大學の如く、謂ゆる三助時代に在りては洵に全國に冠たりと謂ふべかりしも、而も各藩亦た互に學事を善くするに勗め、若くは碩學鴻儒の或る地方に帷を垂れて教授するあり、遠近の諸藩より來り贄を執る者をして接踵群集せしめたり、江戸に徂徠白石の在るに方りて京都に伊藤父子ありし如き、或は京都の山陽、大阪の積徳、津の揔堂、水戸の東湖等、一方に僻在して、天下講學の士を收收したるが如き、即ち然り。詩を以て鳴る者も、茶山の如き、淡窓の如き、坐して多くの門下生を得しが、禪僧に至りては特に甚だし、もと雲水に定住なく、彼の山此の丘悉く身を寄すべきの地なりしかば、修業の爲めに全國を周遊し、到る處名僧を訪ひ、問答して之を窮詰論破し、或は他と問答して勝ちたるを己れ更らに窮詰論破せんして程に上れり。此の如く學問に關して何等關門なく、遠く遊びて師を擇ぶこと全く自由なりし、是れ亦た獨逸と類似する所あらずや。

獨逸の進歩は近年に及びて最も甚だし、塊を破り佛を摧ぎて帝國を一統してより國運日を逐ひて隆昌に赴き、進歩の著るしき多く他に比を見ざる所。伯林にては二十餘年の間に人口殆んど一倍以上に達し、ライプチヒにては三割を增し、ミュンヘンにては一割五分を增せり。機械は眞に長足の進歩を成せりと謂ふべく、序を追ひ順を蹈まずして一躍直ちに幾段の進境に入り、ラムプよりして電燈に飛び、乘合馬車よりして電車に飛びたる類擧げて計へ難たし。而して彼の長足の進歩を成せる所、我れ亦た少しく似る所なからず、維新以後の變化は稱して非常の進

歩と爲すも誰れか然らずとせん、其の分量に於ては彼に若かずと雖も、其の速度に於ては優るとも劣らざるべし。即ち多くの點に於て彼此相ひ似るの觀あるも、而も盡く相ひ似るに非ざるは勿論なり、中には名の相ひ似て實の大に異なるものあり。

我國封建の制行はれ、割據の勢久しかりしを以て、維新以後集權の實を擧げんとして有らゆる手段を用ゐ、獨逸に於て聯邦を壓屈して統一に傾かしむる手段は又た我に有効なりとして適用せられたり。然るに我が地方の割據は彼が地方の割據の如く甚だしきに非ず、彼は二十六邦より成り、而も其の一は帝國領にして、我が二百八十藩の多きに比すべくもあらず、二百八十藩の多き、個々領有の面積極めて小、以て一國の實力を積むに足らず、其の最も大なる前田の百萬石といへども、彼れの一邦に較ぶれば眇として小なるもの、一萬石の小封を食む者に至りては、藩の名を附するさへ實に過ぐるに似たり、是れ故に廢藩置縣の令一たび出づるや、則ち皆な立ろに崩れ、能く藩として抵抗に堪ふるなく、又た多くの藩を一致せしめて抵抗せしむるを能はず、獨り薩藩の最も僻遠の地に在りて抵抗を試みたるを除き、他は皆な朽を摧き枯を拉くが如きのみ、之を普國に對するバイエルン、ザクゼン等と較ぶるに甚だしく異なりとす。普國の強大は遙かに他の上に超出するも、聯邦各自の獨立を打壞するまでの力なし、墺を破り佛を摧ける勢を以て僅かに皇帝の名を贏ち得たるに止まり、久しく存立し來りたる國に對して如何とも

すること能はず、王國は依然王國として存し、大公國は依然大公國として存し、孰れも皆な相當の待遇を爲さゝるを得ず。我國にては今や殆んど封建の跡を認めずと謂ひて可、舊藩主の何處に在るやを尋ぬるに、大抵東京に居て平民と混じ、中には舊藩臣と多少の情誼ある者もあれど、率ねて以て起たんこと夢想だに難し、之を如何ぞ獨逸の王侯と同一視するを得んや。

獨逸に在りては頻りに祖國を云々す、曰く祖國の爲めに盡くす、曰く祖國の名譽を維持すと、其の言ふ所を聽けば頗る愛國心あるが如く、我が謂ゆる大和魂を有するに似たれど、實は則ち謬れり。獨逸の祖國は抑〻何處に在りとする、往昔祖先の國を成し據りて以て列國と鹿を逐ひたる所とせば、祖國の名を冠せしむべきは當に墺國を指すべきに非ずや、然るも墺國は全く國を別にし、獨逸帝國の版圖に入らず。墺國を除ける獨逸帝國の歷史は極めて新たなるもの、各邦個々には久しき歷史を有するも、一統せる帝國としては歲を歷る猶ほ僅少、況んや其の各邦は嘗て互に相ひ爭ひたる所なるをや、若し眞に祖國を求めんとする、唯だ益〻軋轢を強くするに止まらん、今は普の覇權の下に能く結合するも、若し墺國にして或る豪邁なる君主を戴て權勢を張り窃に其の南方を誘ひて與に俱にするある、俄然二分し若くは三分するを見んも測るべからず。奈破崙三世の普と兵を搆ふる、實にバイエルンの來り投ずべきを確信せり、時機少しく後くれしが爲めに之を事實に見ることを得ざりしのみ。既往を顧みて將來を察する、今後と

て必ずしも安んずべきに非ず、何ぞ我が二千有餘年の歴史あると同日に語るべけんや。

獨逸人民の他より凌虐窘迫せられたる嘗に一再ならず、各邦の聯立して一致の計を爲さゞりしも亦た或は之に因る、即ち個々分立して人心乖僻し、強者に向ひて成るべく害を受くるの少くして利を得るの多からんやうに勉め、君の心は將相に染み、將相の心は衆民に染み、滔々相ひ率ゐて野鄙陋劣に流れ、殆んど全く品格を缺けり、若し更に時代を經過する、自然に其の高まり來るを見んも、今日に在りては猶は甚だ卑きを免かれず。我が國人の品性は必ずしも高しと謂ひ難たく、卑き者も少からざれど、總じて性質の愉快なる所、彼に比して稍〻優れりとすべし。外國人の獨逸を旅行する、概して苦情を唱へざるなく、他國の言語に通ずるの點に於て世界的と稱すべきも、心は則ち非世界的の甚だしき者なりと言ふが多し、而も我が國内を旅行する外人は、聞〻不平を訴ふるにせよ、寧ろ愉快を感ずるの常なるに非ずや。かく比較し來る、我れと彼れと相ひ似たる點あると共に、亦た相ひ異なるを見るべし。

日本の社會と伊國の社會

天色拭ふが如く、霧もなく霞もなく、謂ゆる日本晴れなるもの、伊太利に於て之を觀る。冬の數月アルプス山以北の地、皆な雪を以て蔽はれ、一望皚白、樹に葉なく梢に氷を點し、市邑乃ち列肆繁錯、輪蹄絡繹たるも、暫く廓外に出づる、則ち滿目蕭條、寒風膚を刺す。然るも一たび山を踰え南に轉ずる、風景復た山北のものならず、皚白なるは青綠と化し、蕭條なるは駘蕩と變じ、漸く南するに隨ひて變化愈〻著るしく、竟には全く陽春和煦の光景を現じ、嚴寒の安くにあるを知らず、其の地に遊ぶ者をして實に樂みて還ることを忘れしむ。我が北國地方は白雪早く降り、谷を塡め陵を沒するも、碓氷を踰え若くは關ケ原に出づる、眸裡の景全く變じ、天空澄徹、隈なく晴れて寸雲だになきこと稀れならず。伊國は猶は我が北國なくして南方に延長したるが如し、冬季は我より寒からず、而して暑熱一層甚だしく、草木は寧ろ熱帶系に屬する多し、我國にて鉢植と爲す龍舌蘭の如き、到る處に野生し且つ頗る長大なり、大暑の酷烈なる殆んど堪へ得べき限りを超え、到底我れと較ぶべきに非ず。其の一國として統一したる、屢〻我が維新を以て比せられ、ガリバルヂー、マジニー、カヴールは、西郷、木戸、大久保と對峙せり。數多の小州相ひ集まりて一國を成し、優に列強の班に加はるの勢力を養ふに至れる、亦た以て相ひ似たりとすべく、急遽に進歩を計りて多くの事業を興し、同時に陸海軍を擴張し、而して遂に財政の困難を來たせる、亦た多少相ひ似る所ありとすべく、幾千年に亘る久しき歴史を有し、國内に盛衰興亡の遺蹟を有する多く、而して現今の社會の幾んど新たに生まれ出でたりと謂ふも不可なきの觀ある、亦た多少相ひ似る所ありとすべし。

但し我國の歴史は千歳一貫して嘗て中絶せるあらず、君主は萬世一系にして、蘇我氏、藤原氏、平氏、源氏、北條氏、及び足利氏、交る〳〵政權を執りしが、後ちなるは先なるに比して進歩の跡頗る著るしく、尋で豊臣氏より徳川氏を歴て更に愈〳〵益〳〵進み、以て今日の盛なるに及べり。今とて猶ほ幼稚の域を脱せりといふべからざるも、之を前代と較ぶる、其の絶えず進歩し來たれること斷じて爭ふべからず、實に久しき年月の間蓄積せる勢力の偶〳〵發して今日觀る所の現象と爲りたるものといふべし。伊國の歴史は我れと趣を異にし、始め隆盛にして後ち衰微し、往昔最も著大なる事蹟に富み、其の絶大なるに至りては、世界に雄たりしと稱すべし。羅馬共和國より一轉して羅馬帝國と爲りたるが、實に是れ西の世界を統一せしもの、兒童の皆な記憶して忘れざるシーザー、ポムペイの如き、皆な此際に於て躍出せり。斯く盛大を極めしより して其の後時を觀る、時代の後くるゝに隨ひて衰微の徴益〳〵彰はれ、竟に國として獨立を維持するに由なく、四分五裂して他に蠶食され、幾回か滅亡に瀕して然る後ち再び勃興し、爰に近時の盛運を見るに及べりとはいへ、之を共和若くは帝政の當時に較ぶる、相ひ距ること甚だ遠く、全く別物の觀あり。而して昔時の建造物の荒壞して遺りたる多く、煉瓦の堆積せるもの都市の中央に保存され、故街の跡故宮の跡を尋ねて徘徊する、則ち二千年前の盛事彷彿として眼前に浮び來る。第八世紀の預言に曰ふ、コロッセウムの存する時は羅馬存し、コロッセウムの

倒るゝ時は羅馬倒れ、羅馬の倒るゝ時は、世界倒ると。コロッセウムは大劇場の名ヂーローの巨像即ちコロッサスを安置せしよりして爾か呼ばる。紀元後八十年の創建なるが、最初人獣格鬪の戯を演ずる一百日、野獣の命を殞せる實に五千頭と稱す、後ち雷火の燒く所と爲り、焔炎天を照らすこと三晝夜、爾後數〳〵修復を加へ、羅馬建國一千年祭は盛んに此處に催されたり。現に見る所を以て推すに、觀客の座を備ふる大約四五萬、三分二は既に壞廢し、僅かに三分一の遺れるが、其の遺れる丈けにても、確かに五百萬圓を値したるべしといふ。かゝる昔時の遺物は他に多く之れ有り、其の多きよりして考ふれば、今日の伊國は大なる枯木より新たなる嫩芽の萠え出でしに類すとすべし。

伊國は啻に政治に於て大なる勢力を振ひしのみならず、宗教に於ても亦た大なる勢力を振ひたり。サンタ・ピエトロは、今猶ほ世界第一の寺院として存し、廣さ四千五百坪、最も高きところ七十餘間、總躰の構造皆な之に稱ひ、莊嚴宏麗、看る者の眼を驚かす、建築の費額一億圓を下らずと算せらる。之に接してヴァチカノの宮殿あり、結構の大、輪奐の美、世界第一の宮殿を以て稱せらる、廣さ五千坪、許多の廻廊旋階を具へ、大小の室一千に上る、盛なりと謂ふべし、然れども既に此の大建築物に接して後ち漸く一般の家屋に及ぶに、概ね陋狹にして甚しく劣れるを感せざる能はず。且つ又た啻に宗教に於て大なる勢力を振ひしのみならず、美術に於ても此と同じく、ヴァチカノの著名なる天井繪

及び壁畫、即ちミケランゼロとラファエロ・サンチョの巨腕を揮ひし遺物は、畫を解すると解せざるとを問はず均しく觀て驚嘆して措かざる所ミラノ、フヰレンツ等亦たそれ〴〵名品の在るあり、美術國の稱は決して濫ならず、然りと雖も今日尚ほ依然美術を奬勵し、且つ國人の苦心研究せるに拘はらず、到底前代と比較すべきはあらず。我國も古代の遺物にして見るに足るものあり、建築には法隆寺、平等院、高野山の如き、彫刻には雲慶の如き、繪畫には金岡、雪舟の如き、趣味能く後人の及ばざる所とせらるゝも、究竟一種古物として悦ばるゝに止まる、美術の點より稱すべきは勿論なれど、其の規模といひ巧妙といふの果して後世能く及ばざる者なるやは疑問に屬す、前代よりも後代の優り、後代よりも後々代の優るべきもの、愈〻多く、近時新たに起工落成せるは未だ進歩の高度に上らずとはいへ、爾後益〻進歩の勢あるは瞭然として明かなり、彼が絶妙の稱あるもの悉く之を昔時の起工と昔人の手腕とに歸せざる可らざると異なり。

伊國は昔時に於て偉大を極めたりしもの、今日は壞廢せる遺物を收拾し補綴せるに過ぎず、恰も石造瓦造の殘片を保存するが如く、昔時より殘存せる幾多の都市を收拾して一國を成せるものとす、草昧の世よりして漸々に進歩し、相互に多樣の關係を生じて一國を成せると違ふ、故に一國として存立するとも、何處に中心を求むべきやと問はゞ、返答頗る難たし。試みに人口を以てする、ナポリは五十六萬、ミラノは四

十九萬、羅馬は四十六萬、トリノは三十四萬、バレルモは三十一萬、ゲノバは二十三萬、フヰレンツは二十一萬、以下多くの都市概して伯仲の間に在り、尤も勝ぐれて衆多なるをば見ず。羅馬の府たる、國王茲に都を奠め、中央政府亦た置かるゝも、特に首府として群に秀づるあるにあらず、交通の便大なるにも非ざれば、商工業の便多きにも非ず、往古宏麗なりし壞址の散在せるを介みて舊るき汚れたる建物あり、之に隣りして又た新たなる建物あり、總ずるに新舊の建物を補綴して市街を爲せるもの。凡そ新興國として規模宏大なる首府を造る、必ず市區の改正に便にして全市の家屋を新造し能ふ處ならざるべからず、然るに昔時の遺跡を幷せ存せざるを得ざる彼が如きは、幾分か古代羅馬の政治を追想して神聖らしく感ずるにも因らんが、主なる原因は法皇に對する競爭の念に存すとす。法皇の勢力は之を往時に比して衰へたりとはいへ、舊敎の播宣せる諸國に於ては其勢力尚ほ頗る大、而して躬はヴァチカノ宮殿に居て治外法權を享く、是れ故に新興國の朝廷として新たに威信を繋がんとする、必ず之に對して遜る所なきを要す、此に於てか總べての不便を忍びて政權の出づる所と爲し、國王は法皇より劣らず國王の勢力は法皇の其れより弱からざるを明ならしめんとして能ふ限りの力を揮ひ、動もすれば他に及ばざるを恐るゝの有樣にして、意を用ゐること洵に到れりといふべし。然るに斯くして都を羅馬に決定し、盛名の俤はりしに加ふるに力の限り權勢の實を表はさんとせしに因りて聊

か首府らしき形を具へたるにせよ、更に此を大にして王國第一の市府たらしめんことは到底得て望むべからず、有名なるテベル河も最早運輸に益せず、之を如何ぞ我が東京の人口百七十萬、尚ほ更に益〻增加し來ると比すべけんや、下りて大阪に比するさへ難たし、少しく京都に勝るを以て幸とすべきのみ。

且つ昔時壞廢の遺物を收拾したるは獨り此に止まらず、其の人物に於ても亦た然り、古來歷史に現はれたるは總じて群を拔き倫を絕つの人、或は英雄豪傑として著はれ、或は聖人君子として知らる、其人を計ふれば枚擧に遑あらずと雖も、爾來多くの變動を累ね、賢良の兒孫早く盡きて凡庸なる者獨り存せしか、將た昔時より凡庸の多くして時に偶〻賢良の出でしが爲めに彰著なるを致しゝか、或は別に事情の存するあるか、事の眞相は須らく措き、近時の人物は概して稱すべきを見ず。ガリバルヂーは古英雄の再生として稱せられ、近世稀れに見るの人物として崇めらる、而も彼を以て我が老西鄕に比する、時として品性の稍〻下るを見るなからず、功成り名遂げて孤島に退居せる、其の義勇廉潔、赫として異彩を放つに餘りありしも、後ち數〻海を渡りて本土に上陸し、遊俠の徒に推戴せられて輕擧浮動したる、明かに妄念に悶だへしを證すべし、況んや之より數等若くは數十等を下だるものに於てをや、品性の點より觀て言ふに足らざる者、沼として皆な是れ、特に俊傑とすべきある無し。獵官を目的として奔走する者亦た甚だ多く、如何なる官職をも逸せざらんとして

日夕之を求むるに汲々たり。下等の辨護士亦た極めて多く、如何なる事件も必ず擔任して起訴し、以て若干の報酬を得るに圖む、中には多少頭地を拔んづる者あれど、總じて皆な彼が如しとすべく、而して乞食の夥だしき他に類を見ず、普通の勞働者さへ猶は幾くか乞食根性を有し、一定の賃錢以外に强請するを常とす。昔時人々皆な入浴を好み、殘存せる浴場の中には宏大驚くに堪へたるありて、如何に當時の人が入浴を好みしやを察すべし。然るに今世の人々は復た之を好まず、浴場の設けは處々之れ有りて、此に浴する者なきに非ざれど、多數を概して然らず、清潔を好むの風全く消えて垢身不淨を厭はざるに至れる、眞に歲と共に變化したる一例として視るに足る。加ふるに自國に居るを厭ひて他に移住する者甚だ多く、其の員數年々三十萬を上下せしが、一昨年に及び五十三萬に上り、今年は更に一層の多きを見るべしと信ぜらる。要するに廢屋を修復し、壞れたるを繕ひ、傾きたるを直くして僅に雨露を凌がんとするもの、是れ實に伊國の現狀たり。

伊國は氣候佳良、產物饒多、何等缺る所あらずと見えんも、而も多くの山岳は禿頭赭身、少しの樹木をも視ざるを如何に考ふべき、是れ蓋し山崩れと濫伐の結果にして新たに造林せんは寧ろ斷念せざるを得じ。我國は何故に森林に好望にして、更に益〻善くすべしとするか、濫伐の弊は我も亦た之れ有りたれど、伐餘の樹木の殘存せる多く、未だ嘗て斧斤を入れざるの森林すら少からず、故に有る所の樹木を賣り其の幾

分を割いて新たに植樹造林するの費に供ふるは實に富を養ふ所以の方たり。伊は西班牙の甚だしきに至らざるも、爰に造林の方を講せんとする、寔に數十年後の利殖を目的として巨額の金を投ずるに異ならず、投ずる所の利を見るを期すべきは即ち數十年の後にして、其れ迄は毫釐の所得をも期するを得ず、畢竟巨額の資本を無利息に放下すると同じかるべく、金錢の運轉忙はしき今日に在りて斯の若く無利息に放下する數十年なるは元と困難の事、特に財政困難の頂巔に達せる伊國に於ては幾ど不能事に屬す。而して斯の若きの輒く望むべからざる、其の影響する所決して少からざらんも、是れ實に奈何ともするを得ざる所、百千年の間力の限りを極めて地力を耗盡し了れる餘、廢壞せる昔時の遺物を補綴して漸く國たるの形を維持するに止まるは即ち其の自然の命數なるべし。今日見る所の如く邦國として多少列強の際に周旋し得るものと爲りたる、以て責めてもの事として視すべく、其の亡びんとして而も亡びず、未だ絶望に瀕せざる、さすが羅馬帝國の名殘りといふべきか。

日本の社會と澳匈の社會

歐洲に國するもの、中、我が日本人に親近せる種族の住居するは、芬蘭及び匈牙利なりとす。是れ以外に散在する無きにあらざれども、人口よりいへば數百若くは數十にて特に言ふに足らず。芬蘭は二百三十萬に上り、甚だ少しとすべからず、而も亦た多しとするを得ず、剩へ全く露西亞の管轄に屬し、たとへ稍〻獨立自主を許さるゝとも、能く一國の体面を備へんは則ち難たし。獨り匈牙利は人口二千萬に近く、匈族即ちマギャルは九百萬に過ぎざるも、頗る同化力に富み、他の雜住の種族を其の權内に歸從せしめ、相ひ共に駸々として進むの勢あり。都市に在りて產業を治むるは多く獨逸種にして、其の容貌、其の風俗、皆な固有性を存し、匈風の何處に在るを知るべからず。而も他の種族とて必ずマギャル語を用ゐざるべからず、同族相ひ談話するは各自の語を以てするも、更に別にマギャル語に精通するの必用あり、名刺及び看板、大抵姓の次ぎに名を記るし、T. Saigo と署せずして Saigo T. と署し、其の他言語の組織歐洲の常例とする所と異にして、殆んど我國に於けると同じ。而して近來官廳に於いて益〻マギャル語を奬勵し、談話文書、一に之に依り、公文書も勉めて之を用ゐしめ、學校に子弟を敎授する、亦た主として斯の語を以てす、外人の來たりて報告書を求め、文字の解し難きに苦むこと稀れならざるが、土地の人は却て之れが爲めに得意の色あり。新興國の故にや、我が日本に就て聞く所あるを樂み、曩に支那と戰ひて勝ち、今又た露西亞と爭はんとするを聞て大に羨むの形あり。他の種族に屬する者は、强がち匈族の仲間入りするを好むに非ざれど、周圍の勢に推されて自然に同一の態度に出づるに似たり。

匈族は阿爾泰を通じて我と肖る所ありといふ

と雖も、固より種々の種類ありて混じ、頗る白哲人に肖るもあり、昔時蒙古人種なりし者の風土に化せられて斯くなりたるか、將た白哲人と雑居するの久しくして斯くなりたるか、原因の明白ならざるが爲めに、或は東邦諸國と祖先を一にするやに感ずるあり、或は爾か感せざるありて、匈族皆な其の感を同じくすと謂ふべからざれど、日本の勃然として興起し、以て雄を列強と競ふの勢を示せる、彼等も亦た自ら意を強くする所あり、且つ自國の近時大に進歩せしより、更に大に世界の上に顯はれんとし、孜々汲々勉めて懈らず。ブダペストは繁華なる都府、ドノウ河を挟みて立ち、空に横はるの鐵橋、中流に浮かぶの公園、共に壯觀を極む。西岸なるブダは今尚は昔時の狀態を存し、穴藏の如き陋屋の散點するあれど、其の王宮の高く斷崖に聳えて巍々乎たる、洵に罕れに睹るの美觀たり。ペストに至りては全市概ね新成、街として家として新たならざるなく、加ふるに結構壯麗、能く旅人の眼を惹くこと、我が東京の遠く及ばざる所、但だ外觀の美を計るに急なる、將來同一の速力を以て進歩し得べきかは疑問たらん。此の首府や、人口五十萬、多しと謂ふべからざるは勿論なるも、實に總べての壯大華麗を集めたるもの、之を除きて人口十萬を出づる者なく、八九萬より五六萬なるは以て大と爲すべく、多くは二三萬に過ぎず、名は一國といふと雖も、未だ遽に列強の班たるを望み得ざるべし。

且つ匈牙利は一國として自ら治むるとはいへ墺地利と離れて立つこと能はず、墺國の皇帝は即ち匈國の王にして、二即ち一、一即ち二なる密接の關係を有す。墺國は匈國に比して土地稍〻狹小なるも、人口は則ち多く、優に二千六百萬を出づ。匈は常に墺に輸せざらんを欲し、ブダペストの裝飾に務むるも元と唯だヴヰエンと拮抗せんが爲めなるが、さすがにヴヰエンは歐洲有數の大都會、他の妄りに競爭するを許さず、人口百七十萬、正に我が東京と相ひ若き、而して道路の廣濶、家屋の宏麗、誠に巴里に次ぎ、伯林の上に位す。我が東京の外濠と土堤とを崩壞して廣濶なる第一等道路を造り、之に沿ひて壯麗なる建築物を與し、議院なり、市廳なり、大學なり、博物館なり、甲去り乙來りて目に觸るゝもの即ちヴヰエンとして見るべく、都府としての設備修飾、一として備はらざるあらず。然るも此に次いで如何なる都會の存するかと觀るに、其の次位に當るべきブラーグは人口僅に二十萬、他の多くの都市は皆な更に小、大阪京都に匹敵すべき無く、此點に於て墺國も匈と均しく美觀を首府に集中せりと謂ひて妨げなし。

墺も匈も政黨亂雜を極め、幾多の小黨分立して、離合常なく、紛糾の狀、他に類を見ず、匈國の政黨は稍〻收拾し易きも、墺國に至りては一層の紛糾を極め、政黨に據りて政治を行ふこと難く、時として政黨內閣、時として超然內閣となりしが、千八百九十九年の末、到底政黨に據りて政務を擧ぐるに堪へずとし、皇帝の思召を以て政令の事一に事務官に委ぬるに決し、然りしより以來、行政の事較〻見るべきあるに似たれど、能く議會と圓滑ならんを保すべきかは眞に

疑はし、此の處少しく我が現內閣に似る。

墺國と匈國とは各〻獨立國を成し、而して匈にクロアチエン及びスラヴォニエンの獨立に傾くあり、墺にベーメン、ガリチエン等の獨立に傾くあり、更に兩者の半屬國たるボスニエン、ヘルツエゴヴィナの包括さるゝを以てし、かく個々格別の狀を爲すに加へて、マギヤル種はマギヤル種として立ち、獨逸種は獨逸種として立ち、スラヴ種はスラヴ種として立ち、各自其の勢力を張らんとして汲々たり、畢竟匈は唯だ匈あるを知るのみ、ベーメンは唯だベーメンあるを知るのみ、共に獨立自主を計るに專らなり。而も居常獨立を計るに專らなるもの〻何故に依然として墺國の一部たるに甘んずるかを察するに、一には勢の餘儀なくする所たるに因るも、又た一には分離して獨立するとも以て充分の力を伸ぶるに堪へず、露に併はされずんば則ち獨に併はさるゝの恐れあり、斯る國に併はさるゝよりも寧ろ今のまゝに存するを可とするに因るべきが、而も今日の狀態は其の決して滿足を表し得ざる所のものたり。然れども顧みて其の富の程度如何を觀んか、實に富裕多產、鑛山に、農業に、森林に、孰れも饒多ならざる莫く、中にも森林に至りては、彼の如く繁茂し彼の如く整頓せるは殆んど他に之れある無し。歐洲の列國、多くは他より材木の供給を仰ぎ、森林國として有名なる獨逸すら自國の材木のみを以て足らずとし之れが供給を他國に仰げるに、獨り墺匈國は其の土地に生ずる所を伐採して需用を充たすに足り、尙ほ餘りありて之を他國に輸出する多し。凡そ森林の有る處、他の富亦た之に伴ふと稱す、近時墺匈の兩邦、運河の經營に專らなるが、是れ多少獨逸より奬勵するにも因れど、主として自國の產物を國外に輸出せんとの計畫あるに基づく。從來は純乎たる陸國にして、海運には力を致さゞりしも、近時トリエストを開きて外國貿易を盛んにし、此に伴ひて海軍をも設備するの計畫を立つ。農工業は多くの山と多くの水とに開門を築き、以て灌漑に便すると共に水力電氣を熾んならしむるの方を講じ、天然の利益を被ること尠少ならず、かくして未製のまゝ若くは製造して四方に輸出する、國の富まざらんを欲するも得べからず。

我が日本は今日まで獨逸風といふを模倣せる多し、而も亦た往々にして模範を墺國に採りしことあり、初めて西式の農法を採りしは此の墺よりせり、森林法を獨に得たるは識者の以て誤れりとする所にして、宜しく墺に則りて改制すべしとの說漸く勝を占め來たれり、森林は確かに墺を以て優れりとすべく、而して我國に用ゐ易き亦た墺の森林法に在りとす。學藝の進歩頗る著るしく、我が醫學留學生の如き、笈を此國に解く者少しとせず、海外を巡遊せし高官の人々が一時師として仰ぎしスタインの此國の法政學者たりしは特に言ふを要せず。概するに墺匈國は天然に良善なる國土、大に物產に富み、富を列國と爭ふに足るべし、但だ數多の種族雜住し、各〻互に異なる歷史を有するが爲めに、全く一の國家として和合協同すること難く、毎に爭鬪に苦むを免かれず、現皇帝の明君たる故を

以て大なる紛爭を見るに至らずとはいへ、今後如何なる爭亂の起るべきやも測られず。而して現皇帝や、明君は則ち明君たりと雖も、其の一代の治世五十有餘年の間に、版圖は著しく減縮し、國勢は甚だしく衰萎し、皇后は兒手に殪れ、皇太子は自殺を遂げ、人生堪へ忍ぶべからざるの不幸に遭逢せしこと屢次、之を譬ふる猶ほ富裕なる資産を有して身に不足を感せざるも、內にありて家族の間に種々の事情坌生し、爲めに紛爭の絕ゆることなく、不愉快至極に日を過ごすの類たり。我國も谷に川に多くの關門を作りて灌漑及び水力電氣に利する、以て大に國富を

期するを得んも、而も現狀を以て彼に比する、則ち寧ろ甚だ貧なりと謂はざるべからず、然れども我にありては、一家親族皆な善く和諧し、時に偶〻爭ふことあるも、元と彼此相互の間の戲謔ともいふべく、特に不俱戴天の如き觀を爲し、嫉視黨を樹て派を別ちて反目紛爭するの類を敢てするなく、親睦怡樂して愉快に消光す、是れ我れの彼れと異なる所にして、又我れの或は彼れに優る所たりとす。我日本の四面海を環らせるに反し、彼れ塊匈の全土殆んど陸に圍まれ唯だ僅に一部分の海に面するのみなる、即ち彼我相異の明白なるもの、復た說くの要なし。

露西亞分割

見下歐洲の權衡の維持せらるゝ、獨佛二國が疆界に相ひ爭ひ、茲に全力を傾注するが故ならずんばあらず。宇內に在りて軍備の最も嚴密なるは、アルサス・ローレン及び此に接近するの地即ち是れ。顧みるに千八百七十年以來歐洲に於て最も重要の問題となりしは此の新疆界にして佛は必ず之を回復せざる可らずとし、獨は必ず之を保有せざる可らずとし、相ひ互に能ふ限り兵力を增し、能ふ限り國境の防備を嚴にし、人をして何時戰雲の捲き起りて、慘憺たる光景を現出せんも測り難きを想はしめ、或は之を中立國と爲して永く禍根を絕つに若かざるを言ふあり、而して多くは兩國の實情より料りて其の到底言ふべくして行ふべからざるを推斷し、總ずるに兩國人も他國人も皆な均しく此に就きて考慮を凝らしゝが、偶〻露土の戰爭起り、バルカン半島の名遍く世界に轟き、世人の耳目皆な此處に注集せられぬ。

事終りて後、土耳其は依然として惡政を施き領內の異人種を治め得ず、動もすれば再び爆發せんとするの狀ある、露國乃ち乘じて以て勢力を扶べんとし、時に隱然計畫する所あり、而も此と利害を異にする諸國は、其の以て己れに害あるを念ひ、成るべく之を防止せんとし、爲めに二國同盟成り、三國同盟亦た成り、各自互に兵力の增大に務めしが、日淸戰爭の起りてより、總べての視線は皆な更に絕東に集まり、爲めに獨佛提携して露に與みするに至る。皆な謂へらく、歐洲列國は今や既に勢力の權衡を得、復た少許の動搖をも許さず、國境の變更の如き固より望むべからざる所、宜しく東洋未開の弱邦に勢力を伸べ、以て利益を其處に攫取するに汲む

べし、蓋し大勢は既に一變す、之に伴ひて變ずるは勢の變に應ずるの巧みなる者と、苟も乘ずべき動亂の東洋に起るある、乃ち一齊に起ちて以て機會を攫取するを誤らざらんとす。夫の拳匪の暴起せる、皆な以て好機逸すべからずとなし、大に勢力を植ゆる所あらんとせしに、事漸く緒に就き次第に舊狀に復せんとする、唯だ夫の露西亞の勢力を滿洲に植えんと計り、而して我が日本の以て自國に害ありとして之を撤去せしめんとし、動もすれば爭端を啓くやの觀なきに非ずと雖も、由來露は最初強硬の態を示し、而も事の成り難きを察する則ち漸次讓歩するを常とす。今回の事必ずしも然るべきを保し難きにせよ、中外の人々は其の多分然るべきを想ひて晏如たり。之を外にして列國は孰れも今直ちに指を此處に染めんとせず、皆な正さに休止の態を呈ひつゝあり。

獨佛戰爭ありてより玆に三十有三年、その間勢の赴く所漸次廣きに亘り、今日にては殆んど世界的といふの當れるを觀れど、而も一たび顧みて其本に反へり察する、最も劇しき爭點は依然獨佛の疆界にありて存す。たゞ世論の漸く是より遠ざかりし爲め、當に外人の之を敵視するに止まらず、其の國人も亦た次第に之を忘るゝの觀あるのみ。巴里の中央なるストラスブルグの像は今日といへども喪服を著せられ、花を飾られ、上に記るして云ふ『是れ嘗て佛蘭西の有たり、今も尙は』と。其の失へる舊領地を懷ひて回復を欲するの念極めて切なるを見るに足るも、而も此事や最早や一の儀式たるに止まり、

佛人の之れに注視する甚だ少く、將た此事の爲めに更に戰爭の兩國間に起るべきを念はず。實に七十年の戰爭は過去の歷史に入り、今日現に業務に服するは大抵其の後に成長せし者なれば以て我が與り關せざる所の事として之を目し、是に由り新たに覺を他國と啓かんことは其の欲せざる所なるが如し。然れども此の如きは畢竟表のみを見て裏を察せざるの謬見に外ならず、實際は今尙は極力相ひ爭ふを止めず、極力互に相爭ひて而も表面全く平和なるが如く、兩國の人民其の然るを知らざるの狀ある、洵に奇とすべし。且つ表面に現れたる所の以て眞相を察するに難きや、軍人社會に在りてさへ特に意を用ゐる深切ならざる者は其の實に然るを知らざる多し。巴里の城郭は嘗て佛人の大に力を用ゐし所、而も平素一切放開して乞食の其上に起臥するに任かせ、一個の衛兵をも置かず、又何の守備をも策せず、詮ずるに一の土堤に過ぎず、早晩全く之を取り毀つことゝ爲るべし。故に國都の附近にては人々戰爭を忘へず、平和の輒く壞られざるを信ずるも、之に反し國境にては今にも戰端の啓くるが如く、守備益〻嚴、警戒愈〻密、毎に戰時の狀態に在り。

獨逸は最も力を西境の防備に盡し、聯合諸邦各々自ら守るの制なれど、西境の防備は帝國全躰として之に當り、守兵を精選し、城砦を堅固にし、常に戰時の準備を整へ須臾も警戒を懈らず、中に就き其の最も嚴なるはメッッとストラスブルグとにして特にメッッの守將は帝國第一の名將を以て之に任じたり。ヘーゼラー將軍とい

へば人多く其の何人たるを知らざるべく、國外の人の知らざるが如く、國内の人も亦た之を知らざる多し。然るも其の多く内外の人々に知られざる、即ち將軍の特に高く傑出せる所以なり。ワルデルゼーの若き、名聲廣く世界に知らるれど、其の知らるゝは偉大なる功績の爲めにわらず、唯だ中央に居て職を執りしが故のみ。獨逸今帝の直接配下は超絶せる有力者の安んじて留まり得べき者ならず、事々物々帝の干渉を容れ、一意命令のまゝに聽從するに非ずんば其の職を守り難たし、ヘーゼラー將軍は斯る干渉に堪へ得ざる者、常にメッツに閉居し、此の方面の防備に汲々たり。中央に喚び還へして重用せんとの勅命に接する一再ならざるも、毎に辭退して曰ふ、臣は邊將にて足る、他に望む所無しと。斯

くして召還を辭するは、實に西境を守るの最も重大の職分なるを知るが爲めにて、常に如何にして守備を嚴にすべきか、如何にして進擊を敢てすべきかを講じて已まず、嘗て卒然部下の士に謂て曰ふ、斯々の方角に斯々の地あり、之を迂回して斯々の處あり、吾れ或る物を其處に預け置けりと、言ひ訖りて即時行いて其物を取り來れと命じ、復た他を言はず、聽く者は初め意を用ゐざりしかば、何の地より何の地を經て赴くべきかを記せざりしかゝ、而も漠然上官の言を聞くは軍人としてあるまじき事たり、必ず其言に從て使命を了へざる可らず、此に於て非常の苦心を以て漸く其物を取得し、還りて復命したり、唯だ偶然の一小事に過ぎざるも、以てそが平生の如何を推想するに足る。此の如く總べての事皆な戰時の風を以て處し、毫も苟もする所なく、其の守備極めて嚴なれば、皇帝も數々我が國境は安全なりと稱して將軍を慰藉せり。

佛國に侵入するの策は仔細に講ぜられ、境界に向て馳する汽車の線路には、特に要なきの停車場をさへ宏大に建造し、其の單に送兵の便利を計るにあるは、何人も直ちに之を察するに難からず、若し一旦徼の傳はる、則ち百萬の大軍立ろに西の一方に集到するを覩ん。

獨の佛に接する國境の守備を嚴にすると同じく、佛も亦た居常獨の爲す所を注視して之に應ずるの準備に解たらず。國境に幾多の堡砦連續し、個々の間幾里の距離を隔つとはいへ、彼此相ひ連續して遠く亘れる、殆んど萬里の長城を築けるやの趣あり、遞次是等を摧壞して進寇し

來らんこと固と難事に屬す。而して特に戰鬪の燒點たるべきナンシーは却て一の堡砦をを設けず、平原に軍團を駐屯し、佛國第一の名將と稱せらるゝラングロアー之が主將たり。多くの堡砦を連設しながら、獨りナンシーに之を設けざるもの、全地敞開して之を設くるの難きにも因れど、更に數里を進みて高地に築かば、たとへ費用の多くとも以て大に防備を嚴にし得るに、敢て然らんともせざるは、他に理由の存すればなり。以爲らく、若し一たび此地に堡砦を設けんか、敵軍をして寸歩も侵し得ざらしむべく、國境の安固なる復た加ふべきを要せざらんも、而も防備をして此の如く嚴に、國境をして爾く安固ならしむる則ち佛國は永久守勢を採るに終はり、佛人は漸次退守に偏するを免れず、人氣

に關すること尠少に非ざるべし、凡そ國民は必ず其の進むべき方向に進前せしめて始めて將來の發達を期し得べしと。是に由り最も要衝の地たるナンシーの守備を廢して却て此より他に突進するの勢を擬す。而して獨の佛境に侵入せんとする必ず此の方面を突かんとし、能ふ限り多くの軍隊を能ふ限り疾く此處に集中するを得ば依て以て後れ來る對手を摧破して勝を全局に制するを得んと爲すと雖も、而も佛も亦た能ふ限り多くの軍隊を能ふ限り疾く此處に集中し以て一にはメッツ方面の守備を鞏くし、一にはストラスブルグ方面の防禦を嚴にし、更に大軍を鼓して東方に進前せんとし、其の兵備を整ふる實に戰時に於けると異なる莫く、苟くも將校たる者は一たび其の方面に赴きて任に當るに非ずんば則ち昇進の速なるを期し難たし。故に彼等は皆な互に此の方面に行かんことを爭ひ、陸軍大學校亦た此の處に設置せられ、總べての兵力一に此處に集注せらる。三國同盟の成立は實に佛をして伊に備ふる所あらしめ、伊の兵をトリノーに集中するに對し、之をグレノーブルの山地に制遏すれば、究竟此の方面に於ける守備は特に重きを置けるに非ず。獨も亦た佛の同盟國たる露に備ふる所なきを得ず、乃ちケニヒスベルヒの守備を嚴にし、皇帝をして新たに一のヘーゼラーを得たりと稱せしめたるフヲン・デル・ゴルッ其の主將たり。三國同盟の一角たる墺はクラカウに兵力を集注し、而して露は殆んど全力をワルシャウに注ぎ、以て國境の安固を計るに腐心す。汎く大陸諸強國の境域に對する防備を觀る、則ち各國互に力を是に致たすに專らなる此の如しと雖も、要するに其の第一の爭點は、即ち獨佛の境に在るや疑なし。戰爭の遽かに開かるゝを期すべからざるも、其の方面に當れる將校は、常に戰時の心を以て任に在り、終始警戒して懈るなし、但だ其の局に當るの軍人に限られ、軍人以外の人々之に關係を有せざるが故に、世人の一向に意を此に用ゐず、宛がら平穩無事なるかの如くに思はるゝのみ。

獨逸の陸兵、戰時三百萬と算せられ、佛亦た之に對して更に多數の兵員を備ふと稱すれど、實際戰鬪力ある者は獨と相當るとするを適當とせん。獨の同盟國たる澳は二百五十萬、佛の同盟國たる露は四百五十萬、二國同盟に對するに三國同盟を以てし、極力防備を嚴にする此の如きも、其の爭點の存する所要するに獨佛の境上に在り、兩國が斯くも鞏固たる一地域を爭ふが爲めに、他と同盟するに汲々たる、其の據て來る所を繹ぬるに唯だ歷史に於ける感情に依りて然るのみ。今の狀態を以て察する、兩國各々國境に全力を注ぐもの毫末經濟上の利害よりせず隨ひて雙方共に其の境上の軍備に爾かく重きを置く割合に、人民は之に對して危機の逼迫を感せず、殆んど之を遺忘したるの形あり。獨佛二國の此處に相ひ爭ふ、竟に何等の利益を得べきなし、而も今ま互に力を極めて國境の防備を嚴にする、現狀の果して永久に亘りて變せざるやは卽ち疑問たり。相ひ互に力を極めて爭ふの後、竟に如何にして終るべきか、若し單に一のアルサス・ローレンを回復せんとし、他の一の極力

之を保有せんとするが爲めのみなる、則ち二國の爲す所寧ろ愚の最も愚なる者なるを見る。二國よりして之を觀る、斯る一小地域を爭はんよりは、更に大なる利益の爲めに今後二國の次第に融和して此等境界の確執を忘れ互に相ひ一致するに至るも亦た測り難きが如し。一朝支那に利益の獲取すべきを見る、則ち獨は佛と與に露と連合して東洋に進路を開んと爲し、類、其一例とするに足る。苟も他に大なる利益あるを發見し之が爲めに相一致するの必要なるを感ずる則ち此等境上の確執を棄つる極めて易々のみ。從來敵としたる者に對し、俄に意を飜へして相ひ握手するに至ること固と甚しく難しとせず。佛は嘗て久しく露と爭ひしに後ち却て之と親和し、澳は普と不俱戴天の讎なるに亦た之と同盟

するを辭せず。獨佛二國の境上に於ける敵意の確執の如き、他に大なる利益の在るあるを發見する曉、何ぞ忽焉として融和するに至る無きを必すべけんや。二國融和して警戒の要なく、兵を撤して他の方面に轉向せしむるを得んか、爲めに他に及ぼすの影響將た如何とすべき。獨佛二國のアルサス・ローレンを爭ふの間、歐洲の列國乃ち現狀を維持し得んも、一朝其の互に融和して握手するに至る、則ち前來の權衡は玆に崩れて大亂となるやも保すべからず。二國が境上の守備を撤したる後、若し之を轉じ露に臨むとする、當今に於てさへ露は獨澳に對して極力防禦を嚴にせざる能はざるに、佛境に接して駐屯せし獨軍の更に此の方面に來り加はるあらば、露は一層兵力を增加して守備に努めざるを得ざるべし。而して斯くすること果して露の堪へ能ふ所なるか。

勢の變ずるは元と遽に豫測し難からんも、利益の存する所は勢の必至する所、當今を以て之を見る、則ち成るべく抵抗の少き處に於て成るべく多く利益を獲得せんとするは、宇內の實勢といふべきが如し。列國の支那に向ひて勢力範圍を劃定し利益線を延長したる、此の勢の赴き所に過ぎず。苟も進んで一地域を領有し得たる、能ふ限り自國の民族をして勢力を扶植せしめ、業務を擴張せしめんと力めざる莫し。何れの領域に在りても外國人の入るを好まず、又た異人種多く居住するの地を好まず。故に列國の最も銳意して新たに領域を擴大せんとする所、一に人口の稠度甚しく密ならず、富源の開くべき餘裕最も多き地域に在りて存す。支那の如き兵力よりして抵抗力の最も少き地域なる太だ明白にして、今乃ち列國に於て分割の計算に編入しつゝありと雖も、人口の多き却て列國の右に出で、たとへ兵力を以て各自に領域を劃定し得るとするも、自國の民にして愈〻此に移住せんとする、多くの支那人を抑壓するの極めて難事にして、本國政府の斷えず力を盡くし之れが動亂の豫防に汲々たるにあらずんば、以て其の勢力を扶植し得ざる、之が分割は寧ろ勞多くして功少なく費耗大にして利益之に伴はざるの結果を生せん。南阿の英領植民地にさへ黑人の數極めて多き爲め、白人の業務に着手すべき餘地甚だ少しとは、屢次訴へらるゝ言にして、勞働者に就て之を見る、則ち白人黑人とは勞働の効能

に於て一、三と一との比例をなし、賃銀に於て前者後者の三四倍を要す。資本主の白人を雇用すること却て黑人の如く多きを得ざる、固と已むなきに出づとするも、白人の之が爲めに業務の餘地少きを訴ふる、以て黑人すら數の多きの頗る恐るべきを見るべし。合衆國に在りても九百萬の黑人を奈何ともするを得ず殆んど之が處分に苦しむの觀あり。苟も新たに地域を領有せんと欲する、則ち成るべく人口の多からざる所を擇びて之を開かざる可らず。分割に便利なるは人口多からずして而して利益の開發し得べき處に於て之を見る。

而も列國の新たに地點を攫取する、概して意慮の外に出で、領有以前に在りては毫も然る如き徵候を發見し得ざりしを多しとす。もとニユギニアは英蘭二國の分ち領する所と定められ、クヰンスランドの議會に領有の實を吏に明にすべしとの議ありしかど、當時之を杞憂に過ぎずとして度外に措き亦た之を顧慮するなかりしが後ち獨逸猝然として來りて窃かに此處に其の國旗を揚げ、之が一部分及び附近の諸島を略取せり。合衆國の比律賓を領有するに至らんとは、何人も思ひ設けざりし所、而して米西の戰爭は卒然として起り來り、竟に新たに一の米領を加ふるに至りぬ。阿弗利加に於ては、リーヴヰングストンが艱險を冒かして內地を巡行遍歷したる當時に在りて、之が分割の如き何人も豫想せざりし所ならんに、一たび利益の獲取すべきを見る、輒ち皆な爭ひて之を分割し畢はり、英國の如き、二十億圓を投じ、戰爭を敢てするを辭せざりし。支那に對する列國の打算、尙は未だ確定されたるを見ず、阿弗利加も亦た幾許の利益の收め得らるべきやを明にし難し。此等兩地に於ける利益の開發せらるべき程度、漸く分明なるを得る時は、即ち列國が更らに眼を轉じて他を窺ふの秋たり。其の何の方面に轉じて何の地に分割を敢てすべきやは、豫じめ之を審にし難きこと、猶ほ獨逸が卒然としてニユギニアの一角及び附近の諸島を領有し、合衆國が一擧して比律賓を略取するに至りしが如しと雖も、勢の赴く所概して之を豫知するに難からずとせん

墨西哥より南米に亘れる地域は、次ぎに分割せらるべき利益伏在の地なりとするも、之が分割はもと合衆國のモンロー主義と衝突し、既に他の繩張りをなしゝ所に係り、此に侵入せんは頗る困難の事たり。近くはヴエネズエラ問題の如き、英獨卒先して事を首じめたるも、竟に合衆國の仲裁に委ねて其の局を結ぶの已むなきを致せり。其の餘世界の各地、大抵土地の廣袤に比し人口寧ろ衆多にして、分割を敢てするほどの利益を見ず。然るも勢の變ずる所は常に利益を意外の地域に發見せしめ、又た分割を意外の領域に實行せしむるある、自今以後最も注目するの價値ある所、即ち廣大なる露領に伏在するの利益と、及び歐洲に於ける獨佛の各自境上の守備を撤して之を他の方面に轉せしむるの大變革との二者に在り。

人口稀少にして土地廣濶、未だ開かれざるの富源今に至るも尙は人の計算を試みしめらず、此の如きは世界の廣しと雖も獨り之を露領に於

て見得べきのみ。若し防塞の準備にして整ひ、機械の使用更に進歩して、鑛山の外、農業に於ても、森林に於ても、大に利益を獲取し得べしとの事實、將來更に分明となるに至らば、列國の此に對して誕を流がさんことは昭然掌を指すが如し。土地を略取するの念は、たとへ其の初め秋毫も之れなしとするも、往々にして意外の邊に起り來ることあり、從來列國の新たに諸地を領有したる、皆其の類とすべし。露領の分割の如き、果して何れの邊に起り來るべきか。既に露領に大なる利益伏在するの事實分明となり防塞の準備も機械の使用も、皆な意外に容易なることを知悉するに至るあらば、歐洲諸國の富豪は必ず擧つて此處に何等か事業を經營せんとの念を起し來るべく、斯くして議會の議員を刺

激し慫慂して事を首じむること、恰かも擽きに合衆國の富豪が頻りに海外に猿臂を伸ばさんことを望み、戰爭を好まざりし大統領マクキンリー氏を勸めて、強ゐて西班牙と戰端を啓かしめたる如く、列國を內部より鼓勵し相ひ同盟して露領の分割を敢てするに至らしめん、大なる利益の露領に伏在する、分割は必ず免るゝを得ざる所なるべし、目今直ちに此の如き形跡の指示すべき者なしとするも、後ち其の大問題として現はるべきや必せり。現に列國は頻りに支那の分割に囑望するの觀あれど、人口の多き此の若きを分割するは、人口稀少にして移住者の多數を包容すべき露領を分割するの優れるに若かず唯だ露國の地味、富源等尙は未だ分明の計算を經るに及ばず、之を分割するの果して利益なりや否やを確知し得ざるが爲め列國の間未だ嘗て其の分割の必要を認ひるに至らざるのみ、然るも露國自らは頻りに國外より資金を注入し來りて、諸種の經營に之を投下するを見る、則ち其の富未だ大なるを得ざるも富源の必ず大なるは今既に一般の認識する所たり。歐洲諸國の富豪が、露領の分割を希望するに至らん日も、或は意外に遠からざらんか。

若し露領を分割するの必要を生ずるに至らば獨佛二國の力を以てするも優に之を辯じ得べしアルサス・ローレンに對持する守備を撤して、直ちに之を露の境上に轉し、塊の之に加はり、英の之に加はるある、則ち大擧して以て他を擊摧し徐ろに之が分割を敢てし得べし。露領は頗る廣濶にして、分割すべき範圍の極めて巨大なる、境界の確定に就て多く爭ふの要なし。獨は現今の東境を擴大して其の地域を領し、佛は黑海沿岸の地を得て、此處に其の領域を定め、塊も亦た便宜東北境を擴大して、獨と共に議定して可なり。西比利亞の如き土耳其斯坦の如き、加入の邦國相議して彼の合衆國の經緯度により凡べて境界を制定せしに倣ひ、各〻其の境界を明にするに難からず。露人はもと多く國家の觀念を有せず、之を分割するとも之が爲めに反抗して起るの民にあらず、久しく蒙古の治下に屈伏し、其の國亦た唯だ茫漠として境界の分明ならざる、皆な國家の觀念に乏しからしむるの助因たり。露人の性もと叛亂を好み、夫の塊に住み、バルガン諸邦に雜はるスラヴ族の如き、孰れも叛亂を好みて常に蠭起して止まず、而も概する

に露國なる者の爲めに事を擧ぐるにあらずして唯だ叛亂を好むが爲めに暴動するに過ぎず。之を分割して之を統御するは、國家の觀念極めて強烈なる他の一國を鎭定するが如く、爾かく至難の業にもあらず。獨墺の兵力を以てして更に佛を加ふるある、分割の極めて容易なる如く、統治も亦た甚だ易々たるのみ。當年ナポレオン一世は佛兵の外、更に普國の軍隊を加へたるに止まる、而も尙は一敗して境界を超へ遠く莫斯科に侵入せり。當時其の一敗地に塗れたるより人多く露の遂に討つ可からざるをいふも、實は甚しき謬見たりとす。ナポレオンの敗は事全く偶然に出でたり、九月の交より大雪降り積り、人馬爲めに埋沒せられたる如きは、極めて稀有の出來事とすべし。嚴冬亙塞の候と雖も今は僅

かに白雪の道塗を埋むるに過ぎず、田畦の艸頭皆な雪を破りて外面に現はるゝを見る。ナポレオン盖し之を知り、敢て長驅して深く進軍したりしに、天意外に大雪を降らし心算爲めに齟齬して大敗をなせり、ナポレオンの一敗北を以て露の竟に討つ可からざるをいふ、妄と謂ふべし露國を討伐して之が分割を敢てするが如き、二三強國の兵力固より優に之を辨じ得べく、而して獨佛の次第に融和して境上の軍備を撤退し事を他の方面に轉せんとするの時に當りては、必ず露領の利益最早や分明となり歐洲諸國の資本家が熱心に事業を此處に經營せんとの念に焚ゆる時に屬すべし。勢の變ずる所將來必ず歐洲の一大變革を來たすべきを疑はず。

若し單に領域の大なるを以て之を見る、則ち英領の如きも亦た分割を免れざる者の一とすべし。世界に比類なき海軍力を抱有するとも、歐洲列國の同盟して之に臨むあらば、露國と同じく固より危きものあり、印度は陸路より攻むることを得べく、若し蘇士の運河を占領する、阿弗利加の東岸は列國の自由に歸せん。西方此の如く急ならば濠洲は全く防禦なきの地となり、もはや英の物たらざるべく、加奈陀は方今に於てすら防備極めて不完全にして、唯だ英國の力に依り僅かに合衆國と壤相接するを得るに過ぎざれば、是れ亦た分割するの利益さへ分明となならば、立ぞろに着手せらるべし。苟くも人口の稠度甚しく密ならず、優に外來の勢力を扶植せしめ之をして利益を獲受せしむるの餘裕ある地域は、竟に漸次に分割せらるゝの傾向を有するが如し。人口漸く增殖して之を略取するとも、新たに利益を得るの餘地なき程度に至りて、分割の軍則ち始めて熄む。世界總ての方面、悉く此程度に達せざるまでは、分割は常に意外の邊に其の原動力を得來りて、必ず意外の地域に實行せらるゝを見ん。合衆國の如き亦た之を分割するは、固と至難の事にあらざるべきも、既に他に分割し易きの地域ある、此を後にして彼を先にすべきは必至の勢とすべし。特に其の外國人の移り來るを拒まざる、年々六七十萬、乃至八十萬の移住者あり、今年の如く約百萬に上るべき豫定なり。外より移住し來る者既に此の如く多數なるが爲め、廣大なる土地も次第に開け、竟には更に餘地なく、之を分割するも新たに利益を獲取し得ざるべき日、盖し遠からずして到

來せん。此の如く自國の內陸を外人に開放して、毫も之を拒まざるときは、或は內國に在りて却て外人の跋扈するを見るの虞ありとするも、外より兵力を提げ來りて分割の迫害を加ふるの禍は、少くも爲めに免るゝことを得べし。他に先んじて外人に內陸を開放したる邦國は凡べて之が爲めに先づ分割の迫害を避くるを得べし、今纔りて之を露國に觀る、則ち滿洲をさへ開放することとなさず、能ふ限り外來の移住者を防遏せんと思め、西比利亞の如きも亦た之が開放を望むべからざる、其の將來分割の禍を受くるに至るの最も速かなるを見るべし。英領の如き單に其の領域の大を以てすれば、將來勢の變ずる、則ち或は分割を免かれざる者の一に數ふべきも、之を露領の土地大にして人口少なく、全く開放を拒絕して自ら禍を招徠するの觀あるに比せば、分割の機會に遭際する事の極めて少しといふべし。

百三十二

露　兵

北淸事變の酣なりし時、各强國の兵天津北京の間に布き、宛然軍隊展覽會の觀あり、我が將校某々は以て比較の好時機なりとし、詳かに視察し、細かに稽査し、頗る長短を計る所あり、而して體力に於て露兵を第一に推せり。聞く者或は是を以て露の恐るべきを想ふ、當路者の或る者の若き卽ち然り、恐るべきを恐るゝは事の自然に出づるもの、露にして眞に恐るべくは、之を恐るゝこと遽に咎むべからずと雖も、恐るべからざるを恐るゝに至りては、寧ろ其の過憂を惜むべきに非ずや。露兵は体格に秀で、粗食に甘んじ、戰地に在りて疲勞を覺ゆること少しといふ、斯の若きは兵として稱すべきに相違なきも、其の効能は實戰に於て幾許の部分を占むるや。勝敗の決は多くの要素より、僅かに一二を以て判斷せば、謬らざること難し。

兵に於て体力の重んずべきは言ふ迄もなし、強きは強きだけ優り、弱きは弱きだけ劣る、而も著しき差違の存せざる限り、深く意とすべき事ならず。一寸法師にして梅ヶ谷と角する、如何に技倆拔群なりとも到底相撲とならず、然れども一方は僅かに常人より低く、他の一方は僅かに常人より高きのみなれば、其の勝負の如何は決して豫じめ判ずることを得ず。露兵の体力に於て優る、唯だ彼れ此より優るといふのみ、豈に傑出すること謂ゆる段違ひといふほどの者ならんや、重きを擔ふに堪ふるとも、其の銃身は他よりも太く、其の銃丸は他よりも重きにあらず、何ぞ其の他よりも遠方に達するが如き事あらんや、粗食を厭はず疲勞を覺えずとするも、よも握り食に梅干にて嚙々として腹鼓を打つにもあらじ、幾許か久しきに耐ふるの益ありとせんも、究極勝敗に於て何の効かある。

体力にて兵を取らんとする、ゴルドン將軍は之を以て優等として認めらる、支那人の若き夙に世界第一の兵と稱せしが、今の英國の大將ウヨルズレーも此と同一の意見を抱き、若しナポレオン又はビスマルクにして其の國に出づれば

世界第一の強兵を作り、以て世界を統一するを得んと言へり。支那人は訓練次第にて斯の如き者なるやも知るべからず、然れども其の猶逸式に養はれし者が日本との戰爭に如何の結果を示しゝかを看るに、必らずしも以て其の弱きを證すべからざるも、斷じて其の強きを證すべからず、少くも体力に富むの故を以て恐るべしとするの妄たるや明けし。佛蘭西の兵は体力に於て毫も稱すべきを見ず、歐洲に於て低くゝ三流以下に位す、而も一たび名將の下に出陣する、向ふ所摧けざる無く、獨も墺も露も無人の境の如し、其の千里懸軍せしに方りて、皆な唯だ望みて戰慄せしのみ、誰か其の体力の劣れるを以て其の弱兵たるべきを謂ひしや。七十年の戰役、獨の佛に克ちしは其の体力を以てにあらず、武器と訓練と外交とを以てなりし、其の今日必勝の算なしとするは、佛が前年よりも準備に於て整ふ所あればなり、かの体力は何かする。

露兵は体力第一なるの故を以て何の利する所ありたるか、彼等は支那の如く惡士官に率ゐらるゝにあらず、寧ろ良將の下に良卒たるもの、而して十九世紀に於て何の戰勝の特記せらるゝ㊀あるか、戰勝よりも戰敗の多きに非ずや。ナポレオン一世の爲めに大に破られ、殆んど國土の分裂を來さんとし、後にこそ故さらに敵を危地に陷れたるかに聲言するも、實は唯だ僥倖を以て免れたるに非ずや。セバストポルは普通の將普通の兵にて守り、普通の援軍の到來すべくは、決して陷落すべきに非ず、然るに英佛の遠征隊の爲めに敢へなく略せられたる何ぞ、プレブナの勝利も、敵が圍を脫するに際し、從ひ行く所の婦女子を襲擊し以て辛うじて勝てるのみ、何の稱すべきか之れ有る。露の歐洲に於ける、兵の強きよりも地の利を占むるのみ、兵として恐るべきこと未だ之を事實に徵することを得ず、固より其の戰勝の少きを以て之を弱しとすべからず、又た固より之を侮るべからずと雖も、深く恐るべきに非ざるは蓋し疑を容れじ。

露藝

我國曾て露を畏るゝこと熊の如く、僅に其の聲を聽て戰慄し、かの征韓論の熾んなる、岩倉公乃ち露の南下を說て之を制し、人亦た頗る爭ふに究せり、當時露に於て實に此に乘ずるの意なかりしに、唯だ之れ有りと假定して恐怖せるは寧ろ辱とすべし。後ち事情の漸く詳密を加ふると共に、之を畏るゝこと次第に減じ、畏るゝは則ち畏るゝも、恰も水牛に對するが如く、其の力の大なるを認め溢りに之に觸るゝを憚ると雖も、又決して與みし難しと爲さず、已むことを無くんば之と鬪ふを辭せず。

我に於て彼が兵の強を恐るゝ蓋し妄、國の大を恐るゝ亦た妄、若し是を以て恐るべしとする、より多く恐るべき者は別に在るあり、均しく恐るゝ、より多く恐るべき者を恐るゝに若かず、何をか最も恐るべしといふ、曰く露人智力の發達是れなり。而して智力の發達に於て屢〻日本と比較せらるゝは亦た奇なりとせずや、斯の二

國や他の長を採り己が短を補ふに急なるもの、
啻に集めて大成せんとするのみならず、又た咀
嚼し消化して別に新たに作爲する所あらとを期
す。彼が韃靼風、羅馬風に於ける、猶ほ我が韓
風、漢唐風に於けるが如し。

露は西歐の文物に接してより既に二百年、日本は歐米と交はりてより僅に五十年、乃ち歲月よりいへば我は他の長を採るに比較的速かに成功せりと謂はざるべからず。我は封建割據を改めて統一制度と爲し、更に改めて立憲政治と爲し、たとへ政黨の運動に於て尙は未だ亂雜を極むる者あるにせよ、唯だ英に比して遜色ある迄にて歐大陸の諸國より何の劣る所あらず、是れ露の企て及ばざる所のものたり、工業の進歩に於ては互に得失あるも、姑らく伯仲の間に在り

と謂て妨げなけん。然れども社會を裝飾すべき
文藝に至りては我れ遺憾ながら數歩を讓らざる
能はず、我れ固より作家の在るあり、徂徠の若
き、馬琴の若き、もし當今の文物に接せば、必
ず大に觀るべき者あらん、然れども實際誦讀す
べき書にして彼がツルゲ子フ、ドストエヴスキ、
トルストイに當るべき有りとは思はれず。我れ
亦た固より畵家の在るあり、然れども之を露京
の歷山三世美術館に陳列しある者に比する、意
匠と規模と勞力とに於て能く同日に語るべき者
あるか。

アイヴアゾヴスキーは水を畵くの專門家にして狂瀾怒濤澎湃天に漲るもの、順風活波白帆飛ふもの、驟雷の如きもの、明鏡の如きもの、觀る者をして驚歎して措かざらしむ。かゝる者は之

を佛京のルクサンブルグ美術館に掲ぐるも優に高地位を占むべし、其の未だ普く世界に知られざるは土地の僻して所謂畵閥なる者に縁なければなり。露は佛の畵風を學で更に機杼を出ださんとするもの、自在に想像を騁せ天馬の衝を脫するが如きに於て闕けたりと雖も、筆力勁駿、毫髮眞に迫り、動もすれば疾痛慘怛の跡の見るべき者あるは、文と畵とを通して然らざる莫し、

露は文藝を以て世界に立つことを得べし。我國畵の賞すべき無きに非ざれど、多數者は猶ほ倪雲林の見地に甘んずるに非ずや、彼れ自ら畵竹に題して曰く、他人之を視て或は以て麻と爲し、或は以て蘆と爲す、余亦た必ず之を名けて竹と爲すこと能はずと、是れ確かに一見識なりと雖も、今に於て難いかな其の名畵として稱揚せられんこと。

亞米利加魂

西洋といふ語は意義甚だ茫漠にして、普通には歐羅巴亞米利加等一般に白皙人種の住居せる地方を總括して稱するが如し。均しく西洋といふも、大小幾個の邦國群立し、各〻皆な多少の差違を見ざるなく、中には著るしく相ひ異なる

もあり、英國は大陸諸國と違ひ、大陸諸國も、佛は獨と異に、獨は露と異に、伊は澳と異なり、其の他、一として同じきはあらず。孰れも皆な愛國心に富み、國自慢に專らにして、英は英を以て誇り、獨は獨を以て誇り、露は露を以て誇

り、更に小なる邦國、蘭の如き嗹の如き、亦た各〻自ら偉とする所あり。則ち列國個々に爾かく愛國心の存在を認むべしと雖も、歐羅巴全洲を通じたる者、即ち愛歐心ともいふべき者の明かなるを見ず、歷史の上に徵するも、列國の文明互に軒輊あり、彼此一なるを得ず、社會の進歩は機械の進歩を意味し、そが進度の高低は機械にて測るべしとの說あり、近世史の特徵ともせられど、歐羅巴風若くは西洋風といふ類は頗る明確を欽き、舊に依り茫々然として最も廣義に用ゐらる。

然るに近時に及びて米國の進歩著るしく、更に愈〻進みて底止する所あらざらんとす、往時其の英國より離れたる、當時實に後進國を以て目せられ、國家的に獨立して社會的に附屬たるの觀あり、歐羅巴は乃ち萬事に於て進歩を表示し、模範として高く他の上に位せしに、爾後米は長足の進歩を遂げ、殆んど歐の列國を凌駕せんとするに至れる、米に住む者の多くは歐の進歩の遲々たるに慊たらず、今後の進歩は須らく歐洲以外に出で屑々急にすべものなるを想ふに及び、是に於て西洋といふ語は漸く從前の意義より限畫せられ、明らかに米國といふと同一の意義に用ゐられ、之と伴ひて西洋魂なる新語の特に用ゐらるゝに至れり。西洋魂とは原語オクシデンタル・スピリットなるが、亞米利加魂（アメリカン・スピリット）といふと同じく、時として亞米利加流（アメリカン・タイプ又はアメリカニズム）といふと大差なし。由來西洋は東洋と相ひ對する語、西洋はオクシデントにして、

東洋はオリエントなるが、元と洋の東西をいふにあらず、日出と日沒とを意味し、次で日出の地と日沒の地とを意味するに及べり。初め寶石類の主として東洋より輸入し來れる、質の良好ならざるものを呼びてオクシデンタルとせり、西洋產に非ずと雖も、他の良好なる寶石の東洋產なるに對して商略上西洋產と稱せしより、西洋は劣等の名目たりしなり。今は全く勢を異にし、西洋製といひ舶來品といへば珍重せられ、オクシデンタルなる語は正に良好の製品たるを保證するに似たり。然るに米國の駸々として進歩し、歐洲の文明にすら慊焉たるあるより、西洋なる語は玆に少しく意味を變じ、西洋といへば先づ米國を指すものゝ如く、オクシデンタルの語を用ゐる、直ちにアメリカンと同一意義に解せられ、而して亞米利加魂といふを自負する米國人は、亞米利加魂即ち西洋魂、西洋魂即ち亞米利加魂たるを公言するに躊躇せず。

米國の進歩は東方よりして西漸し、其の推移するの度極めて迅速なり。建國の初め東部地方先づ開け、歲を累ぬると共に進歩の較著なるを見しが、既にして中部地方の更に開くるに及び、東部を指して其の守舊に傾けるを嘲り、以て己れの日に月に新たなることを誇稱せり、然る後ち西部地方の更に開くるに及びてや、玆に又た中部を指して其の守舊に傾けるを嘲り、以て己れの層一層新に就くを誇稱するあり。英國のオクスフォード大學及びケムブリッチ大學は世界に著名なるもの、米の大學は最初皆な之を模範とし、ハーヴァド大學及びエール大學は實に此

に則うしに過ぎざるに、今は英を抑えて自ら揚くるに憚らず、他の長所を學ぶよりも自ら進むに急なるもの、如し。然るに後進の先進を見る猶は後々進の後進を見るが如く、東部二大學の英を凌がんとする時、中部二大學は漸く東部を凌がんとしつゝあり、即ちコラムビア大學（地は東部なるも學校として西部に屬す）及びシカゴ大學は隆然として興起し、他をして後に瞠若たらしむ。然れども其の斯の若くなるに際し、勢は早くも西に轉じ、カリフォルニア大學及びスタンフヲルド大學は遽に盛大を致たし、將來學問の中心と爲るやも測られずと言ふものあり進歩の速かなること洵に驚くに堪へたり。固より今日に在りても東方の舊なる者に自ら尊重すべきの事あり、英の二大學は弊害の指摘すべきあるも、依然として獨歩の觀あり、校風は何物も能く比肩し得ず、米の東部の中部に優り、中部の西部に優るも亦爭ふべからず、舊家の存續せる者は家に家憲あり藏に寶物あるべく濫に俄か分限の徒に屈するを要せず、外面の隆盛を以て事を判するの非なるは固よりなるも、而も萬國博覽會のシカゴに移り、セント・ルイスに移り、漸次西方に移る跡の歴然たるに察する、則ち勢力西漸の事實たる竟に疑ふべからず、商業に工藝に學術に種々の方面よりして進歩の西漸し、愈〻西して止まらざる、終に極西の大に興隆し獨り美を專らにするの日なきを保せず。

米國の大學中、程度の低きに於て我が兩帝國大學に劣るは勿論、近時流行の私立にさへ劣るもの少からざれど、基本金及び其の他の便利に於て、總じて我れに優るの形あり。中にも極西のスタンフォルド大學は六千萬圓の基本金を有し、敷地を有する二百町に近く、往きに寄附者の爲めに製肘せられて經營意の如くならざりしもの、今や全權校長ジョルダン氏の手に歸し、巨大の金と地とを以て如何に活躍すべきやは人皆な刮目して見んことを期す。氏は先年我國に渡航せしことあり、生物學に有名なる人、又た事務の才に長じ、一代の英物として知らる、比律賓戰爭の闡なりし時、其の不當を鳴らして起ち、日本人排斥の熾んなりし時其の非を辨じて倦まず、容易に時流に屈せざる所頗る偉とすべく、管理する所の大學も亦た隨ひて信用を博し來たれり。カリフォルニア大學は久しく不振の狀なりしが、スタンフォルド大學の勃然として

盛大に赴くを見、ジョルダン氏に劣らざる手腕の人を藪き、以て校運の隆昌を計らんとし、乃ち希臘學者たるホイーラー氏を聘して校長と爲せり。氏は既に希臘學を以て名聲籍甚せしが、又た事務の才に長じ、新たに任に就きて以來百方經營し校運日に昌なり、州立なりと雖も寄附金少からず、ハールスト夫人はスタンフォード夫人に負けじとて金を投じ、校舍の設計の如き實に世界に推賞したる者なり。今日にては校長の手腕及び學校の勢力正に相ひ拮抗して下らず事業の上に互に援助しつゝ、學生の進歩の上に競爭を懈らず。

歐洲の學校は概して校長に重きを置かず、教授順番に校長を勤むるもあり。米國の學校は之に反し、頗る校長の選擇に勞し其の手腕如何に

依りて一盛一衰あるを免れずとす、變遷の急劇なる社會にては、努ひ然らざるを得ざるべし、重もなる學校の校長は總じて人物として推重するに足る、スチーブンス工業學校のハムフレース氏の如き、巨額の收入ある職業を棄てゝ身を教育に委ねたるなり。カリフォルニヤの二大學、即ちカリフォルニヤ大學及びスタンフォルド大學は、校長の人物技倆既に一世の推重を受くる者なるが、二人は學校の爲め孜々勤勞する側、又たカリフォルニア全體の進歩を計り、延て米國全體の進歩に及ばんとす。カリフォリニヤは米の西部に位する者、特に西部地方の最も西端に在るを以て、西洋中の西洋にして、オクシデンタル・スピリットの最も發揮すべき所なりとし、以て自ら奮勵し、兼ねて又た他を皷舞す。

其の極西に位するが故に西洋中の最も西洋らしかるべきを要するといふ如き、もと自然に生出したる言語なるべく、何人の之を始め何人の之を說けるを知るべからざるが、特に一例を擧げて簡單に解釋を試みん。大統領ルーズベルト氏の巡遊して、カリフォルニヤに到れる、カリフォルニヤ及びスタンフォルド兩大校長は共に舊交あるの士なり、交る々々大統領を招請して以て舊交を溫めたりしが、二者共にルーズベルトの人物に就きて評言を下だし、其のオクシデンタル・スピリットを有し、眞に米國人の性格を具へ、且つ米國人を代表するに適するを稱し、西洋魂の人を見んとせば彼を見よ、純粹の米國人を見んとせば彼を見よ、西洋魂を有する米國人の模範たるべき者はルーズベルトなりと言へり。抑〻如何なるを西洋魂と爲し、如何なるを米國的なりと爲すべきか、更に之を明かならしむるが爲めには重ねて二人の評言を擧ぐるに若かざらん。

カリフォルニア大學校長ホイーラー氏は希臘學者たる丈けに華言綺語に富めるが、之を評して曰く、一の修飾なき男らしき人物、光の如く打ちあけ、北風の如く勁く、日出の如く浮き〳〵せり (One plain, manly character, open as the light, strong as th north wind, byoyant as the sunrise.) と。又た曰く、公事に關して少しの秘密なし、親友に語る所と新聞探訪員に語る所と同じ、室内に親友に語る所、直ちに之を新聞探訪員に語るを憚らず、故に親友を以て居る者の特に己れにのみ語りしと信ずる所の、實は衆人に公言する所なるを知りて失望すること稀れならず、而も氏は光明と新鮮の空氣との健康に益あるを確信するの人、公然といふ酸素を以て政弊を矯革する最良藥と心得居るなり、初め怪訝せる者漸く久くして其の全く表裏なく充分に信を置くべきを知り感歎して己むこと能はず、加ふるに決斷力に富み、行動の敏活にして遲疑逡巡を智とせざる、孜々勉勵して事に當たり、苟も怠惰に流るゝこと能はず恐懼を感ずること能はざる、洵に一分一厘米國人の性格を具備せる者にして、西洋魂を最も善く表明し得たり、是れぞ即ち西洋人中の西洋人にして、又た米國人中の米國人なりと。ホイーラー氏の評は實に前述の如くなるが、スタンフォルド大學校長ジョルダン氏も亦た稍〻同じき評言を下だせり、曰

く、資性快活、意志剛強、有りのまゝにして氣取らず、直截なるに於て事務家たり、性來及び修養に於て學者たり、學者の緻密なる考慮を重んじながら、其の小理窟屁理窟（academic fuss and feathers）を棄てゝ顧みず、模範的學生模範的米國人、米國時代の米國人なりと。二氏の評する所全然符節を合はすが如し、以て少しく西洋魂の何たるを考ふるを得べし。

西洋魂といへば、歐米兩洲に就て稱するが如く、人多く爾か思惟するならんも、米國人は全く歐巴羅的氣質を除外し、其の斷じて西洋魂なる稱呼を冠すべきに非ざるを言ふ、曰く、歐羅巴は既に衰頽の勢を萠ざせり、米國の隆々として日に盛運に向ふと比すべくもあらずと。而して其の西部に居るものは、東部に居るものゝ因循なるに快からず、東部地方の漸次固定に傾くの徴あるを說き、謂ゆる西洋魂の粹は獨り西部地方に於て觀るべしと自ら矜誇す。然れども米國人の西洋魂若くは亞米利加魂と稱して自ら誇るは即ち亞米利加魂の善なるものゝみ、其の似て非なるものに至りては、之れ有る固より多し、若し誤りて其の似て非なるものを眞の西洋魂として解せんか、則ち大なる誤謬に陷るを免かれず、唯だ金錢を念とし貪取を事とするが如き、孰れか西洋魂の似て非なる者ならざらん。我が國人の其地を巡覽せる者の歸來米國風を摸して而も眞の米國風を發揮し能はざるは、職として其の似て非なるものを誤り倣ふに因る。

ホイーラー及びジョルダンの兩氏がルーズベルト氏を評して西洋魂の人といひ、米國人中の

米國人といへる、是れ亦た一般米國人が籍りて以てルーズベルトを許するに一致する所たるべし。而して此の謂ゆる西洋中の最も西洋なるものは、幾推移幾轉徙を經て遂に我が日本の最も近き東隣に徙り來ることゝ爲りぬ、知らず此の西洋魂と我が日本魂とは果して如何の異同かある。我國にも日本魂を表示せりとして稱せらるゝ辭あり、朝日に匂ふ山櫻花とは即ち其の重もなる者なり、朝日に匂ふ山櫻花は、光の如く打ちあけ、日出の如く浮き〳〵せりといふと等しからずや、快活にして陰氣ならざるは實に我が特色なりとすべし、而も北風の如く勁くといふを何處に求むべきか、なんのその巖をもとはす桑の弓、これ亦た大和魂を表示すとして傳はるもの、危難困厄に沮喪せざる不屈の精神は以て見るべからずとせざるなり、悧巧なれども根氣なしとするは一を見て二を見ざるの言のみ。兩極端は相ひ接すといふ諺語に漏れず、極東は正に極西と相ひ隣するが、大和魂と西洋魂と時に或は意外に近きものあらんか。

北米合衆國

我が國人の米國を巡遊して歐洲に行く者、前者の極めて進步的にして窮極の測り知られざるに反し、後者は頗る因循にして守舊に傾き、一

國の見るに足るあらずとして僅かに一瞥し去る。然るに先づ歐洲を巡覽して而して後ち米國に及べる者は、米の餘りに殺風景にして亂雜を極む

るに驚き、何の稱すべきを見ずとして匆々通過し去る。均しく歐米文物を觀察する者、唯だ觀光の順序を異にするに因りて爾かく全く相ひ反するを免がれざる、蓋し自ら其の理なくばあらず。

我が國人の外遊して先づ目に入るは、家屋の宏大なると機械の應用遍きとなり、米には鐵骨の大厦、二十階なるは珍らしからず、中には三十階を越ゆるもあり、就いて仰望すれば蟠々として天を摩せんとす、先づ此の意外に宏大なるを見て然る後に歐洲に赴き、其の三四階乃至五六階なるに接す、誰れか他の宏大なるに比して適に小なるを感せざらん。米國は機械の裝置大なるに於て殆んど他に比すべきなし、シカゴの屠畜場は大なる機械を裝置し、能く一時間を經

ざる間に幾百頭の豚を屠り且つ燻詰にし了る、其の規模宏大なるを觀て後、他の一個一個撲殺して皮剝ぐを觀る、誰れか相ひ距る甚だ遠きに驚き、彼れの甚だ優りて此の甚だ劣るを念はざらん。既に一私人たるカルヰギーの製鐵場を一覽せる者、後に及びてクルップの武器製造場を觀るとも、亦た特に驚くことなし。費府のボルドヰン車輛製造場を一覽する、以て其の雄大なるを想ふに足るべく、一たびブルックリン橋上に立ちて眺望する、亦た如何に機械の世界なるかを判知するを得べし。若くは淨水と熱湯との供給遍く行き亘れる、アイスクリームの大なる製造會社より刻々配達さるゝ、百般の供給一として意の如くならざるなき、總じて物質的進歩の高潮に達せるを想見せしむる者ならざるは無し。

顧みて歐洲の大都會に於て見る所を執りて比較する、孰れも小規模にして一般に靜寂なりといふべし、倫敦の煤煙は有名なりと雖も、米國大都會の煤煙に慣れたる目には特に不思議とせられず、況んや其他の都市に於てをや、忙殺の度に於て遠く若かずとす。米のエレヴェトルの昇降極めて速にして、歐のリフトの緩慢なるにても、亦た事を推知すべし。米には大學及び專門學校の數合して六百以上、財産の總額七億萬圓、一年間の收入は四百萬圓を超え、年々集まる所の寄附金、少きも猶は數百萬圓を下らず、多きは則ち數千萬圓を出で、而して學生の總數實に十五萬人と稱す。新聞發行高の多き遙かに歐洲諸國の上に在り、中には一日の間に發行すること前後九回なるあれば、各日曉毎に色刷り百頁に近きを發行するあり。要するに斯かる類の事は他の何地に於ても見るべからざる所にして、たゞ獨り米國に於てのみ見るを得べきもの、而して米人は觀光者の他國より來る者あるに會する、乃ち先づ驚くべき國たるを察せしならんと語るを常とす。其の自ら言ふが如く、眞に驚くべき國なるは、何人も必ず首肯せん。

米國を經由して歐洲に往く者は斯かる感想を懷くの殆んど常なるが、歐洲を先きにして米國を後にする者は則ち然らず、却て不愉快の感を蒭すこと多し。かの二三十階なる大厦高屋や、高は則ち高なりと雖も、もと同一立方形の物體を累積したるもの、何等趣味の存するなし。機械の進歩亦た極めて著るしと雖も、而も何れの

地に在りても眼に入るものは唯だ大なる機械あるに止まり、機械以外の占領せる餘地は甚はだ少く、如何にせばより多くの金を取得し能ふべきかに潜心せる態の到る處に歴然たるのみ。學校の建築は概ね壯大、中には外觀の壯大なるに加へて内容の整備せるもあれど、名のみに止るも少からず、所謂アメリカン・ドクトルなるもの、以て其の然るを推すに足る。新聞紙に至りては一日の紙數百頁に近きありといふとも、其の一頁は大なる活字五六行を以て塡むるもの少からず、多忙なる社會に在りて事物の特に注意すべきを識別するの要あるものには洵に便利なるべしと雖も、他の沈着冷靜なる者の目して以て正氣の汰沙とし能はざる所、實に進歩の最中にありて而も調和を得ず、或るものは急劇に

進歩し或るものは依然停滞するの狀ある所にして其の然るは一には國を成して以來時代を經過する猶は少きに因り、一には種々の人種混住して共に進み而して未だ充分に混化せざるに因るとせん。然れども是の如きもの、眞に今日の亂雜なる觀ある所以にして、又た眞に將來如何の程度にまで進むやの知られざる所以、自然の富を藏する多き國は素より少き國は衰ふといふに徴する、米國の如きは寔に天惠の國と謂ひて可、即ち將來如何の進歩を爲すやの測られざる所にして、善美なるもの、大に進歩すると共に、又た頗る恐るべきもの、伴ふあるを免かれざるべし、今後其の國勢の果して如何なるべきやは全く疑問に屬す。

新大陸たる米國は舊大陸と國狀を異にし、武門の時代は既に全く過ぎ去り、産業を以て政治に換へんとする傾向ありて、政治家は寧ろ資産家の用を爲す一の道具たる觀なしとせず、大統領の如きさへ猶は時に人をして其の傀儡たるにあらざるやを想はしむ。夫の比律賓島を併略せる、時の大統領は之を爲すを欲せざりしに、資産家の以て工藝品の販路を支那方面に開かんとするに熱心なる、遂に迫りて之を併略するを敢せしめたりき。財多き者の大なる勢力を揮ふは何れの國にも之を觀る所といへども、其の大なるは米國に於て特に著るしとす、彼等は殆んや爲さんと欲して爲し能はざるなく、中には大統領製造人を以て目せらるゝあり、ハールストの紐育にジャーナル、シカゴにアメリカン、桑港にエギザーマイナーを有し、かくして新聞界の

覇者を以て鳴るが如きは亦た最も著るしきものゝ一、要するに財多き者は何事をか欲して成らざる無きよりして、財閥は今正さに政閥を排して之に代らんとす。然れども貧富の懸隔亦た甚だ顯著にして、何れの處にも職業あり如何なる勞働者も皆な相應の收入なきにあらざれど、而も又た生計に窮したる多く、爲めに社會主義を以て有力となれるもの少からず、かのルッキング・ビャクワード若くはシーザース・コラムの汎く一般社會に愛讀せられし如き、亦た其の徴候の一とすべし。是故に資産家の勢力偉大なると共に同盟罷工も亦た極めて強く、其の影響する所亦た極めて大、嘗て各處の炭山坑夫の聯合して罷工し、是が爲め一時國内に石炭の缺乏を告げしめたる、以て其の一斑を察するに足る、即

ち他年財閥の全く權力を特占する時、或は其の根柢よりして大なる破壞運動の開始さるゝを見るも保し難し。而も更に一層仔細に攷察する、其の大なる富の愈〻開發せられ商工業を以て世界に大競爭を演ずると伴ひ自ら兵力を用ゐて之を保護するの必要生じ、而して之と共に中央集權の益〻進むを觀、或は羅馬共和政の一變して帝政と爲りしと同じく大統領をして非常の權力を掌握せしむるに至るも知るべからず、坐ろに人をして財多ければ憂多しといふの勢あるを想はしむ。

然れども米國はさすがに普通敎育の普及せる處、國民一般に事物を判識するの明あり、倫理的運動亦た次第に盛ならんとす、現大統領ルーズベルトはハーヴァート大學に在りて相當の敎育を受けし者、學者として著書多く、而て又た軍人にして且つ政治家たり。初め紐育の知事と爲るや、資產家の跋扈して惡事を爲すを許さず、是に因り其の忌み憚かる所と爲り、乃ち敬遠の策にて副統領に祭り上げられぬ、然るに偶然大統領の橫死するに會ひ、己れ其の後を襲ぎて大統領と爲り、既に大統領となりて後も依然資產家の勢を恃みて惡事を爲すを許さず、飽くまで之を制するに勉め、而して猶は次期の選擧に大多數を以て當選するを必し得べき傾向あるもの猶は幾くかピユリタンの遺風存するを知るべきに非ずや。國內の大小都市到る處に大廈高樓の軒を並ぶるを見ざるなく、之を仰げば矗々天を摩するの觀あるに、華盛頓に於ける大統領の官舍は眇たる二層の低屋にして、長さ三十間奥行十五間、質素の構造にして輪奐の美觀るべきあらず、而して大統領は此處に日を定めて一切の人に面會す、而して漫〻として緩るく流るゝポトマック河に沿ひてヴアルノンの丘あり、鐵軌通ずるも田園の趣味自ら備はる、是れ往時華盛頓の三たび大統領に選はれんとせし時、其の惡例を遺すものたるを言ひて斷然峻拒し、而して自ら犂鋤を執りて耕種せし處、今尙ほ當時のまゝにして存し、人の來り弔ふもの續々として絶えず、此類の事他にも之れ有るが、是れ以て剛健の氣今尙ほ缺えざるを見るに足らずや。乃ち米國は將來の憂を胚胎すべき幾多の原因を存すれども、其の偉大なる國民の性格は儼として泯びざるかの如き者あり。

ローズの理想

特に新たなる狀勢の生起せる無く、隨ひて新たなる行動の以て人物の卓偉なるを表彰するに足らざるのみ。獨り我國に限らず、五洲何れの邦も然らざる莫し、莫にグラッドストーン無く、ディスレリー無く、又たバーチル無し、佛にガムベッタ無く、獨にビスマルク無し、ゴルチアコ

ラフ逝きて露に第二のゴ無く、ポペドノスチエラフも幾んど前代に屬す、其の外群峙せる列國何れも皆な凡常路に當り、復た衆を拔き類を出づる無し、但だ曩に阿弗利加及び東洋に事有りてより、英にチエムバレーンの表はれしが如きあり、蓋し時勢の寵遇を被むりしなり。阿の地や實に稱して新世界と爲すべく、其の風土の他洲と異なれるが若く、此處に國を建て事を執れる人物は亦た一種特異なる所あり、而して勢の頗る急なりしと共に其の人物の特異なる者遽然として宇内に顯表するに至れり、中に就き其の尤なるをクルーゲル及びセシルローヅの二人と爲す。

セシルローヅ元とゴルドンと友とし好かりしがゴルドンは極めて潔癖、財を得る穢を拾ふが如

し、其の支那に在る、廉潔の甚だしき、李鴻章をして一時奸物に非ざるやを思念し、後ち其の眞性に出づるを知りて感歎已まざらしめしもの然るに人或はゴルトンの貨殖の才を備へざらんを疑ひ、財ある者は自ら彼と異ならざるを得ずと云へりしが、セシルローヅは即ち金剛石の王たり、數千萬の金匯して其の掌中に在り、一身の快樂求めて得られざる莫きに拘はらず、私慾の無きこと恰もゴルドンと同じ、即ち財に富むと雖もゴルドンたり得るを料察すべし。

初め千八百六十七年金剛石の發見あり、六十九年に及び礦脈の所々に發見せられ、爾後人の各地より轉徙する潮の如く、七十一年に坑夫のキムバレーに集る者一萬に達し、八十年デヴイルス採礦會社二百萬圓の資本を以て創立され、

尋で他に同種の會社續々設置され、八十五年に四十二會社及び五十六私有者の採堀に從事するあるに至る、此に於てローヅは總べての會社及び私有者を合一するの議を提供し、八十九年遂にそを實行するに決し、乃ち規則を立てゝ金剛石の採量を定め、一時に濫採して估價の低落を來たすを豫防せり、四千萬圓の資本を有し、年々採出する所の頻三千萬圓、其の三分一は即ち純益にして實に二割五分の配當をなせる者、而して皆なローヅの命令の下に歸し、ローヅは斯くして富裕なる大會社の長として雙手に數千萬圓の鍵鑰を把握せりと雖も、財を蓄積するは毫も念とする所ならず、今日此に一千萬圓を與ふれば明日一錢を懷にせず、全額を擧げて己れの理想とする所の事業に投下し了り、其の萬金を

有するも之れを一身の私慾に費さず、擧げて公共の費用に充つるは宛も夫の社會主義と適合せり、自身には然らんとして然りしに非ざれど、全然同一の理想に根據し實行したる所互に偶合せり。

ローヅのオクスフォルド大學を卒ひしや、偶〻アリストートルの人生の目的を定むべしといふに感じ、如何にせば當さに可なるべきやを覃思究尋せり、而して四圍の群衆を視て其の大抵財を作るを主眼とせるを察し、乃ち財は果して目的とすべきやに考へ及びぬ。抑〻富は一個人に如何の用を爲すものなるか、或る程度迄は愉快を與へ、又た勢力を增さしめんも、之を超越すれば單に負擔に苦むの重荷たるに過ぎず、一週能く千圓乃至一萬圓を蕩費し得るも、其より

以上を費やさんは如何なる金満家も幾んど爲し得ざる所、爲めに金満家の收入は遙かに支出に超過し、而して剩餘の金錢に對する始末は端なく幾多の恐怖憂慮を醸生するの因由となる。實に金錢は、蓄積するに從ひて企業心を減耗し、又た從ひて想像力を壞滅するもの、人の之れあるに因りて政治的行路を阻碍せられ、其の他何種の事業をも成就する能はずして止むもの甚だ多し、加ふるに貧縁乞求する者蠅蚊の群がる若く四周より聚集し來りて煩に堪へず。彼等財產家は金あるが爲めに企つる能はず、考ふる能はず、又た爲す所ある能はざるなり、唯だ恰も黄金佛の若く端坐して祭櫃の積量を料るを事とするのみ。

然らば政治は如何と考ふるに、若し自身に試

むれば斷じて成功すべきを疑はざるも、其の結局を察する、則ち必ずしも希望すべきに非ざるを看る、南阿に在りて最上の地位を占むるはケープの首相たり、然るも知る所の若干の首相を觀るに、たゞ交る〳〵或は就職し、或は反對するのみにて、而も其の多くは皆な凡庸の徒、中には能く位置を固守するあれど、亦た徒らに黨員の歡心を迎ふるに汲々とし、獨自の心に畫りて敢行に堪へざるなり。然らば宗教は如何と考ふるに、イグナチユス・ロヨラが、カトリック教は神の選教として世を救はんとする所なりとの信仰を抱持し、其の衰運を挽回して更に之を鞏固にし之を擴張し、兼ねて他宗派の撲滅を計りし如く、基礎を創建して新生面を開くは寧ろ快心の事たるを失はず、然れども今日カトリッ

ク教を標榜して新生面を開かんこと太だ難たし基督教すらも人の此に對する信念漸く薄らぎ、復た十六世紀時代の執迷狂妄なるに似ず、地獄極樂を比喩して他の迷心を皷舞するは既に過去に屬す、必ずしも之れ無きを斷言し得べからざるも、其の之れ有るを吹聽して衆人の歸依を促がさんは復た望みて得べからず。

稽へ來たれば、取るべきは基督教よりも寧ろダルウヰンの說にして、徹頭徹尾進化說を採り、萬般の進歩渾べて自然淘汰の理に據るとするを當れりとす。若し宇宙に神ありとせば、必ず自然淘汰を遂行しつゝあるべく、其の之を遂行するに何を以て機械と爲すや、吾人を以て其の一に加ふれば、如何なる事を成さしめんと欲するや、かくして遂次に推考せば究極正義自由及び

平和の三者に歸着す。世界に最も崇貴なるは正義にして、其の能く人と人との間に成立するは尤も完全なる社會の徵候たり、二を自由と爲す、之れ無ければ正義は得べからず、三は平和なり、戰鬪的帝國に反對して產業的共和體を勃立するの謂にして、之れに依りて正義と自由に光輝を與ふるなり、然らば此を成し遂ぐるの方如何、白色人種は黄色人種に比して遙に優勢を占めり黄人は僅に一太陸の半隅に蟄居するも、白人は歐羅巴及び亞米利加を占め、更に濠洲に植民し亞細亞を支配し、尙ほ且つ阿弗利加にまで進及せり、自然淘汰に於て優者として勝を制する者の白人なるや明けし、然らば同じく白人中に在りて何者か尤も優なるやと云はゞ即ち英人なり蓋し最も多く世界の爲め正義を唱へ自由を起し

且つ平和を保ちたること英人に過ぐるあらず、故に神にして果して存在せば、此の阿弗利加をして出來得る丈け英にするが其の眞念の一なるべし、吾人は能ふ限り阿弗利加を英にするに努力して造次も怠るべからずと。

ローツが數千萬金を自在にし得るの身を以て敢て一私の蓄財を計らず、其の入る所を擧げて悉く之を公共の事業に投下するは其の意志茲に在り、心情の潔白なる彼が若きは殆ど今世に比を見ざる所とす、先づ人生の目的を定めて躬を社會の渦中に投じ、然る後累りに意を事業界に得て能く幾千萬の巨額を一呼に醵集すること世或は其の儕あるべしと雖も、而もその自身に私有するも將た何の益かある、適〻以て行爲を制縛し恐怖を增生するに足るのみ、寧ろ此を人と

して宜しく爲すべき所に投下して普く天下公衆の利益を增進するに若かずと爲すに至りては世間有り觸れの偉人豪傑の到底企て及ばざる所たり。他日金錢に對する觀念の竟に一變すべきは疑を容れず、乃ち其の時に到ればローツは先達の重もなる者として崇視さるゝなるべく、之を要するに其の思考は大體に於て頗る能く徹底せりと謂ふべし。

但し自然淘汰より大觀して白人獨り世界に展擴せり、故に世界の事を處理するもの亦た白人ならざる可らずといふに及で大に謬れり、白人遂に勝を制すべしとは道理に據れるに非ずして當下の出來事に因りて臆斷せるのみ、其の必ず然らざる可らざる所以を發見し得ざるなり、徒らに顯現せる出來事に據りて事を推斷せば意に任かせて謬戻せる判斷を下し得べし、斯の意味を以て推言せばローツをして匈奴の歐羅巴に侵入せし時若しくは成吉斯汗の下に蒙古の亞細亞歐羅巴を統轄せし當時に生れて其の狀を目睹せしめしならば、乃ち自然淘汰の理に因りて黃色人種の畢に全世界を統一總轄すべき運命を荷へるを推斷せしならん、而も全世界は畢に黃色人種統轄の下に來らずして、白色人種は依然國土を襲有せり、此の若きは一時の出來事に外ならずして敢て道理を將て確定し得べき底のものに非ざるなり。其の白人中に在りて英人最も優勝者たるべき運命を有すといふも、亦た同じく近世の出來事に據りて推斷せるに座す、一人種を以て有らゆる他人種を統轄せざるべからずといふは寔に謬戻せる安斷にして、何故に全世界を

統轄するの一人種に限らざるべからざるやは到底解釋せられず、矧んや一人種を以て有らゆる他人種を統轄すといふは行爲に於て既に正義を喪失せるなり、他の自由を剝奪せるなり、又た其の平和を危害せるなり、撞着も亦た甚だしからずや。若し果して宇宙に神ありとせば、全世界に雜多の種族の散在群居せるもの亦た決して偶然ならざるべし、各種族皆な應當の使命を負ひて之を踐行するが爲め世に出でしとする方却て理に幾し。

素より人種には他の附屬と爲り隷從して以て安居する者あり、米洲土人の若き、阿弗利加黑奴の若き皆な然りと雖も、此外他の附屬と爲らずして數百千年來國土を固守し獨立を保持せる者あり、異種族の互に國を成して存立せるは相

ひ琢磨して以て進歩を促せるもの、今後亦た然るべきに非ざるか。今日國土を固守し獨立を保持せる程の者は皆な要素と爲れる者にして、正義と自由と平和とを保つが爲には各種族皆な互に並存共立するを可なりとすべし、既に並存共立するを可なりとせば、大小懸隔の餘りに過度なるは適〻大なる者の跋扈して正義自由平和を壞ぶるの因とすべく、乃ち小なる者は今より擴がりて稍〻大と爲り、大なる者は今より縮みて稍〻小と爲るが當然なり、英や露や國土餘りに庞大に過ぐ、他日人口更に多きを加ふれば地の利に從ひて幾個の獨立國を樹て聯邦を形成せん亞米利加の大なる、名も實も既に聯邦の組織たり、此の勢にして愈〻進まば更に若干年を經過するの後には世界全体を擧げて一大聯邦を形成するに至るべく、個々皆な聯邦の要素と爲り、各〻特色を發揮して互に切磋琢磨せば依て以て大に自然界を活用するを得べきなり。ローヅの言ふ所、前大半は道理に根基し、後小半は出來事に據りて道理を構成せるの誤謬に陷れり、而も是れ獨りローヅのみならず、英人は概ね多少此と相似たる謬想を抱持す、且つローヅのかゝる謬想に陷れるは畢竟偶爾の誤謬に出づ、其の一呼して數千萬金を運轉し得る躬を以て毫も一身の私利を計らず、之を人として當さに爲すべき所に投下して銳意世界の上に經營しつゝあるは眞に近來稀に見る卓偉の人物と爲さゞるべからず、世上滔々たる金滿家此に較ぶれば實に蝶蟻に等し。

阿弗利加の發展

阿弗利加の地は駸々乎進みて止まらず、其の將來世界に於て重要なる部分を占め、而して英國最も勢力を有すべきは殆んど疑を容れず。顧みれば阿弗利加の内狀漠として世に知られず、リヴヰングストン先づ鍵鑰を脱して秘密の門戸を開き、次でスタンレーの跋渉蹈査して情狀を發露したるの世界に歡迎されしは今猶ほ人耳に新なる所、爾來所謂暗黑世界なるもの遽かに洞開せられんとし、而して僅少の歳月に實に幾多著大の變動の續起するありたり。クルーゲルとセシル・ローヅとは此の暗黑世界に二個の大立物として目せられしが、今や其の一たるローヅは既に逝いて亡し、後嗣の以て產を托すべき無きより、莫大なる遺產は或は事業の繼續に投じ、或は學事の奬勵に供し、而して其の故宅は日夕起臥せしまゝに英魂を弔ふが爲に保存せらる。他の一たるクルーゲルは國滅びて身を遁くに地なく、初め獨逸皇帝より煽揚せられながら、敗餘漂浪の身と爲りて謁見をさへ拒まれ、憤悲煩悶、僅かに恨を著書に托す。一は志望成るに垂んとして身死し、一は身存すと雖も志望全く敗る、兩雄の境過轉た人事の變轉究りなきを想はしめずや。

蘭人と英人と、南阿に於て相ひ和せざりしや久し、蘭人の群居せし者、英人の其の土地を領して干涉するの煩に堪へず、相ひ率ゐて北方ナタールに徙り、政廳を創始せしが、英人追尾して到り、兵力を以て強ゐて屈伏せんとせしかば、

再びナタールを英人に委ねて北徙し、オレンヂ自由國を建立す、英人復た追尾し來りて其の地を掠めんとし、蘭人此に應じて所在逆へ戰ひしも、遂に敗れて更にヴァール河を絶ぎり北方の山に逃竄し、猛獸を驅り、土民を逐ひ、艱苦と缺乏とに打ち勝ちてトランスヴァール共和國を創建せり。共和國成りて後ち暫らくの間は牧畜農事を營みて堵に安んずるを得、幸に外力の壓迫を被むるを免かれたりしに、新たに英國と葛藤を生じ、決然として戎器を執りて起ち、英の陸軍省は大擧之を擣くの計畫を作すに及びしが偶〻グラッドストーン內閣成りて平和を旨とし杜國は名に於て英國皇帝を奉じ事實に於て獨立を保つに決し、事漸く緒に就きたり。然るに黃金の發見に次で金剛石の發見あり、兩がら鑛脈廣大にして殆んど無盡なりと報道せられてより世界の視線は一齊に此處に集まり、中にも英人の運命を拓かんとして來り集まる者續々接踵し爭ひて之が開掘に從へるが、其の互に生計を異にするよりして英杜兩國人の間に衝突を生じ、前者は內地人と同一の權利を享受せんとし、後者は新來者の權利を制限せんことを計り、双々固執して下らず、ローヅ乃ち非常手段を以て一擧に事を解決せんと試み、ジエームソンを使嗾し兵を帥ゐて急に事を擧げしむ、而も杜人は之を前知して途に要して戰ひ、其の結果ジエームソン以下捕虜と爲り、罪責延いて關係人に及び、ローヅの計畫一たび畫餅に歸せり。

是の時に當りてクルーゲルの名聲正さに籍甚能く新成の共和國を南阿に振はしめんとは列國

民の均しく囑望せる所、然るも剛邁不屈なるローヅは之が爲に挫けず、大なる失敗に遭ひて更に一層反撥し、必ず初一念を貫徹せずんば已まざらんとせり。爾後爭端を激成せんとするの勢を現ずる數次、巧みにクルーゲルを挑撥して遂に兵火を交ふるに至りしが、最初互に他を侮蔑し、戰爭の久からずして局を結ぶべきを必せり。杜人は思へらく、英は海軍の雄强を以て鳴るも、其の陸軍は與みし易し、況んや我れ深く內地に退居して固守せば、幾萬の英兵ありとも能く爲すこと無けんと。英人は思へらく、杜人如何に慓悍なりとも元と烏合の徒たり、我が兵一たび臨まば之れを壓屈する易々のみと。戰爭の容易に終を告ぐべきを信じて兩國の兵互に逆ひ近づきぬ、而も戰の進むに隨ひて杜兵善く戰ひ、英兵屢〻敗れて動もすれば退却の態あり、英の將軍にして軍法會議に問はるゝ者さへ生じ、而して杜兵の善く戰ひて累りに功を收むると共に、クルーゲルの聲譽は更に益〻揚がり、列國の中密かに之を援くるもありしが、ロバーツ元帥の出でゝより、英軍の勢力漸く回復し、キッチナー將軍に賴りて包圍攻擊の計畫を實行するに決す、計るらく、杜兵は出沒自在、加ふるに地理に明かなるを以てす、廣濶なる土地に散布して轉鬪する、則ち之を如何ともするに術なし、其の總てを包括して一擧に之を討滅するに非ずんば竟に終りを見ると能はずと、此に於て杜兵の散屯せる地域外を繞りて軍隊を配置し、陣營と陣營との間に鐵網を緊張し、以て一個の杜人をも潛出し能はざらしめ、宛も漁者の張りたる網

を徐々に縮め魚を中央に追ひ集めて絞ぼり捕ふるが如くす。杜兵は戰はんと欲するも戰ふ能はず、日を經るに從ひて次第に逐ひ詰められ、將士或は戰死し、或は投降し、トランスヴァールは爰に全く英國の領有に歸しぬ。

英軍の海を航して南阿に到りしもの總計四十四萬八千と稱す、かゝる多數の兵員を將ゐて僅少の杜兵を征討すること何人も之れを爲すに堪ふるが如きも、實はキッチナーに非ずんば爲すこと能はざる所といふ。此の如き多數の兵員を統率し、而も急がず慌てず永き日月を積みて遂に能く全功を收め得たる、以て戰略に於て規摸の大なるを見るに足るべし、但だ戰術に於て特に稱すべきなしと言はるゝも、若し他將をして之が實行の局に當らしめんとする、功の成否豫め判すべからず。而して此の五十萬に近かき英軍中には更に附屬物の混せるあり、士官の多くは、妻を伴ひ、妾を伴ひ、或は又た醜業婦を侍らしむ、もと遠く離れて僅少の敵を包圍し、日月を經過せば戰はずして勝を制し得べきを想ひ軍に在りて無聊を感ずる特に甚だし、乃ち日夜飮宴嬉戲して以て自ら忘る、嚮に將校の然るのみならず、部下の多數は皆な新募の兵、軍紀弛廢し、往々にして放恣情を縱まにするあり、此等をして故國を思ひて還へるの念を萌さゞらしめん爲めには、亦た多く供給する所あるを要し、暑時炎熱に堪へ能はざるの苦を脫がれしめん爲めには、亦た種々に防暑の準備を整ふるを要し、其の他被服食料、皆な遍く供給せざるを得ざるき。かくて戰時を通じて費せる總額二十六億六

千萬圓、內十四億三千萬圓は公債を以て募りし所なるが、實に驚くべき巨額の費用と謂ふべし、此の如き費用を以てせば何事か成らざらん、唯だ富力の大なる、他國の能く企て及ばざるを見るなり。

斯くまで巨額の金を投じて辛うじて領有せし後、抑〻如何にして其の失へる所を償ふべきかを察するに、領有せし土地に對する將來の希望の甚だ大なるものゝあるなり。從來英國は阿弗利加に勢力を伸ぶる大なりしかど、他の列强亦た各〻洲內に多少勢力範圍を畫ぎり、以て英國の獨自專行するを許さゞりき。阿弗利加洲の總面積は百八十四萬方里、內歐洲列國の領有する所、佛國は六十萬八千方里、英國は四十三萬二千方里、獨國は十四萬九千方里、葡萄牙は十二萬六千方里、伊太利は三萬方里、西班牙は二萬七千方里にて、此外に埃及及び英領蘇丹は十六萬方里、コンゴー自由國は十四萬四千方里、土其古領は六萬四千方里、アビシニアは五萬一千方里、モロッコは三萬五千方里、リベリアは八千方里なり。數字の大を以てすれば佛國第一位に居ると雖も、其の多くは則ち沙漠たり、英國は次位に在りと雖も、埃及及び英領蘇丹は實に英國の支配下に在るもの、之を合せ算する、優に數字に於て他と拮抗するに足り、而して皆な最も利益ある處なり。昨三十五年の調査に據れば、英國より阿弗利加への輸出額三億二千萬圓、內、英國領よりするもの二億一千八百萬圓にして、埃及よりするもの六千四百萬圓に上る。阿弗利加より英國への輸入額は二億六千一百萬圓、內、

英國領よりするもの一億二千萬圓にして、埃及よりするもの一億一千萬圓に上る。英領より出づる首たるものは黃金、之に次ぐを金剛石とす、當初種々の衝突絕えず、爲めに鑛山に要する勞力の太だ不廉なりしも、其の鎭靜せると共に賃銀は廉となり、採掘の額從ひて多く、延て世界に於ける黃金の相場を狂はしめんとす、金剛石も採拾の最甚だ夥しく、若し之を自由に市場に出すとする、則ち市場の價格頓に下落するや疑なし、但だ聯合會社の嚴なる規則あり、採拾の額夥だしきの故を以て濫りに市場に出ださず、常に其の額と價とを定め、市價をして輒く低落せしむるに至らず、更に歲月を經るに從て黃金も亦た濫出を防がざるべからざるか、將た金剛石の最更に一層多くして斯かる制限を加ふるの到底効なきに至るか、孰れにせよ今後世界の寶に影響するの大なるを知るべし。

黃金と金剛石との外、如何なる貴金屬若くは寶石の出づるやも測り難く、森林の如き、土生のものは成長遲しと爲し、濠洲より護謨及び柳を移植し、歐洲より松杉類を移植し、以て之が成長を計れり。洲内の狀況世に知られてより日猶は淺く、將來如何か變するやは全く判明を缺き、唯だ寶の夥しく藏せらるゝことのみ確知せらる。而して夫の所謂セシル・ローヅの夢なる阿弗利加縱貫鐵道は次第に其の步を進め、北カイローより南ケープタウンに至る二千二百八十里の間、北よりせるはカルツームまで通じ、河流を除きて延長せること五百六十里、南方よりせるはサムシの附近まで通じ、ケープタウンより以北五百八十里の間に亘たり、全線路の一半以上、既に全く開通す。未だ敷設を了へざる中間の地は久しく疑問として存せし所、一時は獨逸領を通過せしむるの議ありしも、尋でコンゴー自由國を通過せしむるに決し、着々步を進む、想ふに其の鐵道の更に延長し、舟運に依りてナイル河と聯絡するは遠からざるに於てせん、獨り中間なる河に接する一面の沼池は以て鐵道を敷くに難く、何れの地點より何れの地點を經由すべきかは疑問に屬す。而して縱貫鐵道の完成する、更に橫貫鐵道の計畫さるゝを見るべく、現に獨國はザンヂバールよりタボラに向ひて着手せるが、阿弗利加の開くるの速かなるは洵に世人の均しく驚歎して措かざる所とす。

英國が莫大の金を投じて南阿に新領土を拓きたる、得る所失ふ所を償ひて餘りありと謂ひて可、更に今日の勢を以てして益〻開くる、折れて英國の支配の下に入るもの一層多きを加へん。但だ廣大なる領土の其の管轄内に屬するも、後ち或は合衆國の故轍を蹈むことなかるべきか然らさるも事實獨立の形を備ふる加奈他濠洲の如きことなかるべきか、チェムバレンは能く之れを統轄して永く英國の管治に屬せしめんことを思ひ、セシル・ローヅは之をアングロ・サクソンの所有たらしむると共に、又た獨立のものと爲すべきを念へり。畢竟英國との關係の鏈鎖は時に因りて或は弱く或は強きを見んも、アングロ・サクソン民族が勢力を著るしく伸長するは茲にも亦た見るを得べく、其の大に亞米利加に勢力を伸張したる如く斯地にも大に伸張すべ

きや必せり。而して如何なる社會の其の地に成立するかと觀るに、當初牧畜農事盛んに行はれ、貧富の懸隔甚だしきなく、皆な平等に生活したるに、既にして金坑及び金剛石坑の續々發見せられ、一攫百萬の富を獲るの珍らしからざるに及び、贅澤品の輸入に次ぐに地代の騰貴を以てし、加ふるに流行病又は天候の爲めに畜類の斃死する多く、爲めに農夫牧者等は俄然貧困に陷りつゝ轉じて勞働者の群に投ずるを好ます、富を得る者の多きに反比して窮困する者益〻其の數を增せり。又た近かく戰爭の起れる、之に依りて巨利を博せる者ありしも、損失を招き打傷を被り家族離散せるも少からず。凡そ一時の事に因りてする變は久からずして回復するを期すべきも、全體の勢一に鑛山に因りて決する彼が

如きは、貧富の差固より他に於けると類を異にすべく、竟に如何の度に達すべきやは測り知られず。且つ阿弗利加の富は主として鑛物より成り、他洲より徙居する者は皆な都會に集まり、耕種を念とする者の如き極めて僅少、特に田地を有する者さへ次第に之を棄てゝ都市に轉じ、耕作は猶は見るべきに至らず、牧畜農業の盛んなる遂に期すべからざるに似たり。而して人を役する、專ら白人を用ゐ、異人種を排斥するの傾向あり、唯だ人の少なきが故に土人を雇使すれど、土人も亦た猶は之を開拓するに充分ならず、乃ち更らに亞細亞人を備はんとするに、既に制限の嚴なるものあるを奈何せん、要するに鑛類のみを以て俄に富榮し、限りある鑛山を除けば則ち荒蕪の地大部分を占むる處に於て如何

ぞ健全なる開明社會の成立するを見るを得んや眞に疑問たるなり。

チェムバレンは南阿を巡回して往日の敵人を調和するに勤め、ボーアの勇氣を稱し、今後必ず英人と一致協力すべきを言へり、ミルナーも亦た能力を以て推さる、政局に於て大なる失錯を演ずる無く、必ずや序を逐ひて經營を進むるならんと雖も、畢竟是等は既に進步せる民族の上に於て甚だしき混雜の生せざらんを期するのみ此の僅少なる民族を措て而して廣大なる土地の

兩洋思想の接觸

人種の上より觀れば印度以西多く白人種を混し、寧ろ歐洲と起原を一にするもの、然るに東洋の思想といへば印度をも波斯をも包含し、苟

も亞洲に國する者は種族を問はず擧げて皆な此稱の下に一括し、埃及よりして地中海の南岸に位する者亦た時に幷せ稱せられ、其の稱呼の漠

たるは言ふを須ゐずと雖も、而も斯の若きは殆んど一般を通して慣用され來りたる所のものなり。近年列國多く眼を東亞に注ぎ、阿弗利加の宰割を移して支那に轉じ、競ひて經營を之れ事とし、各〻將來に就きて種々臆度する所あり、西洋の思想と東洋の思想と如何に接觸すべきやを尋ね、先づ古來歷史に顯表せし所に照らして兩個の文明を差別し、其の重もなる條目として說を作して曰く、東洋は厭世的にして西洋は樂天的なり、東洋は總體を重視して個人を輕視し、西洋は個人を重視して總體を輕視す、然るも東洋は總體を重視しながら同情に乏しく、西洋は個人を重視しながら同情に厚し、東洋は唯だ己れ生を營むの安穩ならんを欲し、特に進みて難險を冒さんとせず、西洋は閑居して安に耽るに堪へず、邁往勇進して新たに獲得せんことを勗む、爲めに東洋は機械を工夫して天然に打勝つこと甚だ稀れなるも、西洋は工夫に繼ぐに改作を以てし天然に打勝つこと頻りなり、獨り東洋は人生に就きて絕對的に觀するに傾き、西洋は之に關して攻ふる所頗る膚淺、而して其の思想の因りて分かるゝところ、一は佛敎の播宣する既に久くして斯る觀念の深く浸染し、皆な宛も蓮華臺上に靜坐し熟ら世の無常を瞰するの風あり、一は基督敎の播宣せる亦た久しく、之れが化育の普きよりして、各人皆な進取活躍を好み、猛奮して礫刑だも恐れざるの狀あり、其の兩々趣を異にする、彼此相ひ對比するに及びて益〻然るを覩ると云爾。從來の勢ひ西力の東漸に伴ひ西洋の思想の遠からず東洋を壓するは爭ふべからざる現象なりしに、近時に至り西人動もすれば東洋の思想の或は勢を得來らんとするを想察することゝ爲れり。云ふ所の東洋の思想の勢を得來る、一には政治觀に於てし、又た一には人生觀に於てするとの事。

政治に於てするとは、露西亞の擴大よりせるなり、露は歐洲に國し白人に屬すと雖も、其の文明は西洋的といふよりも寧ろ東洋的たり、ピヨートル一世の己れ變流ながら、銳意西歐の文明を吸收し、頻りに改革に勗勉せしより、上流社會の其の化に浴するもの多く、一時は兩半球中最も世界的なるは巴里に亞ぎて即ち聖彼得堡なりと認められしに、近代に至りスラヴ精神の發揮漸々旺盛に赴き、國中の人期せずして謂へらく、露西亞は自ら露西亞の文明を發揮せざるべからず、西歐の文明は今や既に頂巔を過ぎ、向後唯だ降下すべきのみ、故に露西亞を以て新たに文明を創作し、漸次之を世界に普及せしむるに努むべきなりと、此に於て素と西歐の文明を主とせし上流社會も相率ゐてスラヴ精神を主とするに至り、剩へ勅諭の發布ありて敎育制度を一變し一に露西亞的觀念を發揚すべき事となりたり。夫の宮廷に在りて勢力尤も赫燿せるポベドノスチェフは公々然意見を發表して曰く、西歐の文明は悉く虛僞なり、自由と呼び人權と號し、讙譁奔狂す、斯くして已むこと無くば唯だ社會の破滅を招くの外なし、露西亞大して世界を救ふの要素は獨裁と宗敎と村族社會とに存す、皇帝は國務を敏活に運爲し、民人の宗敎心は之に要する大結合の大勢力を作るに足る、統一、

單純、服從、恭敬、此等は實に露西亞の文明が由て形成すべき所なりと。人生の品位、個人の獨立、人權の擴張、乃至多數の位置を高ひる事の若き、復た眼中に入らず、偶〻眼中に入る、則ち害毒として斥けらる、言ふ所は頗る奇怪に聞えんも、ボペドノスチェフ其の人の威權赫々として國内に振ふより、感化の及ぶ所甚だ廣くして且つ甚だ大、これ以て略ぼ露西亞の何情なるかを推すべし。加ふるに露の兵力を擁して世界の政治舞臺に雄揚すると共に、其の抱持する所の主義も自然に境外に傳播する傾向を現し、列國競ひて帝國主義を操持し、總体を主として個人を抑へ、自由や人權や爲めに幾んど價値を失ひ、たゞ偏に兵力を用ゐて他を壓屈せんことを欲ず、是れ往日の東洋流と稱し視て以て野蠻の遺風と爲し卑しみ郤ける所のものならずや變化も亦た甚だしとせざるか。

歐米に國し、肯て自由を貴び、人權を重んじ、且つ開明主義を以て基礎と爲し、若の、次第に專制を尊び獨裁を旨とし、且つ帝國主義を基礎とせんとする彼が如くなるに、更に他の一面に於ては基督敎の轟々皷吹に努めたりし正義と人道とは亦た漸くして價値を減じ、人々個々冥想して人生を絶對的に觀ずるに傾けり、ショッペンハウエルの前世紀の中期遽に盛んなるを致しゝは實に之が前兆たりし。彼は佛者たり、厭世者たり、普通の事は何たるを問はず總べて之を厭忌し、たゞ深く觀じて測るべからざる所に潛まんとせり。ニエッチエの猝に盛んなるを致しゝも亦た然り、彼は前者と異にして個人を主とせるも、其の個人は最も能力に富み權勢を握れる極めて少數の個人を指し、他の總べては悉く此の極めて少數なる者の下に隷從せざる可らざるのみならず、此の極めて少數なる者は道德的規則の能く律すべき所に非ずと爲せり、かゝる奇矯なる說の今日に勢力を占得しつゝあるは以て傾向の存する所を察すべし。固より歐米列國の上下皆な一般にかゝる傾向ありといふに非ざるも、舊時西洋の文明として世界に鳴りしもの〻近年に及び或は根據を失はんとするあるは掩ふべからざる事實なり。憂ふる者は更に謂ふ、印度の思想は幾分か歐米人の頭腦に浸染せるも其の土はもと熱帶圈裡に位置し炎暑爍くが如くして多く白人の棲住に便ならず、之に反し支那は僻して溫暖和煦、多數の白人を收容するに堪ふ、若し一方に北露の南進して之を開拓するあり、兼ねて列國より來り移住する者接踵比踵するあらば、多くの白人は茲に支那の風を帶ぶるとなるべく、その支那の風を帶ぶるの結果延いて西洋に影響する大なるものあらん、支那も日本も均しく佛敎國にして、儒の之を斥けしに拘らず、人心の根抵は實に佛敎によりて養はれたり、近時歐米人は漸次道理を賤みて、唯だ權力を之れ崇むの狀あるが、斯の風彌々長じ、一方に於て荐りに兵力を皇張し、其の前に正義も力を失ひ倫常も基脚を占むる能はずして、各自たゞ無常を觀ずるに至らば、全く東洋の文明に化し了せもるものと爲すべしと。此類の事、從來の狀勢に徵するに、言ふ所の多少當るもの無きに非ずと雖も、初より東洋と西洋とを區別し、

而して東洋は彼が若くして西洋は此の如しといふは、元と大に誤れり。何爲ぞ東洋と西洋とは斯る有樣に區別せらるゝや、歐米人の之を解釋する者は首たる原因として佛敎を擧ぐれども、佛敎は原因たるよりも結果たるに幾し、其の東洋的なるは東洋に產せしが故のみ、東洋は何故に東洋的にして、西洋は何故に西洋的なるか、討尋し來れば究竟圍繞物の相ひ同からざるに歸せざるか。

人の言ふが如く亞細亞と歐羅巴とは地形全く反對なり、一は曠漠にして航運の便少く、一は水陸錯綜し港灣多し。面積に比例して海岸線の長きは其の長きだけ開化に益するは既に明白にして、歐洲は斯る地の利を有し、且つ山河の按排自ら多樣の境域を畫す。往昔希臘が眇たる小

土にして、而も地勢の複雜なるが爲め數個の獨立市府を形成し、各〻兵を講へて角逐せしが如く、歐の邦國各〻險に據りて固守し互に相ひ下らず、全洲を招て之を統一すること頗る難かりし。羅馬は武力に托して統一の功を了し餘威加はる所遠く洲の外に及びしかど、其の管轄は久からずして名のみと爲り、各地に散住せし蠻夷皆な自治の體を爲し、帝國の瓦解せると俱に全然割據の態を作せり、爾來盛衰隆替の變累りなりしも、武たび統一を能くしたる者遂に有るなく、時に非常の人の出でゝ斯の野望を懷けるあるも、蹴躓して成ること無きに終りたる、洵に自然の數たり。亞細亞は廣濶にして變化に乏しく、且つ變化あるも餘りに大に過ぎたり、山はヒマラヤの如く、雪白皚々として天に參はり、

重嶺蜿蜒として千里に亘り、中央を截畫して南北の交通を遮斷す、否らず則ち中央亞細亞の如き、支那の如き、渺漠たる幾百千里、中に山嶽の以て境域を劃定する少し、英雄鴻圖を費する者あり、出でゝ地を拓けば、則ち域中の平地を殿定して邊境に達せずんば已まず、然る後子孫權を失ひて異姓の英雄新たに起るに會ふ、復た一方に割據して父祖の遺業を守る能はず、全を保つか、全を喪ふか、一に全を旨とせざるべからず、統一といふ觀念の常に主と爲れるは固と理の當然たり。而して歐に在りては權利の思想尤も盛に、亞に在りては義務の思想尤も熾んなるもの、亦た前者に於て弱の強に抵抗し易く、後者に於て弱の盡く強に服從せざるを得ざるに因る。但だ歐羅巴は海岸に彎曲多くして港灣に富むといふも、そは全洲を擧りて悉く然るに非ず、港灣に富むの地方あり、又た富まざるの地方あり、其の比較的富まざるの地方は自ら東洋に似ざる無しとせず、現に歐洲大陸は英國と比して百事稍〻東洋的たり、更に露國を將て爾餘の列國に視れば其の東洋的たること一層較著なり、其の土地は渺茫として平野遠く亘り、中に於て重巒複嶺の以て境域を劃する無きは宛如亞細亞的地勢にして國家の權力特り此處に強くして嘗て個人の權利の重んぜられざりしは必然の結果ならん。

人生に就て見るも、夫の印度內地の若く、人々事功に懦くして坐して靜慮すべき處にては自ら無常を感ずるに至る、今人は基督敎を指して樂天的なりと稱すれど、中世に在りては總べて

の寺院は悉く厭世的にして、構造の方亦た東洋と相ひ似たり、爾後暗黑の境を出でゝ開明の域に入り、歐洲の文明玆に社會的に化し急速の進歩を現せしも、其の餘りに急速なるよりして忍刻の遺風尙ほ頗る殘存し、特に近時に至り再度往日の舊狀に復へらんとするの勢あり、何事も皆な兵力を用ゐて他を壓伏するに黽め、自由も人道も之に向ひて抗敵の力を失はざるを得ず、表面は人智の開發と工藝の發達とに因り大に中世と觀を異にするあるも、內實は想ふが如きにあらず、思想の再び中世に似んとする、深く怪むを要せず、必ずしも東洋の影響を俟て然るに非ず、然るも其の中世に復へらんとするリーバーバリゼーションの稱あるだけ退步たるに相違なきも、實は進步の一階段たるべし。往きに專ら個人の自由を主とせしに當り、そが進步は智德の進步に割合して寧ろ過度ならんとする傾向あり、動もすれば放肆に流れ、一たびは大に統一の必要生じ之が制裁を受くべき運命に會せり況んや各國兵を擁して互に相ひ爭ふの避くべからざるに際し、形勢の此に迫るの頗る免かれ難きに於てをや。且つ又た學術技藝は長大の發達を爲し頻りに天然の障礙に打勝ちつゝありとはいへ、精神的事態は中世と比較して未だ著しき進步の見るべきあらず、哲學や心理學や皆な微細なる分類を事とすれど、人生に關しては猶ほ親しく心に體するに到らず、徒らに口に喋々するに止まる。嘗て印度人の歐洲に觀光せし者の、各種の機械は實に進步し中には能く造化の巧を奪へるあるも、人は猶ほ野蠻なりと言へりしは、

必ずしも其の頑冥にのみ歸すべからず、印度人の思索は正鵠を失へりと雖も、其の自ら人生を觀じて之を心に體し之を身に律するは彼れ歐洲人に較ぶれば寧ろ到れる所あり、其の觀光の餘に斯の言を作しゝは己れの到れる所を以て他の未だ到らざる所を料りしに非ざるなきを得んや。ショッペンハウエル及びニエッチエの唱道せる奇矯の說に和する者の頓に衆きを致せるは既に思想の分析的なるに厭けるより更に潛心罩思して身を不可思議界に驚せんことを欲するが故にして、一應は道理を輕視するの嫌あれども、玆に思を潛むるの頗る深きは或は大悟徹底の境に近邇する所以たらんか、恰も猶ほ朗晴に先ちて陰雨あるが如し、一旦昏朦たる暗黑世界を通過すれば、玆に再び燦爛たる文明の世に接するの日あるを期すべし。

然れども世界の土地は千種萬樣なり、彼此皆な均しく同一義を以て律する能はず、たとへ全世界としては自ら一定の道を進行するの狀ありとも、而も列國個々に就て察す、則ち各〻其の是とする所に從ひて進前するの要無しとせず、同じく有無を交換するにも、或る者は自由を得策と爲し、或る者は保護を得策と爲す、甲乙相ひ採る所を殊にするは、自他互に國情の異なるが爲めなり。是れと同樣の理に據り、太陸に國する者は自ら海島に國する者と國情を異にし、此を以て彼を摸するの甚だしく謬妄に陷るあり若し露を以て英の爲す所を摸し、英を以て又た露の爲す所を摸す、共に國情を知らずとの嗤笑を招かん。蓋し大陸に國する者は一種大陸の風

ありて、其の變遷も內外相ひ應じて促さるゝこと多けれど、海島に國する者は群を離れて單立特居し、徐ろに太陸の變遷を計較して其の利とする所を行ふを得べきなり。且つ太陸に國する者と海島に國する者と國情の相ひ同じからざるは瑣細の點に於て尙ほ察するに足る、例せば太陸は陸軍を主とし、島國は海軍を主とし、而して陸軍を統帥せる者の廟廊に上りて政權を總攬せるは古來其の人乏きも、海軍を統帥せる者の廟廊に上りて政權を總攬せるは未だ曾て之れ有らず、是れ故に他の太陸に群峙せる邦國に於て

武斷政治の行はるゝを觀、島國に居る者亦た必ず之に倣はざるべからずとして偏に模擬に甘ずるあらば、失誤の悔なきを欲するも得ざるべし。故に東洋と謂ふこと勿れ、西洋と謂ふこと勿れ、唯だ須らく地勢と時情とを察し、地の宜しきを料りて我が特性を發揮すべし、歐の如くして亞なるもあるべく、亞の如くして歐なるもあるべく、或は謂ゆる歐亞の孰れの部類に屬せざるもあるべし、單に東といひ西といひて判斷するは洵に守柱膠柱の類のみ。

來るべき水力時代

十九世紀は蒸汽時代の稱あり、汽船、汽車、其の他一切の機械、之を運轉する皆な蒸汽に依り、その依る所廣く且つ大にして、之を應用するの方法亦た隨ひて較著の發達を遂げたり。往時汽船の初めて大西洋を橫絕せる、實に三週日以上を要せしに、今は能く一週日を費さずして之を了り、其の初に方りて噸數一千なるを最大とせしに、今は二萬噸なるもの少からず、更に三萬噸の大船を起工するの計畫あり、進步の著るしき、以て知るべし。汽車線路の全世界に延長せる既に二萬里に上り、價格總じて七百億圓と稱す、之に加ふるに設計の既に終はれると、今新たに着手せるとを以てする、則ち其の驚くべきを見るべく、且つ顧みて有らゆる工場に用ゐらるゝ蒸汽の裝置如何と檢する、其の効用の偉大なる、實に言句に悉くすことを得ず。然れども蒸汽の力は元と石炭を焚きて生ずるもの、若し石炭の供給なくば此の偉大なる力を得んこと難し近き二十五年間、電氣の應用寖〻盛んと爲り、漸次蒸汽に代はらんとするの傾向あるは掩ふべからざる現象なるが、是れ亦た多くは石炭の力を藉りしもの、畢竟石炭の火力の蒸汽となりたるの更に轉じて電氣となれるに過ぎず、即ち石炭に含蓄せる力の發して外に表はるゝに止まる故に斯る力の一般に使用せらるゝ限り、之が使用に適合するは石炭の產額多くして運搬の便利大なる地に若くは莫し。而して英國の如き、其の石炭と鐵とに富むに於て最も之に適合すと稱すべく、或は國內に埋藏せる二者の量を推測して其の盡くる日は是れ英國の衰頹する時たるべしとの說あり、他の諸國も亦た自國內に埋藏せる石炭の量幾何にして其の盡くる日の何れの時にあるやを推算するもの多く、其の一旦盡くるの後ち將た如何に處置すべきやは卽ち疑問に屬

せり。

然るに當今石炭の供給猶ほ書きざるの時に際し、更に水力の之に代はらんとする徴候を現せり。元と石炭は太陽の力に依りて生じたるもの、其の現に應用せらるゝは自然の力なれども、既に一たび用ゐるの後は則ち散滅して跡なく、二たび求めんとするも得べからざるに反し、水力は之と同一の効能を表はして而も永世竭くるの期なしと謂ふを得ん。アルプスの氷河は今や「白炭」の名を博し、四時白色を呈して變せざるの狀あれども、其の一部分は融解して斷えず落下し來る、乃ち落下し來る力を用ゐて電氣を起し工業を興し、或は貨物を運搬し、之を用ゐるの度年と共に進歩せんとす。アルプス山麓の佛國地方特にグレノーブル附近に於ては此の力を籍る頗る多く、電車も之に依り、製紙事業も之に依り、印刷事業も之に依り、材木事業も之に依り、製油事業も、製瓦事業も、セメント事業も、之に依り、凡そ百般の事業、皆な其の力を籍らざるなきに至らんとし、常初寒微なりし地方も一旦此力を應用し得べき設備の成るある、種々の事業相ひ續いて創始せられ、忽にして繁盛の地と化するの有樣にて、要するに氷河の力は無盡藏といふも不可なく、この流れを受くる地方は將來如何の富榮を爲すに至るや殆んど測られざらんとす。

但し氷河は世界到る處に之れ有るにあらず、之れ無き邦國は其の水量の多きに於て敢て他に遜るなからんとはいへ、猶ほ降雨の量多ければ則ち河水漲溢して氾濫し、天霽れて降雨なき旬なる、河水の量痛く減ずるを免かれず、其の水力の時に從りて增減ある、自ら四時雪を戴く氷河の間斷なく同一の水量にて流下するを機械に應用し得ると異なるなきを得ず、是れ故に河水の量時に從りて多少あるを防ぐが爲め上流の溪谷に堤防を築きダムを造り、降雨に引き續て溢し來る水を此處に貯滙し、かくして雨多き時も少き時も常に同一量の水流を供給し得べき裝置を作し、以て一には灌漑に使にし、一には電氣を起さしめて機械の運轉を資く。これ氷河の四時同一なる流れを籍るべき便を缺ける地方の近來最も力を用ゐて起工せる所、西班牙は富力既に全く盡竭すと稱せらるゝも、尙ほ此の天然の力を應用せんとして頗る苦心經營する所あり、其の効能の見るべき亦た少からず、伊太利も亦た汲々として力を此に注ぎ、英國にても北方の山地に於て頻りに應用するを見る。米國に至りてはナイヤガラ瀑布を使用して電氣を起すの裝置を作せる既に久しく、現に使用するは僅に其の一小部に過ぎざるも、因りて生じ來る所の力は則ち洵に大なり、若し一層裝置を大にして盡く其の全部を使用するに至るとする、是より生ずる力の絶大なる當に愕くべきものあらん由來此の瀑布は單に巨大なるに因りて名あるのみ、風景の佳良なるあるに非ざれば、大なる裝置を作して盡く之を機械に用ゐるとも特に惜むべしとせず。ミッシシッピーの洪流の時に氾濫して沿岸の沃地に甚だしき損害を被らすや、此處にも亦たダムを造りて滙水の場に充て、以て其の大なる水流をして四時均一ならしめんとの

計畫あり、其の漸々竣工するに應じ、灌漑に利するの多きと電氣を起すの大なるとは頗る目覺ましきものあらん。阿弗利加のナイル河には順次ダムの起工あり、アッスアムの如き既に著るしき効能を現はせり、總ずるに今日にては水力を使用するの便利最も多き處は又た富を得るに最も有望なる處として目せらる。

且つ啻に水力の機械に應用せらるゝの盛なるに止まらず、運河の開鑿せらるゝ亦た益々盛んならんとす。往時蒸汽の未だ大に用ゐられざる、陸路に於ける運輸交通の便は運河を以て最と爲しゝが、尋て蒸汽の一般に使用さるゝと伴ひて其の用衰へ、世界列國復た新たに之を試むるなきや久しかりし。然るに近年に及び運河の開鑿更に漸く盛んと爲り、或は鐵道の時代過ぎて將に運河の時代に復へらんとすと言ふ者あるに至り、貨物の大なる若くは重きを運搬せんとする、實に運河に依るの利益多きに若かずとせらる。

試みに從來開鑿されたる運河の首たるものを列擧せば、千八百六十九年に竣工せし蘇士運河は、長三十六里、幅百八尺、深三十一尺にして、費額二億圓。九十年に竣工せしクロンスダット運河は、長一里餘、幅二百二十尺、深二十尺半にして、費額二千萬圓。九十三年に竣工せしコリンス運河は、長一里半、幅七十二尺、深二十六尺餘にして、費額一千萬圓。同九十年に竣工せしマンチェスター運河は、長十四里、幅百二十尺、深二十六尺にして、費額一億五千萬圓。同九十七年に竣工せし維廉皇帝運河即ちキール運河は、長二十四里餘、幅七十二尺、深二十九尺半にして、費額八千萬圓、千九百年に竣工せしエルベ運河は、長十六里餘、幅七十二尺、深十尺にして、費額五千萬圓。此より外、更に小なるものゝ各處に開鑿されたる多く、其の更に大なるものに至りては、ニカラグワ運河の工事蹉跌せし後、パナマ運河の開鑿次第に進捗し、將に久しからずして竣工を見んとす。而して露國はバルチック海と黑海との間に二三河川を利用して一大運河を開鑿するの計畫あり、其の成就する曉、南北の軍艦商船を連絡するを得て、利する所極めて大なるべきも、今や財政困難の窮境に瀕するが上に東洋經營に忙殺せらるゝを以て、容易に其の着手を見るを得ざるべし。墺地利より獨逸に至る間にも亦た累りに運河開鑿工事の計畫せらるゝあり、路に當る深山重峰を截開して之れを通せんとの意あり。英國は從來海峽艦隊を提げて佛國を制抑するを以て主たる目的と爲し、國防及び運輸交通の事多く此を原として計畫したりしが、前きに獨逸皇帝の『我國の將來は海洋にあり』と叫破せしより、更に東方に面する防禦をも堅固にするに決し、其の第一の手段としてファースよりクライドに至る一大運河を開鑿し、以て自國の軍艦をして自由に東西相應ずるを得せしめんとす、其の果して如何の徑路を通じて開鑿するかは未だ決定するに至らざれど、兩間の地は概して天然に舟楫に便なるの處たるに因り、之を截開するは非常の困難事にあらず、此の大運河開鑿の企畫にして一たび成る、依りて以て軍艦の數を節するを得べく、商船に便宜を與ふる亦た大、憶ふに今後着